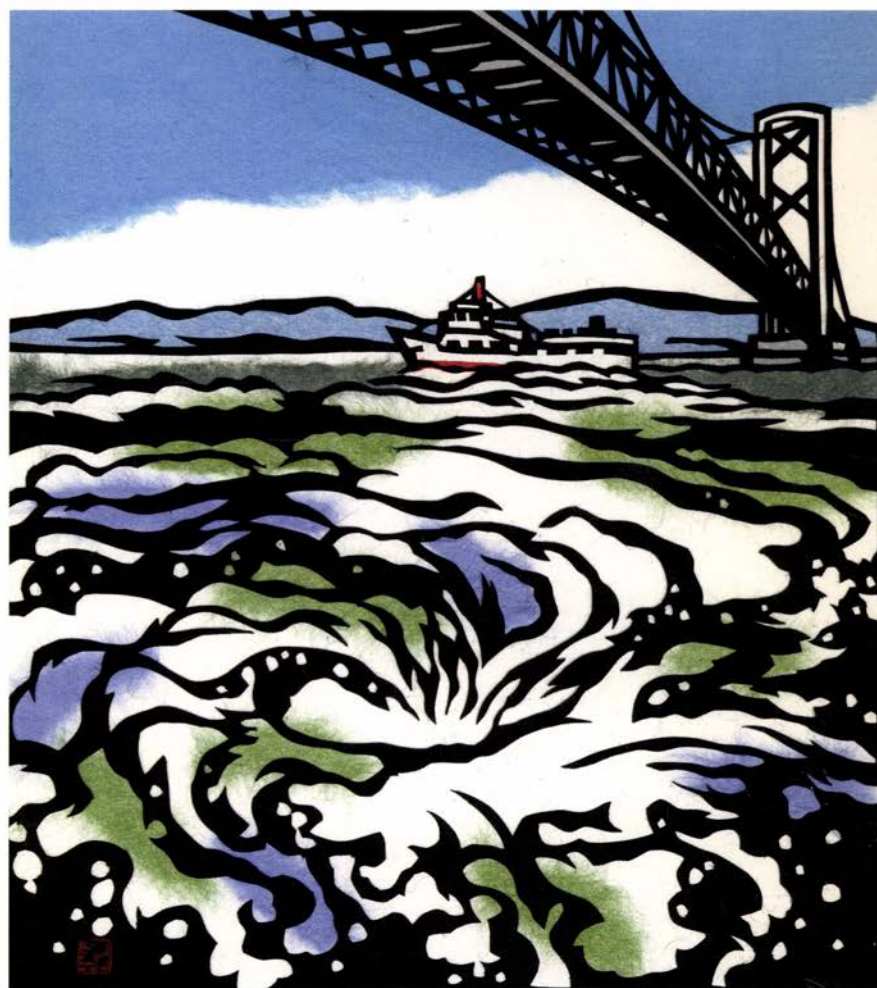


川柳塔



昭和四十二年一月九日第三種郵便物認可
平成二十年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九七〇号

日川協加盟

No. 970

三月号

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)

川柳塔の句とは

河内 天笑

川柳塔同人になって間もない頃の雑詠句で「ふりむけば尼僧もすこしふりむけり」を発表したひと月ほど後、倉敷在住の不朽洞会員本田恵二郎氏より色紙大の和紙に見事な達筆でこの句を認められて拙宅に恵送された。一度もお会いしていない先達からの思いもかけぬ宝物に少なからずの驚きであった。学生時代に八瀬大原方面を歩いた時の事を材料にしたものだ。

同じ昭和四〇年代の半ば、当時、丸紅飯田の社内川柳講座を持たれていた川村好郎氏のお誘いで「どんぐり川柳会」の仲間たちと一緒に箕面へ吟行した日の当日雑感で「せんど見たあと天ぶらになるもみじ」を出句したところ天の句を披講される前に「一体誰やろかこんなユニークな思い付きは」と満面に笑みを浮かべて披講された。川柳としてどんな句がいいのか右も左も分からん私にとって、雲の上の先生からお褒めいただく事はその後の作句に対する概念が少しずつ出来て行く。「これが川柳塔の句だ」などと今でも烏滸がましくて言えないが、前号に並べた何句かはどれも雲の上の先達に褒められた作

品なので私には大いに指針となった。

平成の初め頃に田辺灸六氏が会長をされていた「たましま」の記念句会に招かれた時の事である。細長い畳の間の選者室で選句の最中に私の真前で立膝で選句をされていた薫風先生が不意に大きな声で「これが川柳塔の句や」と隣席の寺尾俊平氏に見せられ、私も「どんな句ですか」と覗かせて貰えば、なんと私の出した句だ。「悪人も嬉しい時は笑顔好し」でカップ賞を頂いた。

当時よく怒られはすれ褒められた事のない薫風主幹の一言だから大変な重味を感じた。このたった一回きりのお褒めの言葉は忘れられない。

以上三回に亘って「川柳塔の句でどんな句」の問いに対して自分の作品の中からいくつかの例句を挙げてみた。今後、機会に恵まれれば私の目で捉えた「これが川柳だ」という作品を過去、現在の同人、誌友の作品から見つけて列挙したいものだ。

自選句

何遍も住処を替える如何様師

屑籠を外して猫に笑われる

バス停のベンチは糞が落ちている

警察と暴力団の鬼ごっこ

歩道つつ走るチャリンコ許せない

天笑

〃
〃
〃
〃



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

年甲斐もなく直球を投げ急ぐ

伊勢田 毅

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「鳴門の渦潮」

■巻頭言

川柳塔の句とは

河内 天笑 ……(1)

松にしたがいそろかしこ

西出 楓楽 ……(2)

川柳塔(同人吟)

河内 天笑 ……(4)

温故知新

木津川 計 ……(46)

川柳塔の川柳讃歌

(39)

木津川 計 ……(47)

自選集

西出 楓楽 ……(48)

水煙抄

西出 楓楽 ……(52)

路郎句抄

新家 完司 ……(77)

愛染帖

新家 完司 ……(78)

誹風柳多留 一篇研究

32

檸檬抄「欠ける」

鈴木公弘・西口いわゑ共選 ……(84)

松にしたがいそろかしこ

西出 楓楽

某日、物置の本棚を整理していると、義母の蔵書であった麻生葭乃句集「福寿草」が出てきた。(敬称略、掲出句は葭乃作)

A6判(文庫判)上製本で、潰れそうになった外函を何カ所もセロテープ補修してあり、義母がいかに大切にしていたかを物語る。序文はもちろん夫である路郎で、改めて読み直してみると身辺を捉えた女性らしい句は、現在でも決して古く感じない。

昭和30年といえは葭乃は62歳、老境に入り心穏やかな日々の中での刊行と思われる。

葭乃は堺の豪商河仁の外孫である河盛彦三郎の、一人娘として生を受けた。六歳の時に母を失ったが、彦三郎は再婚せず葭乃を掌中の珠として育てる。彼は盧村と号して俳句や川柳を嗜み、葭乃を連れて川柳句会へよく出かけた。それがきっかけで路郎に望まれ、父と同居を条件に大正2年結婚の運びとなる。

浴槽へずらり立ったは皆わが子

ねんねこと仲よい冬を続けて来

葭乃は、子供の死亡率が高かった当時とは

一路集

「騒ぐ」……………小寺花峯選……………(86)

初歩教室

「卒業」……………宮尾みのり選……………(86)

秀句鑑賞

「パン」……………山本柳昌選……………(87)

■エッセー

「水煙抄」……………太田保昭……………(90)

■エッセー

「春がくる度に一番線ホーム」……………政岡日枝子……………(92)

■句集鑑賞

「平成20年」……………池森子……………(93)

■各地句会だより

「京都塔の会」……………井上桂作……………(94)

追悼 岡井やすお氏

……………三宅保州……………(95)

二月本社句会

……………都倉求芽……………(96)

各地柳壇 (佳句地十選/山口光久)

……………加川靖鬼……………(97)

柳界展望

……………三月各地句会案内……………(98)

■編集後記 (ひとこと/伊達郁夫)

……………希久子・尚士……………(100)

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

目頭を抑えて過去は振り向かず

執行稲子

いえ、四男五女のうち二男二女を幼くして失うという不幸に見舞われる。また、昭和11年、専門家なき世界は発展せず、と「川柳職業人」宣言し、ひたすら川柳に情熱を傾けた路郎に、家計を預かる蔑乃の苦勞は並大抵のことではなかったと想像できる。

節約の床葉牡丹が活けられる
墓口も襟も子供の拂い下げ

実は私はまだ作句をしていなかった頃、蔑乃に二度会っている。はじめは昭和39年にわが家で「川柳雑誌婦人友の会」を持った時である。蔑乃を中心にした20人ほどのその会は年一回、回り持ちで開かれていたようで、唄や踊りが出て皆さんの笑い声が絶えなかった。今日川柳塔の女性の纏まりは、こうした会に端を発しているのではないだろうか。

二度目に会ったのは昭和46年、義母の句集発刊の相談に付き添って、生駒のお宅へお邪魔した時である。当時78歳で小柄になつておられたが、存在感ある佇まいに圧倒された記憶がある。その後昭和56年、89歳で天寿を完うされるまで第一線を退いておられた。

近頃、もう一度路郎川柳を学ぼうという声が上がっているが、路郎を偉大ならしめた蔑乃の存在を、忘れてはならないと思う。

福寿草松にしたがいそろかしこ



河内天笑選

神戸市 田中章子

お正月太るモードに切り替わる
これも愛鈍感力を差し上げる
魚棚のにぎわいやみつきの晦日

言霊を大事にいつも有難う
ギブアンドギブそういう人になれるかな
いつ来ると問わず待つてゐる親心

枚方市 伊達郁夫

本気ではないな返事が軽すぎる
マツタケは窓開けてから焼き始め
親の脛少し齧って喜ばず
身に覚えあるから情け湧いてくる
押して引くその懐に遊ばれる
宅配の便が素通りする師走

松山市 宮尾みのり

顔借りて貸してしがらみ抜けられず
人形になるほど女甘くない
他人から見ればゆとりがあるらしい

押して引くその兼合いも年の功
金銀銅その順番にある落差
失敗の数だけふえた小抽出し

倉吉市 牧野芳光

嘘を呑み丈夫になった喉仏
背中見る人が居るから裏切れぬ
母さんのちりめん皺に味がある
祈るには生臭すぎる手が二つ
時々鳥も内緒の話する
雀とは変わらぬ口でホーホケキョ

吹田市 山本希久子

奇蹟起らぬままに景色はモノトーン
充電も放電もして春を待つ
約束が違うじゃないか神ほとけ
たくわえたユーモア底をついてきた
一日一笑今日の喜び噛みしめる
宿命の痛みを持つてゐるハート

堺市村上玄也

あなたからとうちゃん今はおじいちゃん

ダイエツトできたら皺が増えてきた

美味そうに食べて老母を喜ばす

家の飯に勝るものなし年老いて

孫も世辞言うようになり淋しけれ

手も足も草臥れていて口達者

鳥取市永原昌鼓

税金の無駄遣いああもつたいたい

捨てるのはもつたいたいが偽装うみ

年金も貰わず逝くのもつたいた

札幌の雪像こわすもつたいた

美しい地球で戦もつたいた

自分から命捨てるのもつたいた

松江市津川紫晃

出すぎたと打たれた杭の懺悔録

父と子の絆深めている湯舟

だまさない土に迷わず種をまく

背を押されほどよい風に乘せられる

荒れた海テトラポッドに体当たり

雪明かり街を童話の夜にする

東かがわ市川崎ひかり

パチンコに負けた日猫も近寄らず

人生の当りは夫と会えた事

赤面もせずに嘘つき世辞も言う

またひとつ成長もなく歳をとる

美しい仮面にすぐに騙される

大仏さんあの掌はきつとぬくぬくだ

黒石市相馬一花

箱口令敷くと流れてゆく秘密

どのそばも一癖がある味自慢

反対派の酒を悠々飲む度量

忠告をする美人には髭がある

席順に青筋立てる祝賀会

健康な時は判らぬ健康美

鳥取市植田一京

シングルもいいさ気楽な旅に出る

身に余る幸せ思うこの頃よ

花束に百の言葉が込めてあり

人生の旅に道連れ居て楽し

七十路まだうろうろ思い定まらず

幸不幸混せて人生味があり

高槻市佐甲昭二

相談に呼ばれて重荷背負い込む

呑み込んだ我慢の虫がせきを切る

何もかも知ってる口が重くなる

正論も多数決から叩かれる

真白いままで敗れたユニホーム

一笑に付された恥をバネにする

高知市 小川 てるみ

千両の赤が華やぐ冬の庭

まだチャンスありそう旗を振っている

欲しいなあチンパンジーの記憶力

さわやかな笑顔信じる他はない

沈黙を守る臓器へ油断する

お正月たっぷりお酒飲みました

三田市 北野 哲男

五欲まだばんばんのまま古希と喜寿

ドンチャッチャ共に踊って来たワルツ

グリコまだ走ってまっせ戎橋

大ジョッキしんみりとした顔はなし

故郷の母カボチャ煮ているはず冬至

予習せずシナリオ通りお葬式

宇部市 平田 実男

人柄が良過ぎ万年課長補佐

国境より厳しい隣りとの界

傷に塩なすりつけてるレポーター

公約に賞味期限があつたかな

棒読みの答弁答にはならず

同居してないからいい嫁いい姑

京都市 三宅 満子

つり堀に亭主預けて妻は翔ぶ

何もない幸せ感謝初日の出

感性のアンテナ張ってウォッチング

家来です妻の後ろでカゴを持つ

大根と豆腐の白さ嫉ましい

プレゼントお金が良いと子に言えず

海南市 堂上 泰女

考える葦だけが知る不眠症

明日の身を知らず生簀に泳ぐ鯛

水槽の魚も強さという序列

お絵描きはやっぱりパパとママの顔

いち早く孫タンポポの首を刈る

陽の囁きにうっかり咲いたタンポポよ

堺市 石堂 潤子

歌神に賽を弾んで初詣で

福袋やっぱり買わぬ事にした

立ち止まり鳥啼く寒の空見上げ

大好きな切子グラスへ冬の薔薇

正月のテレビ観ている馬鹿らしさ

かまぼこは昔の儘に板に載り

豊中市 坂上 高栄

事始め京の雅に花を添え

薬害を聞け血の叫びこの涙

携帯の便利電報より早い

携帯のマナー守って住み易し

UFOの話大臣頼ゆるむ

虎落笛デイサーピスの空に吹く

唐津市 樋口輝夫

妻の手に触った途端ドキッとす
通夜帰り黙って妻と手をつなぐ

余所様の出物見にゆく回収日
合格を包み切れずに触れ回り
無い袖も振って孫へのお年玉

唐津市 山口高明

ストレスが空に弾ける射撃場
修羅いくつ母を哭かした過去の父
肌の合うふたりが辿るけもの道
泣くものか泣いたら亡父に嗤われる
賞金をかけた犯人捕まらず

唐津市 井上勝視

迎春の老妻は今宵も襦がけ
膝の孫回らぬ舌で般若経
哀れなる肋撫でてる初湯かな
解ってはいても度を越すひとり酒
司令塔妻で良かった五十年

唐津市 坂本蜂朗

この母にしてこの子あり参観日
どんぐりが背比べする参観日
子供らもあきれるような参観日
ご亭主の顔見てみたい参観日
先生の数足らない参観日

唐津市 市丸晴翠

検診の結果を語る妻の笑み
年金の家計簿削る術はない
帰省子にあつという間のお正月
喜寿を越え傘寿へ草鞋締め直す
牡丹の花の吐息聴いてる雪囲い

熊本市 永田俊子

ナショナルの名が消え昭和遠くなり
夢の続きがまだ見たい落椿
昔はと言いたくなるから困り
そのうちにと思えばかりで日が暮れる
まさかの時に私も持つてる変化球

熊本県 岩切康子

今時はリクエストされ夕仕度
さくら蝦ジャコが嬉しい老不ズミ
お相手を思ってお心少し邪魔
米と粉にこだわり自家の餅作る
内緒ごと聞かぬ存ぜぬ放棄する

熊本県 高野宵草

無精した怠惰も年齢の所為にする
元朝の寝坊許すと街静か
平均寿命延ばす薬を飲みつづけ
後回しした用やつぱり忘れてた
老犬のお歳伺う散歩道

シドニー 坂上のり子

平川市 小寺花峯

かぐや姫の秘湯どこかにあるのかも
ねずみ年どこのこっちゃと寝てる猫
うつむいてウクレレ聴いてくれる猫
タイマーにそらドラマだと呼ばれてる
うっかりと相槌打てぬ友の愚痴

砂川市 大橋政良

ひとりぼっちの好きな私の影法師
脳天を突き抜けてゆく唐辛子
一行の詩に心酔の僕になる
考える輩よ考え過ぎぬよう
おにぎりを半分もらう仲となり

黒石市 佐藤古拙

煩惱を葬るように雪頻り
遠ざかる背をみつめてぼたん雪
吹雪やみ裸木毅然とそそり立つ
廃村に唇をかむ雪おんな
飛行機雲みるみる崩れ元の空

十和田市 阿部進

自分自身を磨き続ける若夫婦
天下り天国いまだ健在だ
DHAがマグロにあつて喜ばれ
行つて見る座敷ワラシの居る旅へ
古里に今もまだある何でも屋

同い年気をつけましょう計報欄
僕の持つ石はダイヤと競わない
十二支の最初に立ったどぶねずみ
叩かれた渴き図太い石に化け
還暦を迎えて髭は伸び続け

弘前市 福士慕情

渋柿の渋が抜かれて甘い柿
渺渺と木枯し背を押しに来る
雨音が止んで静かに積もる雪
除雪車がどっさり雪を置いてゆく
雪掻きもあと何年と思う膝

弘前市 今愁女

蒟蒻も哀れだなあと針供養
猫柳川面をのぞく絹の艶
練味噌のほろ苦くして路の藎
山朱莢が黄色に煙る春の庭
朝の道いぬふぐり群れ眼が冴える

弘前市 相馬銀波

何もない一日はくの農閑期
新聞を読み返してる農閑期
雪かきの汗が時計を止めさせる
差別語と気付いて語尾を改める
笑うこと忘れ欠伸の農閑期

弘前市 高橋 岳水
生きて行く人それぞれのスタイルで
一編のドラマ紡いで夫婦たり

いのちある限り罪科の石を積む
一病を背負い人間らしくなる
血中の脂肪に過去をあばかれる

弘前市 岡本 花匠
店の貌維持の招福通り庭
性善説サランラップに愛包む

いろどりを揃えて夕餉メタボ食
ストープにぶた汁炊いて笑いの輪
小春日の情にほだされ早春賦

弘前市 高瀬 霜石

針千本飲んでからする立候補
さあピンチここが男の証明書
気がつけば僕だけひとり反対派
にんげんを大の字にする青畳
定年来たるオーダーの服買えぬまま

弘前市 櫻庭 順風

表敬の子らで賑わうお正月
教え子に注ぐ眼差し温かい
誇大な表現 美辞麗句虚偽厭う
自己には峻厳他者には寛大だ
眼に石を直進させた草刈り機

健康法どれにしようか書籍店

この街はきれいカラスも寄りつかず
二人きりどっとカレーの日が続き
文化水準上がりゴミだけ増えてゆく
電話にも怖くて出れぬ詐欺事件

さいたま市 星野 育子
賀状ではまた会いたいね繰り返す
凧は子守歌ですサンルーム

サンルーム曇れば中は冷蔵庫
野良猫に聞いてみたのは処世術
組板の鰯が鮫鯨見上げてる

さいたま市 八田 敏

寄り添うて生きた妻なぜ先に逝く
老々介護終えて体調狂い出す
体不調みんな老化にまとめられ
手伝いに孫がこの頃値を付ける
生きてるか確かめ合っている賀状

東京都 岸野 あやめ

孫の婚眠る和服に袖通す
バラ色とゆかぬ余生のうすピンク
ステッキも十年余り持ち馴れて
喧嘩ならいつでも出来るから自重
処世術免許皆伝などは無い

弘前市 須郷 井蛙

東京都 清原悦子

冬木立私も春を待つている

座布団の位置確かめて人を守つ

欠け茶碗ふたつ静かに二重奏

人間が好きで泣いたり笑ったり

咲いて散るまで人生の一大事

東京都 小川賀世子

六十路の終章に凜と白椿

闘病の難所も越えてきた六十路

眼の病と二人三脚これから

黒いだしも昔のままの伊勢うどん

傘寿の姉囀む宴に時忘れ

国分寺市 野崎勝

煩惱を捨てきれないで古稀間近

旅に出る澄んだ空気が吸いたくて

狭くなる歩幅に無理はもうすまい

痛くても残ってくれる歯に感謝

すぐ切れて命の重さ見失い

武蔵野市 亀井円女

亡夫よお願い子よりも長生きさせないで

あの世へ逝けば亡夫と拝める初日の出

ひる鏡まあ欲の無いええ顔や

おんぶに抱っこ死ぬまでさせてくれた亡夫

死ぬまで夢を心は少女のまんまです

横浜市 菊地政勝

怒鳴られて腕が師匠に近くなる

人情の機微に触れつつ回り道

貧しさに耐えた昔をたぐり寄せ

怠け癖付いて布団を抜け出せぬ

定年をまだ老人にしてくれぬ

横浜市 小野句多留

日本国また下ったね通信簿

おじさんはケイタイ今のままで良い

五エンです無神論者の初詣で

中国の旅はテレビで我慢する

一人居に賞味期限は気にしない

富山市 島ひかる

双六の上がりに父と母が待つ

三日前さすった兄は温かった

二〇〇八一月十日兄眠る

般若経読んでこころを整える

昨日今日変わらぬことをして明日

可児市 鶴留百合

この陽気早くもうすぐ登山靴

連休のあとの職場はよそよそし

寒稽古湯気がポツポツと燃える肌

無人化の駅改札が他人めき

ふる里の地酒で祝う春祭り

可児市 板山 まみ子

ことほぎの日の出を拝む白い息
渋滞も話の種に里帰り

客人にやはり出したい手前味噌

説教は上の空でも酌をする

地図あれば退屈はない好奇心

静岡県 蘭田 獏 杏

マネキンのようにはゆかぬ試着室

仲良しも塾で火花を散らして

決断をしてから歩幅広くなり

ゴミを出すルールが違う町境

朝顔の枯れ蔓松にからみつき

大山市 吉田 幸子

居ながらの散髪妻は腕を上げ

価値観が違う夫婦のコレクション

肩パッドはずし流行へすまし顔

肩の荷が重たくかかる委嘱状

踏ん張って登った汗へ初日の出

大山市 金子 美千代

につこりと笑って見せる初鏡

買って来た方から減って行くおせち

酔ったふりしとく聞きたくない話

親切かおせっかいかとまた迷い

けんかする相手がいてとうらやまれ

大山市 関本 かつ子

過疎の村絵本のような雪になり

めでたさは婿のみやげの金箔酒

なるほどの席に着物の似合う人

両耳はしらふのままの無礼講

百均とシャネル口紅使い分け

尾張旭市 三浦 きぬ

今の世に単細胞は溺れそう

奥の手を出すタイミングむずかしい

シンブルに老後を暮らすはずなのに

プランターの小松菜今朝の味噌汁に

殿堂入りしそうな家具にかこまれて

愛知県 早川 遡行

一歩ずつ歩き登れぬ山は無い

ダケカンバこの世の旅もあと少し

シロヤシオ咲く頃にまた来たい山

山頂に喚声あがるご来迎

ストレスを溜めないように汗をかく

京都市 高島 啓子

多いめでいいかと肉屋さんが聞く

旧市街銭湯があり火事があり

佗助のさしでたことをせずに散る

そこそこというキリトリ線が解らない

ふる里のわずらわしさの中にいる

京都市 西村 益子

生きていますお知らせします年賀状
成行きにまかせ寝ている風邪の日々
小遣いにも値上げの波が来ますよう
落葉掃き焚火の出来ぬ袋づめ
生垣に亡父の残したネズミモチ

京都市 榎本 宏子

婿婿と私の息子呼ばないで
目が回る一日でした孫帰る
びつたりと寄り添い過ぎた肩のこり
生き方の下手な彼こそ信じよう
中国製が里のみやげに紛れ込む

亀岡市 井上 森生

古希からの元氣川柳ハガキ便（一人の平和運動）
粹にやる生ゴミ出しも買い出しも
哲学も情けも脳の絵で解かる（進む脳科学）
一念の冷水シャワー春恋し（満願間近か）
畏くも皇紀をなぞる御所ウオーク

長岡京市 山田 葉子

甘党ではないと今更言えなくて
生温いピリオド汚職断ち切れぬ
掛け声でもうジャンケンに負けている
水増しと見せぬ水増しやっています
チャンスには空振りの癖直らない

大阪市 谷口 義

体重計ふつうに食べておりました
運動靴履いているのはふつうの日
お月さんはいつもふつうの顔で出る
化粧してふつうの顔になりました
普通預金の通帳は暇である

大阪市 古今堂 蕉子

ITの力は今やモンスター
生きるのはむつかしい死ぬのはもっと
願いごと五つ頼んで五円投げ
真白な歯でした好きになりました
続く雨傘さし犬を散歩させ

大阪市 井丸 昌紀

数字だけ教えてもらいう給料日
とりあえず味方のような顔をする
待ちぼうけ携帯電話振ってみる
マニュアルの通り躡ける核家族
覗いてみたい天皇家の団欒

大阪市 池上 清治

納税が阿呆らしくなってくるニュース
宥めたら治まる夫婦脈があり
締め切りを綱渡りして年が暮れ
拍手湧き音痴カラオケ党になり
ベチャクチャをビタリ鎮める手を叩き

大阪市 神夏磯 典子

新年度愛の袋もと替える
スタートヘネズミが二匹従いてくる
私の時間が来たよ夫の大軒
閉めた蓋ぐつぐつ音を立てている
選挙選挙何を信じてよいのかな

大阪市 森田 明子

翌檜よそのまま生きてゆけばよい
帰省子のお世辞がうまくなっている
ずる休みして挽回の策を練る
裸木の枝の先まで個性の
線香で罪の匂いを消しておく

大阪市 小糸 昭子

若い足階段二段ずつ跳ねる
偶然に神がついたか駄馬の足
忘年会一人二人と抜けて行く
少々のゴミは片目で見てやろう
皇帝になりたかったのプーチンか

大阪市 板東 倫子

イヤリング揺らしケータイ聞く少女
都市砂漠孤独な人が多過ぎる
子を持たぬから頑丈な杖を買う
政治家も医者も許せぬ事をする
椅子取りに負けて今年も職探し

大阪市 小谷 集一

帯締めた論吉の束にある威厳
二十年偽装続ける白髪染め
惚けた振りまだ出来るから惚けてない
大きさを競うと中身薄くなる
負けて勝つ老人力を蓄える

大阪市 津村 志華子

神さまの祈禱料にもあるランク
山門の鬼より凄じ鎌の月
早起きの子年の老母でまめまめし
とんぼりの蟹が見ている様変り
身の程を弁え一歩引しておく

大阪市 渡部 さと美

福袋あんな夢なら買う気ない
寒がりのくせに出好きの着ぶくれて
よう咽せる食べるの欲ばつてるらしい
小豆好き おこわぜんさい小豆がゆ
吸いガラは見まわしさりげなく捨てる

大阪市 平嶋 美智子

見上げればお天とさんは上機嫌
句会には待っててくれる友が居る
つらくてもこの道変えるパワーなし
煮つころがし作って三日まだ飽きず
洗濯物叫びたかろう寒いよう

大阪市 津 守 なぎさ

雪景色ワイパーだけがせわしない
アルプスもすつきり初春の露天風呂
選挙権出来たハタチのお振袖
百までは生きるつもりのお振袖
春の音カニサボテンは朱で迫る

大阪市 松 尾 柳 右子

ねずみ年猫がどこかへ行ったさき
骨折に世間の温み貰う日々
お年玉いただくほどに老いにけり
しみじみと過去振り返る午後の雨
寒菊の匂い広がる四帖半

大阪市 中 井 萌

ふるさとの風に言葉も詠り出す
捨て切れぬ物に埋もれて年を越す
お互いに付かず離れず三代世
覚悟決め活断層の上に住む
退屈という贅沢がたまにある

大阪市 伏 見 雅 明

ありたけの知恵を絞って妻に負け
花園を土足で散らす自爆テロ
一二本までは陽気な泣き上戸
創業の血と汗にじむ古のれん
うまみ知りもはや元には戻れない

大阪市 岩 崎 公 誠

深深と頭を下げて舌を出す
年重ね丸くはならず牙をむく
女装して座って見たい専用車
脱いだまま三日転がるボクの靴
背の曲り古セーターが憶えこみ

大阪市 西 川 更 紗

狭いけど私の居場所つくつてる
母さんに通用しない作り言
茶柱が素敵な今日をくれそう
値上りのラッシュに沈む市場籠
あくせくと動いて不安追い払う

大阪市 升 成 好

魔がさしたなんて言葉で煙に巻き
飾らない夫婦で客の絶えぬ居間
いいジョーク四角い空気丸くする
気の毒なほど言い訳の下手な人
偶然にしてはびたりのタイミング

大阪市 榎 本 日 出

青信号安心してはいけません
ここだけの話おいしいので困る
美人薄命誰が決めたか当たらない
気にせんでええと言うから気にかかり
滑らかな口もいつしかやけどする

大阪市 榎本舞夢

朝食はパンと御飯で和やかに
別別の趣味を生かせて多忙です

台所まかせて私食べる人

長寿会役引き受けて若くなる

ゴミ放りも化粧していく見栄っ張り

大阪市 中村れんげ

偽善者が裏面で踊るこの日本

一枚の賀状に男らしさ見え

美の一字心に飾り夢を追う

美しく老いたし今日も読書する

だんまりに見えるがあれは眠る獅子

大阪市 小泉ひさ乃

お早うの笑顔は今日の潤滑油

友の愛楽しい時をありがとう

サービスの当てがはずれた民営化

隠し事なくて話題のない夫婦

タレントで名が売れ出すと選挙戦

大阪市 岩崎玲子

夫婦して復路スタート発破かけ

神仏わたし本音でお会いする

ここに来てやつとあなたがわかりかけ

これからも貧乏性の底力

幸せは育児楽しくやれました

大阪市 奥村五月

証明書なしでシニアの券くれる

カーナビが意地悪したか迷う道

湯の宿に都会の灰汁を捨ててくる

反抗期俺が天下と思ってる

仲人の口に乗せられこの苦勞

大阪市 川原章久

笑い皺隠す元日厚化粧

味見する母の小指が赤くなる

胃カメラの先が胃の底掻き混ぜる

雪の郷牡丹鍋から昇る湯気

一歩ずつ杖を頼りの初詣で

大阪市 大川桃花

うす氷踏んだことある遠花火

喋ってる間は消える頭痛

お向かいのミニに私の目が泳ぐ

ついで送りされて却って高くつき

公園に病人捨てる深い闇

大阪市 中村叡子

未だ六時も少し床に老いの新春

めでたさも金と健康揃わねば

去年から戎さんへもままならず

ナショナルの松下が好き大阪人

クリントン涙ぐんでも武器となり

大阪市 近藤 正

懲りもせずまたインド洋自衛隊
ほどの良い付き合ひ方が難しい
老舗でも新鮮なものと頼みます
大阪城異彩を放つ彬の碑
居心地が良くなつてきた仮の宿

大阪市 福岡 末吉

妻の技ひときわ冴えて笑む夕餉
何時になく優しい呼び声疎む夫
消去法でしたと妻の独り言
我ながら稀に閃き意を強め
せめてもと言葉を飾り義理立てる

大阪市 岡本 久峰

シベリアの寒さを想う寒の冷え
青い目にこき使われる自衛艦
医者知らずクスリ知らずに感謝する
あれこれと日日老骨に鞭を打つ
百歳現役めざして老いの勇み足

大阪市 川端 一步

元旦に三日坊主の計二つ
春ですれぬ明るい夢を見ることに
九条と彬の風が重なりて
春眠の犯人だるまさんだった
これからの道探しする古稀二人

大阪狭山市 矢野 梓

お互いの無事確かめている賀状
テスト前急に信心深くなり
神様に感謝忘れて叱られる
日捲りの今日の言葉に励まされ
テレビ見るたびに誰かが頭下げ

池田市 栗田 久子

肩ひじを張らねばいつも楽だけど
手助けはまだ当分はいらぬでしょ
勝ち負けは心のうちでつけている
聞き上手おのが短所も出しながら
簡略に難を飾って老いに春

和泉市 西岡 洛醉

白旗を上げよう今日は妻の勝ち
二ヶ月の生まれで寒い冬が嫌
レントゲン昔の儘の影残り
冬寒に湯豆腐うまい日を送る
花柄のまだ似合います妻元氣

和泉市 横山 捷也

黒少し残して古希の坂越える
富士山へ電車の窓を額にする
一人言ぶつづつ妻がそばに居る
写経して悟り切れない古希迎え
七変化してもいよいよ古希の坂

泉佐野市 山本蛙城

鍋のあとそのまま鍋の二三日

介護終え羽根がだんだん伸びてきた

ドロボーが来たら話をしてみたい

通販誌みな片付けて弥生尽

メイドインジャパンあのこと叩かれて

茨木市 藤井正雄

万歩計刻む快復への自信

持ち株が底値になった失語症

腰痛を宥めすかして牌囲む

時としてピエロを演じ生き延びる

句読点裏に隠してある本音

交野市 森本弘風

スカートの素足まぶしい朝の駅

酔って乗る電車隣に覚めた奴

三回忌焼香順も譲り合い

十四階明石大橋窓の中

朝青龍モンゴル流の勝名乗り

交野市 山川日出子

上勝町葉っぱビジネス日本一
(徳島父の里)

富士と竜亡父の手作り寺の庭

古い鐘深い音色の野崎寺

見晴し台見知らぬ同土野崎唄

亡母さんの結婚式は人力車

河内長野市 坂上淳司

旅になら初発電車も苦にならず

ふわふわと何と気楽なひとり旅

どのような顔を見せるか寒の富士

さあどうだこれが俺だと寒の富士

立ち食いの駅蕎麦何とうまいこと

河内長野市 植村喜代

有難う感謝感謝の年の暮れ

夫婦とはお互いさまに根比べ

次々と私の世話がいる夫

すばらしい一年でしたとまだ言えぬ

元旦からお世話になった救急車

河内長野市 山岡富美子

キャンブイン気合で溶かす霜柱

立たされた思い出がある木の校舎

矢面に立つと答が見えてくる

現在地確かめたくて立ち止まる

この辺で立ち上がりねば流される

河内長野市 村上直樹

もっと知恵あればとつくにお大尽

白黒をつけたらいつも妻が白

前頭葉絞り値上げに立ち向かう

戎橋ここからきつと新時代

風受けて立てば男は燃えてくる

河内長野市 水谷正子

八十路過ぎ五人寄るのに一苦勞

宵戎めつたに見ない人に遇う

子孝行年末年始まあ達者

私を励ました友ガンで逝く

品格も言うてられない長寿国

河内長野市 井上喜醉

人生へ開き直った喜寿の春

酔わされて素直になった腹の虫

特ダネが超大物を釣り上げる

聴覚の衰え老いの恐さ知る

年金が狂うと怖い長寿国

岸和田市 小島笑司

温暖化そんなのどこよ寒波来る

青テントどうしてなさる寒波来る

株冷えて世間も縮む寒波来る

灯油高思ひ知つたよ寒波来る

夜勤した頃思ひ出す寒波来る

岸和田市 雪本珠子

愛猫は喋らないけど空気読む

今日もまた猫の魔力に惹かれてる

適当に忘れて徐々に黄昏れる

人生はドラマ人間皆役者

シクラメンはにかむように咲いている

岸和田市 岩佐ダン吉

面子捨て淋しい僕になつてゐる

時どきは自分の甘さ突いてみる

体当り他には策はありません

汗流す慰めなどはいりません

とりあえず反討論をぶつてみる

岸和田市 原さよ子

長老の筆も話もまだ達者

核心をずばりつかれた目のおきば

あと一押し息が続かぬ老いを知る

日向ぼこ猫と大差のない気分

また値上げお札もあきればはてた顔

岸和田市 土橋房枝

生かされて己が余命を謳歌する

好きになろう息子が好きになつた女

泣いた日を笑つて話す顔の皺

走馬灯過去には感謝しておこう

娘とは母と女の話でさ

岸和田市 井伊東吉

年ごとに酒量減りゆく互礼会

顔見知り必ず出会う大病院

鍵無しの新車操作に面喰う

ピザの上のせた餅なら食べる孫

おみくじは来年引くと入試の子

岸和田市 堤 権代

バタバタとしないでも来るお正月
大吉が出るまでひいて初詣で

正月はわが娘がくれたセーターで
叶うなら走って坂をのほりたい
一人居になれて家族に気をつかい

岸和田市 森 元 ふみよ

独り居で愚痴もボヤキも風となり

碧い目が日本語たくみ道尋ね

老い心みえないように隠す術

箱根駅伝ハプニングあり慟哭す

強面の大臣やはり朱に染まり

堺市 志田 千代

年度末過ぎたらエイプリルフル

座ってる人はおおかた無料バス

あんなにも欲しかった服売れ残り

顔の皴写さないのが好いカメラ

空巢には足代ほどは置いておく

堺市 西村 りつえ

おみくじの吉を信じてねずみどし

今年こそ我が世の春を楽しもう

天使だな笑顔絶やさず気を配り

楽天家にも遂にきた五十肩

風を読み筋書き替えて行く若さ

堺市 矢倉 五月

包丁を研いで私の錆も知る

神様も陽気にやれと言うてはる

ポケットの多いバッグに遊ばれる

ごく稀に神が下さる甘い水

赤い字を足せばびったり家計合い

堺市 齋藤 さくら

無口さに慣れてふたりのお正月

健康であれば望みは持つてない

真つすぐな貴方の背中やせている

美人湯の効きめあったか露天風呂

凍てついた高野山道息を呑み

堺市 奥 時雄

僕のミスそんな楽しいことなのか

先輩は古稀の私を呼び捨ててる

晩酌を続けるためのランニング

女房が立つた隙見て酒を足す

デュエットの相手途中でいなくなり

堺市 山本 半銭

土が相手生まれた土地で枯れて行く

下宿してそれから故郷遠くなる

ええ日和家族の数のふとん干す

朝ドラが飛び飛びになる不摂生

合掌して食事感謝が倍になる

堺市 柿花和夫

四條畷市 吉岡修

雑巾を絞れた母に安堵する
のど風邪が呼びもせんに纏い付く
ハンドルを切り間違つて現在地
ガス抜きをして生き返る縄のれん
バーボンのロック男の顔で飲む

堺市 源田 八千代

ギブス付け不自由な日日の去年今年
家中の段差に気付く松葉杖
口ばかり達者になったおばあちゃん
通院と日常介助振り分ける
椅子机家具を使つて体移動

堺市 加島 由一

渦潮の底に太鼓の音がする
お茶の間の風景という猫と祖母
効用も読んでゆつくり露天風呂
キャンプイン今は補欠の背番号
頭から足から忍び寄る加齢

堺市 近藤 豊子

足の指むすんでひらく赤ん坊
ジーンズの腰しなやかなフラフープ
しなやかにでんぐり返る森光子
うしなつたものの一つにしなやかさ
天保山背のびしてみる海の青

今よりはいいと信じて未来向く
指いっぱいはいじき飛ばしてすつとした
今耐えているぶんいつか強い芽に
絵本から恋の手ほどき始まつた
罪のない顔なんてのは怪しそう

吹田市 瀬戸 まさよ

マーちゃんと呼ばせていますおばあちゃん
落葉のあとの神秘よかわいい芽
充分に生きましたのでお釈迦さま
百均もうまく使えば値打ちあり
小吉も末吉もよしハッピーです

吹田市 野下之男

仁王様呆れ顔して見るこの世
親友を道連れにする怖い道
幸せをちよつぱり恵む年金日
目に見えぬ糸が結んだ二人です
仲の良い池のあひるに教えられ

吹田市 穴吹 尚士

大晦日どこかへ行けと追い出され
顔はもう思い出せない年賀状
頃合いに妻の機嫌を取り結ぶ
熟年の離婚におんな懂れる
中年と気付いていない下つ腹

吹田市 太田 昭

身を護る棘とられてもバラは薔薇

三枚に下ろされてなお男なり

悪党の仮面を選んで悪びれる

冬枯れて活断層の上に立つ

満身創痍なんと哀れな蟹を食う

吹田市 須磨 活恵

太陽に向かって背伸び冬うらら

骨の髄までしゃぶる鯛の粗煮

句読点打ってきっぱり諦める

六Bを削り直してもう一度

正確に描けぬ三角丸四角

吹田市 大谷 篤子

昨日から無事の祈りを抱いたまま

大笑いそしてゆっくり毒が抜け

住みなれた庭に椿の笑い声

コンビニに時々ブーム売っている

一病を庇って予定立てられず

吹田市 木下 敏子

ちっぴけな倅を探す老いの春

御来光テレビの富士を見て拝む

細長くあきらめないで墨をする

老眼鏡掛けて今年も好奇心

年寄りに後期前期と区切られる

高石市 浅野 房子

シドニーへゴルフの旅に出かけたり(悼文さん)

出したのに来ず出さぬのに来る賀状

八十路坂母恋しいと思う日も

琴線にふれず問題にもされず

済んだことみんな忘れることにする

高槻市 富田 美義

詐欺ぎそう立場忘れて世間責め

雑兵も偉人伝読み夢を抱く

審査待つ菊師の顔にある誇り

歳取れば礼と謝の数も増え

暇潰し乗って見ようか口車

高槻市 執行 稲子

うっかりと嫁に漏らした里の愚痴

この洪き甘さに替わる柿の技

白味噌の甘さできまる春雑煮

しんみりと故人を偲ぶ千の風

師の手先扇返しの鮮やかさ

高槻市 左右田 泰雄

本当に困ったときになる無口

ほろいけどステレオもある青テント

遊園地よりもゲームで遊ぶ子等

困りますなアと受取る袖の下

次々と余罪が浮かぶしたたかさ

高槻市 傍島克治

高槻市 井上照子

自画像が妻の加筆で醜男に
老春が足早やに過ぎ焦りだす
化粧して素顔隠せば偽装罪
地獄耳私は情報ブローカー
堅い椅子ばかりで勤続四十年

高槻市 峯村勲弘

初対面互いに古希で意気が合い
サスペンスの流れ途切れるコマーシャル
気持だけ美田を残し使い切る
人類の驕りを砕く温暖化
梅開き命はじける宮参り

高槻市 生田義一

紅白もじいちゃん一人蚊帳の外
おめでとう声をかけられあんだ誰
淋しいなあ年賀葉書も半減し
お正月羽根つき風上げ古き夢
賞味切れ貼り替えきかぬ老夫婦

高槻市 大崎侑子

まあまあと鎮めるふりで煽ってる
デモ隊の鎮めに入り殴り合い
自己中の曰く自分を抑えてる
憤懣を胸に抑えて遺産分け
吠える気も萎える底なし謝罪劇

絆とは何ぞと思う親に斧
招き猫あくび押えて客を待つ
お世辞にも若いと言えぬ顔を塗る
名物もうつかり近所配れない
婿殿の気になる煙草まだ止まぬ

高槻市 指宿千枝子

お日さまに心たつぷり暖まり
紙風船お部屋遊び一つ増え
美しく燃えて紅葉の円舞曲
大男連れてちわわが散歩中
辺地へもチュウ吉チュウ子年賀状

高槻市 杉本義昭

初日の出明日の希望が光り出す
愛されている幸せにきらきらと
冷たいね愛しい人の手を包み
白菊は疑いもせず白く咲く
お茶漬のさっぱり味で生きてます

高槻市 乙倉武史

平成の鼠猫など怖がらぬ
メタボ猫鼠の美味さ知らず老い
積んどくの本を崩して寝正月
親しんだ明るいナショナル衣替え
退屈を託つ正月万歩計

高槻市 西谷 治三郎

豊中市 吉田 あずき

盃洗を使うお店と縁が切れ
七三のときには胸に櫛を入れ
美しい国もつかの間また汚れ
めおと箸これで生涯苦勞する
右に杖左傘さし背にリュック

豊中市 安藤 寿美子

手も足も幾星霜を経た傷み
歳月を待たせておいて飲んでいる
歳月がみな有耶無耶にしてしま
うたくさんの愛をもらつた年賀状
何もせずうかうか生きて除夜の鐘

豊中市 水野 黒兔

悔しさがバネにもなつた青春譜
古いほどワインと妻に増す深み
雨に濡れ古都の艶増す石だたみ
行司だけ日本人の大一番
娘の雑煮はやも婚家の味になる

豊中市 岸田 知香子

枯葉落ち見通しの好いガラス越し
陽を背なに一人リビング年始め
年明けに骨折電話古い友
Uターン渋滞耳に読みふける
転んだら恐い缶詰三ヶ日

創始者の教え無視したツケが来る
宣伝の景色と違う露天風呂
叱るにも叱られるにもコツがある

気配りの焦点合わぬ歯痒さよ
缶コーヒ一つで頭切り替える

豊中市 山門 タミ

人知れぬ努力で実る匠業

餅こねる姉ガツチリと太い腰
かけ声もすさまじ兄ちゃん餅を搗く
落ち込んでまた生氣出す曲り角
羽づくろい出来ぬ余生をただ生きる

豊中市 江見 見清

灯を消してテレビで名画見る夜長
富士山が見えたと孫からのメール
間違いと認めたくないのも若さ
柔らかな日差しに長い立ち話
三百円まぐれではない当りくじ

豊中市 藤井 則彦

良心を試されている無人駅
アタージョのワルツのような夫婦仲
精一杯生きればちゃんと死ねるはず
胸を張ることを忘れた日本人
追い越しのベルも鳴らさぬケータイ魔

富田林市 大橋 鐘造

春風の笑顔もらって孫と旅
木枯しが空の高みで鳴る伊勢路
とつくりのセーターたのもししい味方
再会へ想い出いたりきたりして
でこぼこの木目も懐かしい社
寝屋川市 森 茜

修羅いくつ越えて二人の良い笑顔
シナリオに無い人生の浮き沈み
欲の無い素手で掴んだ淡い恋
誘われて財布の中身たしかめる
情念の雲が流れる炎を抱いて

富田林市 片岡 智恵子

オレ流とワタシ流とがいがみ合い
人間との妥協許さぬ砂嵐
香を焚いて棘ある言葉ほどき合う
欲ばって吃水線をとびこえる
ほろ苦い恋の手紙を焼いている

富田林市 稲川 恵勇

整形を済ませた顔で来た賀状
グイ呑みで目刺しが至福妻の留守
飲みすぎは毒と言いつつ酒を注ぎ
マドンナはワタシとボタン咲きほこる
もう飲めぬ酒掛け流す墓参り

富田林市 中井 アキ

お陽さまに逢うため花芽伸びてくる
振り向けば真正面にいるあなた
にんげんの弱さを知っている鴉
なごり坂恋の炎も灰になる
美味しさに負けてメタボに襲われる

ひなあられ日本人の好む味
椿一輪大の男が二人来て
お茶室でうちの椿が畏まり
神様が私選んだ落し物
関電のハッピープラン寝ておれず

寝屋川市 籠島 恵子

松に菊平凡だけどお正月
女正月やろうと思う酒を買う
そういえば柿があつたと酔いざまし
いける口と言つてあるので注いでくれ
完全に止まる深夜の思考回路

寝屋川市 富山 ルイ子

階に座り未来の夢を見る
過信した力にしゃべ返し食う
偶然の出会いが神の思し召し
君が居るただそれだけでありがたい
同居する娘に何時もありがとう

寝屋川市 太 田 とし子

まあここに座りなさいと叱られる

まあまあと仰山言うて粗茶一ツ

まあ待ちなさい怒るばかりが能じやない

よくもまあ我慢していた泣きぼくろ

まあまあと肩に手を乗せ慰める

羽曳野市 三 好 専 平

強いられた自決が碧い海を染め

ただいまと言つても誰もいない家

目も口も心臓までも人のもの

棚田まで世界遺産にしてしまひ

桂庵もグッド・ウイルと名前変え

羽曳野市 安芸田 泰 子

プランター土入れ替えて春を待つ

約束をしなきやよかった雨の音

奔放に生きて掟が煩わし

忠告を噛みしめている深い悔い

諦めがよくてライバルなどいない

羽曳野市 吉 村 久仁雄

程々の親切交わし長い友

赤い糸もつれて絆強くなる

神様が眠り悪戯したくなる

豹がらの妻は人間臭に満ち

前向きに生きて後ろ指は見えない

羽曳野市 吉 川 寿 美

ゆで玉子つるり平成二十年

昏れてゆくひと日を慈しむ八十路

流れ星土へ還つてゆく命

診断は年のせいだと言うカルテ

限りある残り時間を大切に

羽曳野市 徳 山 みつこ

新年をどんと祝つてから汚し

おむかいと年始交さず小正月

若者と張りあうように老いの切れ

かまってくれないと私も切れてやろ

遺影だけ決めて長生き楽しもう

羽曳野市 永 田 章 司

表うら手書き一切ない賀状

賢兄をもつとなんでも比較され

初詣でまずは子供の事祈る

蓋とつた風呂の柚子見て冬至しる

忘れてる振りで言わない妻の知恵

羽曳野市 酒 井 一 壺

今世紀命だんだん軽くなる

モノリザへ浮世離れてうつとりと

待望のパソコン買つて持て余す

休んだが会社も部下も恙なし

真実の声なき声が届かない

東大阪市 安永 春

がんばると無理が祟って続かない
病人同士自慢のように語り合う
別居してひとりで生きる犬連れて
話し好き短い話長くなり
寄り添うて望み捨てないダイヤ婚

東大阪市 中岡 妙

携帯で遊びと知って見る余命
豆撒きの舞妓に鬼も顔を出し
口紅をピンクにしたよ気付いてね
終章はハッピーエンドになる童話
検査日は祈る神さま仏さま

東大阪市 北村 賢子

まだコスモスもうタンポポやサクラ咲く
寒風に耐えて明日へ脹らむ芽
ピーポーをたらい回しにしている罪
たった一言ですべてが水の泡
鈍感力少し養い生きのびる

東大阪市 笠井 欣子

蟠り一つ減らして年越える
お飾りが去年のままで柵の隅
菜園で作る喜び知った朝
公園があるから散歩しています
どの友も賀状添え書き足の萎え

東大阪市 米田 水昇

魚河岸は男のロマン初荷出る
カラオケをのせて私の初荷です
あっけらかん気にしないから愉快なの
石庭を掃く箒目は生きている
赤いドレス心うきうき発表会

東大阪市 佐々木 満作

千の風夫の書斎吹き抜ける
降り積る始発の駅は皆無口
無人駅蝶もトンボも飛んで来る
雑踏からやっと抜け出て天仰ぐ
挑まれて男背中は見せられぬ

枚方市 海老池 洋

わくわくの美学と思う玉手箱
沈黙を破れば僕も活火山
ナマケモノに似ている僕の定年後
暖房を効かして薄着する文化
前頭葉少し欠けたか物忘れ

枚方市 森本 節子

少な目に作ったおせちまた残り
正月すぎひとりの時間もいいものだ
神棚のはずれジャンボは屑かごへ
どこからか来てどこかへ消える蜘蛛可愛い
日向ぼっこしながら地球のこと憂い

枚方市 寺川 弘一

休まずに息してること忘れてる

努力せぬ男が好きな貧乏神

検査入院前の日しっかり酒を飲む

しぶしぶと動いて暮らす動物園

星光る夜が哀しくないように

枚方市 二宮 山久

孫寢息聞いて健やか三ヶ日

孫パワー紅葉の手にも氣をもらう

年賀状こないお方の身を案じ

孫の手を引いて子年の初詣で

初詣で子から孫への肩車

枚方市 丹後屋 肇

叩かれて感謝している坐禅堂

野良犬が袋小路で思案顔

タンポポが咲いて不気味な寒の入り

途中下車里のなまりが聞きたくて

極月の外れ馬券を撒くひとり

藤井寺市 中島 志洋

近道を行けば別れが早くなる

栄枯盛衰じつと見てきた道標

お人好しまた乗せられた口車

円満な笑顔に秘めた辛い過去

立志伝嘘もまじって面白い

男にも専用車輛いかがです

雪洞に雛人形の白い貌

雪囲い解いて樹々にも春の風

崩し文字もギャル語も人を苦しめる

力瘤いつの間にやら消えて無い

藤井寺市 鈴木 いさお

六十路過ぎストライクゾーン広くする

前頭葉だ右脳だそんなの関係ねえ

糠に釘もう若者を叱らない

ヒヨ口長の茶髪へ娘くれてやる

飯を炊き子を産む神を妻と呼ぶ

藤井寺市 太田 扶美代

呆けたかななんば食べても食べられる

三百段登って会いに行く牡丹

自分史はマンガチックに書くつもり

杓子定規の脳が少うし恥かしい

両の手に余る短所を下げてたま

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

シクラメン部屋もわたしも灯をとます

好きだからコートをかけてあげました

仕方ないひとりで決めた事だから

抱きしめてほしくて肩の力抜く

痛み痒みにメンソレータムかせない

藤井寺市 若松雅枝

八尾市 村上ミツ子

一世紀生きた笑顔の素晴らしさ
ジーパンの娘とは思えぬお茶の席
八起き目に助けてくれた人がいる
メタボには辛い新酒を贈られる
忘れたい罪が心に引つ掛る

箕面市 出口セツ子

八尾市 生嶋ますみ

大掃除初詣でもなく寝正月
家族みな絆のように風邪をひく
孝行ができず逝かせて残る悔い
亡父に恥かかさぬ法事祈願する
子に友に甘え上手になつてみる

箕面市 広島巴子

八尾市 宮崎シマ子

桃の花抱きにつこり娘雛
赤いべべ箆箆で孫の雛を待つ
雛の酒成人迎え辛くなる
初春の浮かれ気分をとばす風邪
救急に医学の進歩いかされず

守口市 井上桂作

八尾市 吉村一風

ミサイルの迎撃見事あうれし
万能の細胞夢をかりたてる
ゆとりでは学力低下現実
偽りのお詫びも泣いて演技する
危なげな相撲協会土俵ざわ

いつもと同じ正月知らぬ間に過ぎる
子を叱るいつも本気で向かい合う
好きなだけ食べてメタボにねらわれる
ちよつぴりの野心ときどき目をさます
声かけて眠る言葉呼びさます

それぞれの性が賀状にこぼれ出る
頼られている幸せの米を研ぐ
今日もまた時間売りに行くパート
朝の嘘今日は唇よく乾く
腰の痛みはやきながらも立ち話

嬉しい事数えて暮す八十路坂
故郷は寂し知人が減りました
郷土料理並べわくわく友を待つ
山の神の指示に従う平和主義
思うことありくちびるは許さない

きらめいて何か言うてる母の星
綺麗ごとやめてずばりと本音出す
急ぐ時こそゆつくりと確実に
楽しさも努力をせんと逃げていく
よく笑う人の隣でよう笑う

八尾市 高杉千歩

倍返し期待されてるお福分け
切り札を眠らせたまま越えてきた
一病も二病も抱え明日へ夢
めりはりのない一日へ自負ひとつ
アドリブを考えるととき毒舌家

大阪府 米澤俣子

観潮の宿で新年恙なく
休み明け脳にエンジン掛らない
日進月歩のテンポ無闇に速すぎる
一月にタンポポ咲いた温暖化
舌戦のヒートアップよ府知事選

大阪府 澤田和重

針千本のんだことない偽証罪
要点を絞れば金に辿り着く
満点でなければ好きになつていた
敵のない暮らしもつまらないだろう
年金の格差となりが見せつける

大阪府 初山隆盛

買わんから損は知らない宝くじ
傘寿から白寿へ歩み衰えず
老兵の抱く擦り切れた守り札
多数決見切り発車にある驕り
百歳の席への予約済んでいる

大阪府 野田栄呼

卒業はしても気になる台所
叩いても埃は出ぬが折れる骨
日付より賞味期限は舌でみる
暖冬に斜視で喜ぶ温暖化
患わずあの世へ逝った人を褒め

大阪府 桑田ゆきの

お喋りが止んだら食いのてんこ盛り
負けん気を独楽に唸らせ子と遊ぶ
バーゲンでキリキリ舞をさせられる
診断書眼鏡かなわぬミミズ文字
縄とびも脳活性と汗流す

神戸市 両川無限

雷が落ちて誤解が解けました
四コマで描く世相に夢がない
他人には見せぬ心の水溜り
バス降りて迷う定年後のプラン
未熟だときちんと自覚して生きる

神戸市 伊勢田毅

最前列孫をかばって初詣で
おみくじは吉で今年もまあまあか
巫子選びおみくじを引く罰当り
初打ちのOBカラス笑つてる
右向け右そんな成人式が嫌

神戸市 山口 美穂

芦屋市 黒田 能子

人間のエゴに地球は泣いている

寒の入りあつたか鍋に舌鼓

兄ちゃん元氣店の魚が跳ねそうなる

見上げれば月にっこりと話しかけ

説得力が妙にあるので負けそうなる

神戸市 山口 光久

知恵競べならば負けぬと言うカラス

鈍なばく早い者勝ちには負ける

迷走に迷走かさね現在地

よく切れる包丁だから氣を使う

じつと耐え祈り続ける手術室

相生市 中塚 礎石

美しい花には愛の風が吹く

認知症人間だけでない自然

忙しい顔には見えぬ酒の席

無職でも多忙な趣味で日が暮れる

ポーナスは年金組に縁がない

伊丹市 山崎 君子

幸せは子供にかえるお年玉

七草に里は初雪粥の膳

春はそこタンポポ咲いた友便り

焼いも屋あつたまろうよ呼びとめる

初釜に紅いふくさの似合う友

門灯が人待ち顔についている

血液がサラサラ流れ元氣です

三日程あたためてから出す返事

あれから私こんなに皺も増えました

今日だけは寝かせてほしい主婦の風邪

尼崎市 春城 年代

喋らなくても夫婦に解る温い風

それからを想えばとおく来たもんだ

米寿までやつと届いて退院す

どちらまでちよつとそこまでいわずもがな

七草がゆ食べて病後のひと日延び

尼崎市 春城 武庫坊

胃カメラの結果を聞いて手術する

癌手術これで長生き出来るだろ

手術後は苦痛感じずすぐ眠る

二日絶食我が胃はどんなになっている

退院後杖をたよりに歩き出す

尼崎市 軸丸 勝巳

年一度雑巾絞る大掃除

賞味期限きたか賀状の筆が揺れ

参道が年毎遠い初詣で

三日目もお節が残る核家族

賞味期限もつたいないよ戦中派

尼崎市 山田 耕 治

生きていますと年賀状書く

したたか酔うて亡妻にあやまる

試着室から夫呼ぶ声

酔うて歌えばみんなおっさん

のれんを分けて傘を返しに

尼崎市 長 浜 美 籠

苛立つ日ケーキを買うて花買うて

のし紙にきもちと書いてあり嬉し

物ぐさを楽しみました三ヶ日

コンパクト明日をのぞいてみたくなる

久し振り五つ小鉤の足袋をはく

川西市 米 原 雪 子

帳尻をうまく合わせている公費

旅語るそれからそれへ夜は更ける

待ちぼうけ忘れていたと電話来る

酒飲めず座を盛り上げる器量人

親の夢背負わされてる最初の児

川西市 西 内 朋 月

暴落も自己責任で買った株

祈るよりほかに手がないから祈り

ばらばらの家族が揃う年始め

三人目 やつと男の孫生まれ

嘘っぱい身の上話さかされる

三田市 堀 正 和

点滴に元気を貰うクセがつき

儲かる本書いて儲ける人がある

スベアだと知らずのこのこついて行く

ミニのくせなぜかスパッツはいている

マニュアルをしつかり覚え気がかぬ

三田市 石 原 歳 子

新しい服が外出待っている

ふる里の自慢は一つ星の数

入れ歯出来たくあん恐る恐る噛む

教わった酢漬を作り晩御飯

来年は少し多目に吊し柿

三田市 久保田 千 代

胸の奥秘めておきたい灯がひとつ

去って行く人は追わずと気の強さ

逢いたくて一途に待った冬の駅

これからを考えてみる日向ぼこ

庇護されていると思える暮し向き

西宮市 牧 渕 富喜子

鏡ふく視線合わさぬように拭く

C型肝炎友は静かに旅立った

音消してフウツと一息ついて見る

年越しのねじれそろそろ飽きてくる

挨拶がきっちり出来るそれでいい

西宮市 秋 元 てる

燃え盛る火の粉男の肌の艶
冬の雷ハタハタ起しと浜活気
マナー無い子等に老母も取乱す
簡単に人が殺せる国になり
為政者の鈍感力は願ひ下げ

西宮市 山 本 義 子

托鉢の僧に春陽はふりそそぐ
一病あり気付かぬ顔で老いの坂
春光にますます馬齢思ひ知る
負け犬と言わせぬつもり春の靴
空財布で骨董屋見る遊びある

西宮市 緒 方 美津子

喜怒哀楽を耕せる土が好き
閉園後花に水やるアルバイト
白い皿シェフの自信が盛つてある
切り詰めた我家のゴミに鳥こぬ
こまるなあ何でもコピーできるから

西宮市 亀 岡 哲 子

年賀状子等の写真を見て飽きず
九十の元氣と賀正散歩道
あすの予定ついでに書いておく日記
はにかみもハンカチもよし陽の光
私は私それなり生きて灯を点す

西宮市 井 上 松 煙

煩惱を宥めてくれる庭の花
年賀状来ないと安否気にかかり
童謡を唄いストレス鎮めてる
八十路坂地下をうろつく氣力あり
片足で立つてズボンがまだ穿ける

西宮市 坪 井 孝 一

豊かさがいつも絆を反古にする
モノクロの昔を刻む写真帖
あったかい鶴を折る人やさしい瞳
父さんは犠打が多くて目立たない
同窓会初恋告げる宴となる

西宮市 片 山 忠

お向かいに越して来たのに未だ来ない
小指出し元氣でつかと言われても
老眼鏡かけたばかりに老いばれる
屋根診断割っているのか降りて来ず
合格をすると実力だと思ふ

西宮市 菊 池 トミエ

おはようの一言今日のリズム出来
長生きとバランスとれた物忘れ
ひっそりと余生楽しむこれも贅
旅人の目でふる里のテレビ見る
老舗から格言が消えのれん消え

姫路市 古川 奮 水

香芝市 大内 朝子

魚拓して後は鍋だと竿磨く

一枚の魚拓に喋る武勇伝

タバコの火罰金食らう御堂筋

土曜日の新聞散らしばかりなり

旧友と出合い愉快な回り道

奈良市 米田 恭昌

男の子大の一字を太く書く

嫌なことすぐ忘れてる能天気

格式にこころ忘れていた暖簾

社長業務仕事始めはお詫びから

生真面目で気を病んでるこまねずみ

奈良市 天正 千梢

吊し柿日に日に小さくなって行く

鍋ひとつ磨く事なくらく隠居

罪の数お天道さまはお見通し

フランスも火種は移民ゆれにゆれ

柗のこぼれて尚も香を残し

生駒市 飛永 ふりこ

タイの寺院日没までも華麗なり

退職の六十四歳さあ一献

独楽ねずみかくやに乗って目を回す

役終えて一皮剥けるおかげ様

コロちゃんが生きてる千の風

笑い皺たつぷり刻み丸う住む

足跡を残せる年にしたいもの

いい汗をかいて長生きするつもり

のつけからのろけ話の春の酒

占いの大殺界を裏返す

橿原市 居谷 真理子

安物の仮面百ほど持っている

対面に神を味方につけた人

シンデレラそれから君はどう生きる

母の汚れゴムの手袋して洗う

みどりごを抱いていつとき真人間

橿原市 安土 理恵

さざんかの散る頃きつと来る計報

宇宙人の恋の作法がわからない

夜あけのコーヒーこれほど苦いものだとは

淋しくて花屋の前で立ち止まる

夜があげたらパン屋にパンを買いに行く

大和高田市 坊農 柳弘

歳月をゆるりと解く日向ぼこ

猫柳春へゆっくり綿帽子

雪解けにそつと顔出す路のとう

手探りで歩いています春の章

季の巡る早さに柗と語る

奈良県 渡辺 富子

和歌山市 武本 碧

おひとりさまの老後温める恋をする
一途なる道に見えてくる明日
ふる里の山河を胸におく再起
恋の魔法かけて男の骨を抜く
無言電話吹き抜けていく寒い風

和歌山市 古久保 和子

ぶり大根温め直して酒にする
ぬるま湯で洗った顔に眉がない
ファックスが勝手なことを言うてくる
解凍するまで正体不明です
どの色を盛っても似合う春の皿

和歌山市 福本 英子

ゆっくりとまたゆっくりと除夜の鐘
初詣で七福神に遇いました
母の無駄お節作って誰も来ず
これからのことを書いたらみんな嘘
風邪気味へたっぷり七味唐がらし

和歌山市 田中 みね

凄腕の後輩が居て焦るわな
三が日難なくすんで宵えびす
揚げ足を取って取られて弾む席
しばらくは女を捨ててモチ拾う
2008年今年も痛いところだけ

輪の中の刺激で灰汁が抜けてくる
さっきまではいはいしてた後指
決断へ爪先きつく足袋を履く
何だ彼だ言って結局もとの鞘
咲いて散る花一輪もまた無常

和歌山市 堀畑 靖子

渋滞は覚悟出かける初詣で
廃屋にからまる鳶の元氣よさ
みの虫も顔のぞかせる冬日和
一万円当たるくじ運持っている
心配はメタボリックなわが息子

和歌山市 楠見 章子

いいくじを引いたと思う差し向かい
ラフランス横ずわりした母想う
新札で払う財布は空っぽに
自転車にまたがり迷い吹き飛ばす
今日からは春の歩幅に戻さねば

和歌山市 玉置 当代

平凡な幸せ賀状届く初春
今年こそねずみ見習いたいメタボ
喪が明けて飛躍しますと初詣で
健康を願い玉砂利踏みしめる
終わったはずの恋が燻りだす火種

和歌山市 喜田准一

鳥取市 武田帆雀

オクターブ下げよう頑張り過ぎていて
タイミング測って変わり身の速さ

受け流す人間だもの風だもの

何故なせと二度聞かされて嫌になり

返らない答の訳に気付かない

和歌山市 宮本三喜夫

国費です裏金資金水増しす

見返りを期待するよと接待す

持て余す暇があるから悪さする

太田知事政治とカネに踊いた

偽装にと明け暮れをした嫌な年

和歌山市 松尾和香

ふるさとの海へしがらみ解き放つ

無事感謝観音様の鐘をつく

ジグザグの人生行路ラストラン

忘れ去る心新たな風を呼ぶ

満月に私の暮し曝けだす

海南市 三宅保州

二礼二拍手催促しすぎではないか

来年も生きていればの話です

親友でなければ喧嘩などしない

洗濯指数百で朝から脱がされる

炊飯器こわれてワイイ外食だ

門松のジャンボ不況に胸を張る
平成のギャルたちヒップ光らせる
空くじを額に貼っていい男
初春の酒簪揺れてご満悦
黙祷の心に行進曲流れ

鳥取市 春木圭一郎

とりあえず今日を生き抜く努力する

ありのまま今の自分へ自信持つ

悪いことあればいいことやってくる

追いかまれ自分をダメと思わない

目標へこだわり捨ててまっしぐら

鳥取市 徳田ひろこ

ビタミンが欠けたのだらう角が生え

七福神欠けてはならぬ人ばかり

旅人のホッと息つく過疎の天

ふる里の土が私の壁にあり

温情のバトン渡せる役どころ

鳥取市 倉益一瑤

自分史に修正液の跡がある

千の風吹いて命日近くなる

勝ち組のシッポ掴んで離さない

サイコロがどう転ぼうと前進だ

七癖も許し夫婦の絵を描こう

鳥取市 岸 本 宏 章

ブランにはなかった老いの坂登る
神が振るサイコロどおり生かされる
しみじみと歳相応の皺を見る
煙にも四季それぞれの色がある
ゆつくりと喋る漫才なら聞こう

鳥取市 岸 本 孝 子

仏様が嫉妬してみるツリーの灯
老いは老いなりに夢抱くお元日
古稀過ぎて夢半分を追いかける
国体を夢みて励む孫がいる
夢にみた老後のゆとり泡と消え

鳥取市 有 沢 せつ子

元旦の雪が去年を塗り替える
直筆の賀状にこころ暖まる
あれこれと一度に貰う冬野菜
クラス会年金の差にちちこまる
風雪へど派手な傘で立ち向かう

鳥取市 録 沢 風 花

高齢化でサンタクロース減ってきた
三世代おせちも少し欧米化
蔵に棲むねずみぬくぬく冬を越す
ふる里は甘えるところ泣くところ
産院が介護施設に様変わり

鳥取市 土 橋 はるお

人混みで天女がすつと舞いあがる
空っぱの財布を妻にそつと出す
平均寿命まで無理は言いません
ぬかるみの道でブーツが泣いている
老人の余った知恵を借りにゆく

鳥取市 土 橋 睦 子

盆栽も暖冬に酔い歌い出す
負けるが勝ち爺さんだまり酒を飲む
ピンチには弱い老夫のひとり酒
午前中の仕事が溜る話好き
春が来て野菜作りの準備する

鳥取市 奥 谷 彩 子

老いの坂軽くて弾む靴と決め
ほのぼのと母の温もり冬帽子
沖見える丘に建ってる父母の墓
亡夫恋う写経静かに墨をする
先走りつめたい視線背にささる

鳥取市 池 原 天 馬

とし一つ増える自然がくれるいたずらだ
やつと雪大晦日朝おちついた
老夫婦二人で食べるせちつくる
宅急便でもちつき機餅子へ送る
年賀状去年の返事添えて来た

鳥取市 夏目一粹

いらだちを露骨に見せるのは夫婦
深呼吸する時だけは仮面とる
カマキリの顔は三角あどけない
煩惱に活を入れても眠ってる
雨漏りのする古傘を捨てきれず

鳥取市 田村邦昭

除夜の鐘ねずみがテープ急いでる
初詣でまずは健やかにと祈る
気取るほど上品らしさついてこぬ
温泉つていいな人間らしくなり
定年の垢がいい湯に洗われる

鳥取市 福島庸二

別腹という名の胃には底がない
ブレッシャーあるほどバネが強くなる
レジに立ちはつと気が付くマイバッグ
一滴も飲めない友の処世術
心配の尾ヒレ広がる待ちぼうけ

鳥取市 加藤茶人

介護でも揉めて相続でも揉める
イエスノーはざ間で揺れる風見鶏
だらしない息子育てたのも姑
実践には弱いがテストには強い
マスコミが煽って謝罪隅で詫び

鳥取市 福西茶子

バイキングケーキフルーツ別腹へ
正直もそこまで言えば毒になる
偽りのお世辞を言ったことがある
死ぬほどの恋死ぬまでにしてみたい
あちこちへ行く笑うため喋るため

鳥取市 太田幸枝

老々介護杖が二組立ててある
ポチ袋旅のカバンに入れておく
お茶たてる音さえ澄めるお正月
カズノコも中国産をさけている
介護する手も軽くなる年金日

鳥取市 福永ひかり

感謝だと本当に分かる歳になる
選挙には夢を持たせてくれる人
当りくじ出した窓口へと並ぶ
地球の出やはりかけがえない地球
十年を視野に老後の青写真

鳥取市 岩崎みさ江

古い古い話が好きな囲炉裏端
ちっぽけな夢がわたしの起爆剤
会話力おとろえぬよう輪の中へ
友の声ウツのカーテン開けてくれ
カーテンの向こうは青い空だった

鳥取市 吉田 弘子

一族が揃う正月忙しい
ロボットのような夫と飯を食う
厳冬に開花予想のニュース聴く
散り際は椿のようにピンコロリ
少な目と花粉情報ホツとする

鳥取市 近藤 佳子

魚市場故郷の風に逢いにゆく
初霰霜月二十日日記かく
照る日曇る日引き算ばかりして暮らし
八十五赤信号が増えてきた
三食を次女が作りに来てくれる

鳥取市 平尾 菜美

お粗末な先入観が邪魔をする
トトロから森の安堵をもらい受け
手を組みし男女の後にとほとほと
あきらめの極みで女笑い出す
清水の舞台女駆り立てる

鳥取市 福田 登美

お正月少し派手目な花活ける
新年のごみ出しみんな丁寧語
山陰の正月やはり雪を見る
余生僅か明るい色を身につける
サムライの在す政治に期待する

鳥取市 西川 和子

火吹き竹を昔話にして語る
俄雨に百円の傘増えている
不覚にも張り切り過ぎて医者通い
大海を知らぬ金魚の肥満体
物価高エンゲル係数跳ね上がる

鳥取市 宮脇 道子

戦中派食べ物並べ満ちた顔
地球変化ぐつと我慢で待つとくれ
幸福の実感もてた子等の声
ウインドも無駄な小窓に見えてきた
何も無い時代に生きて無駄多い

鳥取市 山本 益子

待っても幸運来ない先ず努力
今年こそ金持神社崇めたい
起きあがり世相見わたすだるまたち
人生の門出に響く言葉秘め
軽く出た言葉に罪の重さ知る

鳥取市 山宮 愛恵

三ヶ日家族揃ったうまい飯
ばあちゃんと孫のうまいは噛み合わぬ
寒い日のお茶はくず湯ときめている
寒がりの君へ熱燗付けてあげ
子が去んでひとりに慣れるまで寒い

鳥取市 中村 金 祥

そう言えば今の農相誰だろう
ガソリンが高くて猫を抱いて寝る
金力が欠けて人相まで変わり
初恋が消えてしまったクラス会
夫婦っていいもんだなと見つめ合う

倉吉市 松 本 よしえ

にんげんの少子化見てる単たち
湯タンポが温いい夢見られそう
貼るカイロ頼りに今日の通院日
還暦の子はねずみ年まだ若い
震度五でうちの柱はきつと駄目

倉吉市 野 口 節 子

腰低く低く築いた高い塔
雑音の中に安らぐ場所がある
節々に老化の音がけたたまし
若やいだ声が元旦餅する
その後は空きかんだけの山となり

倉吉市 最 上 和 枝

忘れると言う安楽は神かしら
忘れたい事は滅多に忘れない
遺言が予定狂わす遺産分け
ほんのりと雑煮が香るお元日
大げさに鈴振り神に無理を言う

倉吉市 山 本 玲 子

唇に残る麻酔が喋らせぬ
懸崖作り遺産にしたいほどの出来
影法師の足も歩いて二人連れ
暖冬でラクダのシャツも出番ない
不本意な拍手が白い目と合った

倉吉市 山 中 康 子

ご破算もあつてこの世が生きられる
大金はないけど恵みたいところ
毒出して深呼吸しているお部屋
ゆったりの私に戻りたい昼寝
今流のやせる談義に火がついた

倉吉市 猪 川 由 美 子

自己愛が強過ぎ他人愛せない
知事旋風そのまんま年通り抜け
値上げなど関係ねえか大臣よ
偽の字を書き貫主世を嘆く
値上げズラリ生きるも死ぬも儘ならぬ

米子市 政 岡 日 枝 子

影見れば猫背の女嫌だなあ
大地に続く玄関先を掃いている
ごみ袋内緒がどこも洩れている
背が少し曲がつてみえる余寒の灯
全快にむかつて快い歩幅

米子市 中井 ゆき

小さいけど砂の力はあなどれぬ

孫達の欲がだんだんデカくなる

砂達の絆を妬ける風の乱

さらわれた砂の行方が気にかかる

ありがとう言つて死にたい欲がある

米子市 光井 玲子

八十路坂まだまだ学ぶ事ばかり

こだわりがすっかり解けて空仰ぐ

欲なんかとつくに捨ててくらしている

魚釣りにあけくれている父も古い

急ぐ事もなくなりほんに間が抜けた

米子市 野坂 なみ

温暖の寒ゴルフー達の弾みよう

胃袋と親しくなった外国魚

鰯の粗と煮こごり遠い亡母がくる

保険料砂の器につきこんだ

自己採点影が欲目につけたがる

米子市 青戸 田鶴

久しぶり山下清に洗われる

八十年生きてなんにも残らない

人の名も花の名もすぐ出てこない

雪降って魚おいしくなってきた

砂つきの野菜安心してもらう

米子市 白根 ふみ

冬至の日柚子ころろと戯れる

年忘れわすれてならぬこと忘れ

繭玉を亡母がよろこぶように吊る

古いねずみ背すじ伸ばしてメールする

炬燵して怠惰になつてゆく踵

米子市 門脇 晶子

玄関でうわさをきいた猫がいる

遠い日に涙を砂に埋めた恋

魚釣り好きな男の日本海

鰯は明太子 鰯の卵はカラスミに

欲捨てた日から世間が広くなり

鳥取県 松川 行男

どぶねずみ格差社会に名を連らね

太陽が偉いねずみも知っていた

恐いのはねずみ同様ねずみ取り

年金で知らぬ若者同居させ

味を占め三度の電話偽息子

鳥取県 深田 倶久

温暖化空調設定一度下げ

ポイ捨ても条例となる街長閑

ノーテレビノーケイタイの日も決めた

コインランドリー加齢臭抜き三日ごと

お雑煮のねばり家族の絆とも

鳥取県 細田裕花

毛穴まで富士の美しさに震え

富士山もにっこり笑う旅の運

富士山と向き合い朝のふろこはん

世界遺産いにしえ人の声を聴く

御利益へ銭の音にもある格差

鳥取県 竹信照彦

お正月待つてましたと雪が降る

積雪も三日で溶ける冬日和

搗き手より捏ねる婆さんいなくなる

もち搗きも公民館で子に教え

しめ縄をただで作って飾り付け

鳥取県 盛田夢路

人間のエゴに地球がしかめ面

どん底に落ちて清濁併わせ飲む

ちっけな心だすぐに腹が立つ

自分史にお調子もんと書いておく

今年また少しフアイトを秘めている

鳥取県 谷口次男

話し込む熱い二人に夜が明ける

ドラ猫がカカカと笑うネズミ年

群衆も帰路は孤独か黙すなり

一言で押すかも知れぬ核ボタン

朝が来た何はともあれ飯を食う

鳥取県 佐伯やえ

はやばやと花種届きねむらせぬ

癌癒えた知らせ大きな雪だるま

亡父の樹にボツンと明日が芽吹く音

檜山が見えているのに欲ばらぬ

稜線のはるかな雪に掌を合わす

鳥取県 山下節子

まだまだとそろそろの中生きている

身に余る暮しに感謝忘れがち

通販だ町も田舎も区別なし

自分史の出発点は母子手帳

絵日記に金魚や蟬の命日を

鳥取県 下田茂登子

札束を一度握って死にたいね

蟻だつて束になったら家も食う

サイコロの音に殺気が甦る

サイコロが人生狂う鍵となり

酒好きの義父の命は酒提げて

鳥取県 石谷美恵子

水仙の匂い清しくもてなされ

言うことはデカイが高所恐怖症

朗らかさ何処へ痛いところだらけ

のんびりと余生のリズム老妻任せ

やさしさへ忍耐のいる介護の手

松江市 安食友子

暇潰し迷惑電話になつていた
ほやいたら投げ銭どさり来るかしら
風雪も称えてくれる我が齢
同情で涙するのはそりや女
一瞥よ今日のわたしは阿呆ですか

松江市 松本 知恵子

いい事がありそう日脚伸びている
木枯しにパンジー春へ進行中
雪大山見える娘の家孫の家
急事にはいつでも跳べる母の腕
冬の陽に動き出してるえんどう豆

松江市 小川 注湖

再会にネクタイ赤と決めて出る
階段の手摺上下で声かける
秋祭り握り合つた手夢育て
初恋の人も白髪で祭りの輪
ビル宿泊先ずは出口を確かめる

松江市 三島 松丘

世間見る心の窓を開け放つ
鬼も蛇も優しい顔に見えてくる
過去の罪古い日記が喋り出す
幸せな色で小鉢の桃が咲く
何よりも今欲しいのは友と知恵

松江市 銭山 昌枝

急行に飛び乗る元気まだあつた
道連れにしたい男は先に逝く
はずれくじ同土気楽に生き延びる
やわらかい物腰につい騙される
めいめいが薬飲んでるお湯の宿

出雲市 佐藤 治代

てのひらに心残りの夢がある
金魚の糞引きずりながら年を越す
鮫鱈なべおいしい冬にしてくれる
諍いをしながらあららもう金婚
我がままな付けが今頃貧とでる

出雲市 多久和 敬子

お手玉で青春の日々よみがえる
お手玉の思いで消えた母を抱き
七草の一つが言えず午前二時
体力の限界を知る主婦の椅子
忘れたい事いつまでも覚えてる

出雲市 伊藤 玲子

宙からのお年玉かもダブル虹
産声に一人前のお年玉
食べもせず吞んで喋って箸淋し
淋しさが溜ると電話かけまくる
赤福を売って下さい信じてる

出雲市 石倉 美佐子

ロボットになつてしまつた御殿様

春よ春桜のつばみも綻びる

赤着れば赤だけ光る八十歳

吐息ふーとガラスに掛ける雪つつく

さよならは正解だつた百千鳥

出雲市 岸 桂子

喜劇見る何故か涙の出る舞台

五十年昨日のように見る日記

朝のパン一枚二枚胃に沈む

貧乏を知っているからカボチャ好き

石橋を叩き過ぎてゐる夫の癖

出雲市 持田 多輝子

超音波大動脈瘤すけて見え

信頼は何より大事と心得る

脳細胞花の香吸うて活入れる

さりげない粗品にこもる手の温み

おちついてゐるはずなのにオツチヨコチヨイ

出雲市 小豆澤 歌子

波の音聞けば遠くの風が吹く

哀しみを包んで溶かすロゼワイン

私の心の川に浮かぶ花

投げやりな私の心覗く風

現実シナリオ通りいかぬ夢

出雲市 小白金 房子

千木高く新春を寿ぐ巫女の舞い

寒鯛で祝う地酒の温かさ

手枕が誘う仮眠の掘り炬燵

金で済む心を見抜く昼の月

お手玉の五色がはずむ新春の詩

出雲市 富田 蘭水

あれほどに誓つた吾に負けている

ちらし見て庶民の暮らし読んでいる

腹八分八十路の決意ただ一つ

古代博ハニワの瞳愛くるし

着飾つた心のすみにウツすこし

出雲市 吉岡 きみえ

いい暮らし望まぬ大根煮ています

母さんの煮メに惚れた次男坊

しっかりと浦島になり退院だ

いやなことみんな忘れる安来節

しんしんと夜更け土筆の音も止み

出雲市 園山 多賀子

臘梅の香り仄かに昏れ馴染む

雑草を抜く老母の背に陽の匂い

変身をするサングラス掛けてみる

十年の孤独に耐える茄子の花

雛あられ晩年の恋ひそやかに

出雲市 森 茂美

菊薫る庭に朝日が差してきた
雪が降る後期医療へしんみりと
穏やかに餅がふくれるお正月
正月を知らぬ子供も居る地球
寝正月神様だけは忙しい

雲南市 毛利 幸

忙がしくねずみちよろちよろ這い回る
愛人が悪事の裏で見え隠れ
あれほどの激しい愛が瓦解する
赤い糸二人の縁は解けない
恥かいて顔が夕日の朱に染まる

島根県 伊藤 寿美

わたしの居場所まだあるらしい新春の月
独り旅冬の銀河へ舟を漕ぐ
喜寿の計小さく書いた初日記
双六を振ればあの日に戻れるか
老いの愚痴たつぷりと聞きたい老医

倉敷市 撰 喜子

梅雨が好き噴水が好き濃紫陽花
野性美にあふれた彼が今の夫
手と口をフルに使って人乗せる
納豆も人間もねばねばはいや
煩惱を一つ消しては納め札

真庭市 国 米 きくゑ

古鏡みがいて初春を待つ八十女
寡婦の舟世間の波へ揺れ動く
凜として新春にむけ羽繕い
新築の新婚家庭に咲かす花
還暦の息子等賑やかに初春の宴

真庭市 福嶋 智恵子

輝いて銀盤に舞う少女たち
輝いた地球かぐやが見せてくれ
生きのびて宇宙の夢がまた一つ
歳忘れ幼女に戻る友と逢う
神棚の無い家にある鏡餅

美作市 小林 妻子

肩の荷をもう臆面もなく降ろす
笛もラッパも鳴らなくなったのが本音
諭吉殿も一葉さんも出て行つた
句読点もう欲張りは止しましょう
調子よいあなたはネズミ算ですか

美作市 福原 悦子

度忘れが気長に戻す脳回路
胎動へ今母となる底力
雑魚なりに輝く日ある辞書をくる
想い出の場所に安らぐベンチあり
地図広げ甘い誘いの春炬燵

美作市 大石 あすなろ

句読点しつかり打って立て直す
なんでもない話が好きな両の耳
身の丈に合うた小さな夢を積む
心当たらないのに飛んで来た火の粉
老いたかなふとジंकスが絡み出す

東広島市 福島 万年

モナリザが今日はちつとも微笑まぬ
取り込んで畳んで妻の帰り待つ
またしても妻かと思う風の音
妻だから言うごめんねとありがとう
向き合って頂きますが暖かい

竹原市 時 広 一 路

太陽を描くと冬の絵も温い
慰めてくれるのですかこぼれ種
思い切りよく剪定の鋏持つ
好物しか入れぬ独りの冷蔵庫
読めぬ風吹いて明日が呆けてくる

竹原市 石 原 淑 子

雛かざる二人の孫と平和の灯
零の数かぞえウインドーショッピン
両家継ぐ墓の重さよ一人っ娘
ロボットに介護お願いする老後
ぼんやりと一寸先の見えて来る

美祿市 安平次 弘 道

知り過ぎた女の指は細かった
文法は違うが意味は通じてた
臆病な男に愛は重すぎる
義理一つプライドだけは持っていた
引き裂かれた愛宿命とあきらめる

東かがわ市 原 賢

悪友の送る祝辞があたたかい
やさしさを注ぎ足すように春の雨
嘘ひとつ歩く足どり重くなる
夢を買い明日のドラマを夢にみる
苛立ちをしずめてくれる故郷の山

東かがわ市 伊 勢 八 重 子

人だから素通り出来ぬ好奇心
誠実を尽せば出口見えてくる
嫁ぐ娘へ母の火加減水加減
三ヶ日孫子であふれまた独り
温かいふる里に酔う屠蘇の味

東かがわ市 清 川 玲 子

堂々とシルバースhirtへ掛ける美女
大軒かいて同室眠れない
買うつもりないが一口試食する
あたたかい実家の風も代替り
山門をくぐると心風いでくる

松山市 古手川 光

相性と言えば大根と鰯の粗

神さまはお金大好き酒も好き

なんと美しい虹だ宇宙のプレゼント

値上げ値上げ言うからどこもかも値上げ

センセイと互いに言って無重力

松山市 高橋 宏臣

隅っこに立って落ち着く満員車

手に乗せた赤い林檎に星の降る

口止めの栓がゆるんで酒となる

犬が振るほどには振れぬ自尊心

熱爛にしよう冬至が過ぎたから

大洲市 中居 善信

前走る車は全部抜いてきた

鼻息が荒いぞ古希を過ぎたのに

ガン告知あれから二年経って近く

黒いリボンの中で笑って馬鹿野郎

満帆だから油断をしてしまった

西予市 黒田 茂代

侘助の含み笑いのおちよぼ口

水晶体世界で一番小さい海

腹の足しにならない夢に生きている

朝の駅軍靴の如き音させて

お経口ずさむと不眠嘘のよう

(小澤幸泉氏の句は51頁に掲載)

温故知新

大阪市 市場没食子

待人は来たらず粉雪類に解く

君僕の子も君僕の間柄

東京都 宮田 不二

川の字に寝て極楽が判りかけ

郷里の息子の嫁にと思うバスガール

大阪市 丸尾 潮花

舞初めへ恋の脇役あいつとめ

河豚ちりへ雪が散り込む窓をあけ

出雲市 尼 緑之助

また仕切り直して春の陽に對す

ノイローゼ人ごとでない昨日今日

岡山県 横部 牛歩

遺言の通り句帳も入れてあげ

これが恋だろわか雨を衝いて出る

『川柳雜誌』麻生路郎主宰

三四六号 (昭和三十一年三月)

川柳塔の

川柳讃歌

(39)

木津川 計

今年こそ弱音を吐いて生きてやる

大内 朝子

いやあ参りました。逆をつかれたのです。「生きてやる」断乎たる決意は、前向きにとか、強気を出して、とか積極的語句のあとにくるマニフェストの筈です。

詩人・山之口獏は「僕ですか?／これはまことに自惚れるやうですが／びんぼうなのであります」と尻を捲って読み手を煙に巻いたのです。朝子さんもおいどをまくつての居直りです。表現の定型や発想のありきたりを破ると面白くなる格好の句です。

妻になり母になり今おばあさん

佐藤 治代

ごく当り前の女の一生です。この句が意味を持つのは次の朝日歌壇入選歌もあればこそです。「おかあさんともおばあちゃんとも呼ばれない女の一生 寒夕日」(夕張市・美原凍子、08年1月7日)

いろんな理由で結婚できない女性がいます。シングルライフを選択するひともあります。右の短歌は「寒夕日」に窺う、結婚できなかった女性の嘆き、あるいは悔いでしょう。このひとから見ると、治代さんは暖炉の冬です。頑張ろうわたしのための明日がくる

吉岡 きみえ

「すみませんあしたはどこにいますか」(竹内ゆみこ)と詠んだ若き川柳家があります。確かな明日を見出せない不透明で不安な現代を反映しています。

が、きみえさんには確信があります。明日は誰のものでもないのに「わたしのため」に明日は来るのだという。今日は暗いけれど、明日は「明るい日」なのだから「頑張ろう」と自らを励ましています。きみえさん、明日はきっといい日ですよ。

生涯を無題と書いて生きようか

岸 桂子

「題名のない音楽会」はあっても無題の生涯はありません。どんな人にもモンパルナス時代と僕の呼ぶ光り輝やく日々はあり、あったのです。「喝采のない自叙伝」という人もいますが、卑下するか謙遜しておいでかのどちらかです。桂子さんも慎ましいおひと柄で、人目にふれずひっそりと生きていきたいのでしょうか。すでに川柳塔の同人でいら

つしやいます。無題で暮らせる筈もないのです。川柳の生涯!。素晴らしい生き方です。

駅の名があつたかそうで途中下車

清原 悦子

世の中で一番幸せに暮らしている人は、全国の一R、その駅すべてのスタンプを集めに旅する人を描いていないと思ってきたのです。急がず慌てず悠々と、お金の心配も一切なく、即ち、時間的ゆとりが一杯あり、経済的ゆとりももちろん、という人をこそ人生を楽しむながら生きている人とみなしてきたのです。

さて、悦子さんもうらやましい暮らしです。気ままな時間が許される贅沢です。

十万へ八万ほどが足らぬなり

早川 遯行

これぞ川柳、と僕は膝を打ちました。十万に二万ほどが足らぬ、なら凡人の不満であり、並の無念ですが、遯行さんは「八万ほど」とほとんど足りない、恐らく年金の些額を撃っているのです。

厚労省と財務省は01年に比べ07年は六五歳以上の自己負担が年間五九万円増えた試算しています。所得税に住民税、国民健康保険料、介護保険料……、むい老人政策です。

〔上方至念〕誌代表

自選集

塩満敏

新家完司

玉置重人

あの頃はよかつた旅も夢の中
 古い二人寄れば一病持つ話
 後輩の意欲見習うペンの先
 まだ若い気分へ謀反する背骨
 ほどほどに医師のひと言出る元氣

恒松町紅

津守柳伸

雨の日は雨の語らいする慕情
 平凡な一日でしたお仏飯
 陽の目見る晴着に纏いつく歴史
 あせる気がないのでメタボ絡みつく
 海老で鯛時代錯誤はおぞましい

遠山可住

日本を支えた腕も草をとり
 お静かにわたし五黄の寅ですの
 風邪ひいてないかご飯はおいしいか
 富士山と鶴と新年おめでとう
 記憶なしそのうちほんまに惚けるだろ

都倉求芽

今秋は鶴彬句碑建てましよう
 年賀状鼠が顔出し挨拶し
 喜寿だつて青い鳥追っている
 パソコンで毎日日記書きたいな
 孫達が結婚するまで生きたいな
 五年毎の句集五年毎の恥
 紙の無駄と叱られそうな句集なり
 精進を重ねています句も酒も
 五年後の約束法螺にならぬよう
 生きのびてまた五年後に恥晒す
 表紙絵のタッチにもらう力水
 悪友の喝が一番効いてくる
 万一とまさかが怖い老夫婦
 センセイの祝辞選挙のことにふれ
 無力だが時間はたと持っている

世の風のなにを変えたか大晦日
 初風呂も同じ時間に出るひとり
 新しい波も呑み込む広辞苑
 お土産のひとつ重いザボンかな
 落ち椿時は選ばず落ちるのみ

土橋 螢

波多野 五楽庵

古い男が新しい恋をする
目を閉じてゆうべの夢の中に入る
アルバムに十六歳の飛行兵
塩焼きにしたらおいしい桜鯛
如月の空には孫の風揚がる

中原 諷 人

林 瑞 枝

格差など素知らぬ貌か冬の笛
にんげんを慕うも霜の花いのち
いま今も生きたい思い霜ばしら
夢つづる室に加湿器など点けて
のんびりと陰に日向に春を描く

西 出 楓 楽

早 川 清 生

ポリシーを持つてきれいに錆びてゆく
千年紀光源氏に惚れ直す
のぼったが降りる梯子がみつからぬ
もやもやをいつぱい溜めている財布
バラ咲かすつもりで雑木植えている

仁 部 四 郎

前 たもつ

うどん屋が知ってる街の底力
魚屋は肉屋の隣りだが高い
三代めもキャベツ沢山トンカツ屋
イベントといえは餅搗き商店街
選挙でもあればと思うアーケード

ポトポトと月の雫が眠くなる
極言の苦悩を海は語らない
雨の日のためらい傷を持て余す
十年一日反省だけが増え続け
喜寿からの先は言えない老河童
柳友と言う名で出逢う輪が温い
福寿草明るい嫁の胸で咲く
自画像に聞かせるクラシックな音色
少女期を偲んで森に棲む手帳
エネルギー貰いに旅をする日誌
農賃の頃知り今を佳しとする
アメリカの元氣も頼む初詣で
神話悠揚力なき神日和るなり
どの神話にも恋の神いくさ神
どちらかが死なねば消えぬ過去がある
殺人の記事で今年も明けてゆく
小回り利くねずみにメタボ笑われる
お笑いのベストセラーに光る愛
温暖化生んだ人間溺れ出す
人並みの喜寿を楽しむことにする

宮西弥生

働いた記憶のページだけ光る
一見は美人品格では落ちる
不確かな明日に願いが多すぎる
欲捨てて余生探しの旅に出る
午後からの流れゆるゆる太極拳

森下愛論

元旦の誓いを布団の中でして
ひっそりと暮らして居るのに邪魔が来る
分らない事でも返事だけしとき
思惑が外れてひとり愚痴つてる
精一杯余命を抱いて旅枕

八十田洞庵

徒花の華麗実の無い虚飾かも
前身は言わず紅ぬり髪を染め
シンデレラの小声をさぐるノラである
生かさねば苦惱重ねて医書を繰る
そもその天衣無縫と言うお化け

両川洋々

明日のため夢を煮込んでみませんか
潰瘍だなんてカルテが嘘をつく
寡婦のハートに今日は地雷が埋めてある
空想はここまでめしをさあ炊こう
呻き声ばかり国会病んでいる

阿萬萬的

目標もだんだん萎む年となり
べらべらと喋る自分の軽さ知る
有頂天つい口はさむ勇み足
流されて石も私も角がとれ
九十歳あとは付録となる余生

板尾岳人

三月月に抱かれて歩く影法師
美しい花は騙さぬよい躰
黒豆のふつくら母べえありがとう
正直な男になれたしつけ糸
もう少し長生きしよう水中花

奥田みつ子

待望の一輪咲いた朝の笑み
校庭の元気をもらう回り道
自分のこと分らないから夢がある
生きるとは昨日の凶が今日は吉
自問自答死ぬまで続くことだろう

河井庸佑

蝸牛の遅い歩みをじつと見る
原点を見詰め直せと亡父の声
難題を持って来たなという予感
忙中閑暫し訪ねた古書の店
マイペース何もが遅くなった年齢

川 上 大 輪

準備万端あとは卵を立てるだけ
身震いをしたケイタイに襲われる
飛ぶ素振りなどは見せない風見鶏
続くと書いて構想を練っている
あと何度腹の底から笑えるか

木 村 あきら

栄転の内示我家に春巡る
タンポポは綿毛に乗って新天地
瀬戸の浜見下ろす丘に川柳碑
上昇気流乗ってさわやか奴だこ
夢一ツ明日に全て賭けてみる

小 島 蘭 幸

還暦ぞ師の情熱と僕の情熱
我が胸に置くゴーギャンの犬の赤
淋しさの果てかも知れぬゴッホの黄
美術館の余韻とコーヒーをゆらり
古井戸を覗くと万華鏡の闇

小 西 雄 々

臘梅の香りへ風を掴めそう
立春へ重い十字架消えていた
板チョコが届いて歩幅春となる
葬列へ春一番が吹き荒れた
酌みかわす体のねじも緩みそう

小 林 由多香

松葉蟹聖歌流れる街で買う
くじ売り場三億夢に見て並ぶ
勝つためのわなに味方がはまりこむ
寝すごした顔を朝日に笑われる
聖職に居ても金には目がくらみ

斉 藤 磊

とんとんと毬つく音のいい家族
れんこんの穴から見えてくる明日
地吹雪の音も写ってくるメール
おととつと亀が兎を追いついた
りんご囓む音も微妙に温暖化



(つづき)

高知県 小 澤 幸 泉

酒消えて友逝き独り初春を愛で
言えぬことあったそれでも生きてきた
銀婚の祝い万札五枚だけ
定年の宴はなやぐように見え
定年の日の花束の重たすぎ

水煙抄

西 出 楓 楽 選

尼崎市 加川 靖 鬼

春の陽が猫の出入りの障子から
大欠伸脳にも酸素分けて欲し
浅い瀬は深く渡れと言われても

筋金が入ったままの頑固者

よく笑う娘の血さらさら流れてる

湯舟から茹で蛸一人抱き上げる

豊中市 荒 卷 夢

今という真つさらな時生きてゆく

頼みごとあつて行きます初詣で

驚きが少しづつ減り老いてゆく

ベテランの凡句に少し励まされ

品格で負けまいとする肩の凝り

ときどきとアンテナ張って生きていこ

藤井寺市 俣 野 登志子

これが古い暑さ寒さがこたえます

風邪の床気分紛らす五七五

携帯に孫の笑顔を詰めてある

もひとりのタフな私が背を押す

売った喧嘩買ってもらえず一人ぼち

柄になく裏を読んだらしくじった

紀の川市 辻 内 次 根

七十はまだ人間の伸び盛り

老人証今をしつかり演じよう

日本が好きで嫌いで出す国旗

労わるかまだ鍛えるか細い腕

一輪の花と同化をして暮らす

変調へ妻の問診受けている

八尾市 田 邊 浩 三

歳月が野心を夢に変えてゆく

飛び出した金魚に訳を聞いてみた

老いの手に尺八握りボランティア

列を見て並んでしまふ宝くじ

ゴール前ゆつくり走ることにする

気にかかるどれで元取る百均屋

尼崎市 小池 幸子

身の丈に合った余生の種を播く
またしても気まずい思い罪な口
母として娘に残す生きる術
バランスが取れず家計は不安定
ダイエットお腹が空いて風邪を引き
賞味期限は自分の舌に委ねてる

明石市 糺谷 和郎

いつの日か燃やそう火種取っておく
それなりの努力はしたが自問する
切れたのか口から刃物振り回す
カロリーを取った分だけ漕ぐペダル
言いにくいことはメールで用を足す
解答がヒントに埋もれ出てこない

加東市 安達 厚

失敗の話は皆な聞いてくれ
笑う年であれよと祈る初日の出
年ですね初心マークに追い越され
また一つ幅を狭めて老いの道
これほどの頭だったか物忘れ
日記書く昨日と同じことを書く

高槻市 片山 かずお

体型がスリムな服と仲違い
ベルトよりゴムが楽ですメタボ腹
正直な鏡はあまり見ない主義

オイと呼ぶ名前があると返される
僕が出すサインは妻に無視される

ブランド店ドアを押す手のためらわす

今治市 渡邊 伊津志

和解したビールは喉で手を叩き

最後まで希望与えるのが名医

スリープはスリープの誤解だと分かり

カッチーンと来たのは思い当たるから

顔よりも腹から笑う長寿法

物忘れ笑い転げるうちが華

鳥取県 岡村 孝明

老いた爺恋の火種は持つている

忘れても歳のせいだと惚けている

あくせくと動いた汗が富を生む

雑学に富んで話題に事かかぬ

腹の虫酒を飲ませて治まらせ

誕生日忘れて妻に叱られる

唐津市 岩崎 實

餌をまけばどつと寄せる初雀

書き添えの賀状近況あたかし

はにかんだ知らない方に会釈され

見渡せばだあれもない散歩道

脱がされる洗濯好きのわが娘から

年寄りの会話をつなぐ孫がいる

岐阜市 平野 あずま

大阪市 江島谷 勝弘

金婚へ久し妻とのツーショット
半世紀前の写真と見較べる

出不精の身がパソコンと冬籠り

やることはやったが神の目に触れず

肩書きの付かぬ名刺に嘘はない

京都府 清水 英旺

新しく柚子継ぎ足してしまひ風呂

十二編のドラマを予感カレンダー

古稀の年迎え高らかファンファーレ

バス待ちの顔どことなく新春めいて

顔付きも頑固に春を待つ冬芽

京都府 藤井 文代

何もおへんと寿しの出てくる京都どす

置手紙に日頃の文句そつと書き

アンテナ下げ生き方少し変えてみる

大風呂敷身のほど忘れ広げすぎ

貪欲に陰口さえも味方にし

大阪府 安藤 なつこ

元旦の平穩支える人もあり

せかされて川柳つくる味気なさ

カギツ子の心のカギはママが持つ

母と門司 天国の兄想う旅

皆元氣それだけでいいお正月

我が家にも埋蔵金があるのかな

ケセラセラなるようにしか生きられぬ

おひなさま三十回も飾ったが

気の合った友と一杯めっちゃ愉快

退職後不思議と風邪を引きません

大阪府 太田 としお

無党派になってしまったねじれから

駅伝のタスキはるかに富士の山

年賀状大夫妻の宛名書き

千年の杉が出迎う熊野道

淀みなく四十七士の名を唱え

大阪府 坂 裕之

七草で子年がやつと動き出す

遠目には富士山とても美しい

贅沢は嫌いが亡母の口癖で

友が逝く寒中見舞悲しくて

真つ新たな本もノートもぎこちなく

大阪府 澤田 定子

オイルマネーきらびやかなるドバイの灯

灯明に精霊の影宿り来る

受け応え独りで演じ猫と住む

外灯も朝寝坊する休みの日

栄転かと問い返してる子の知らせ

大阪市 田 浦 實

ガス灯が艶つぼくする霧の街
雪化粧した南天の艶やかさ
どんで見つけた灯り暖かい
同じ年心の鬼も弱音はく
偽を正すために偽と書く貫主さま

大阪市 寺 井 弘 子

指輪抜きフリー気分になつてみる
いい旅の名所テレビで見ればかり
見て聞いてメモに書いてもまた忘れ
嫁ぎ来てもう半世紀太い指
食い倒れの街に暮してやせられぬ

大阪市 萩 原 大 朔

曲がれない曲がりたくない角がある
そのことは黙って墓に持っていく
冬日和誰かに感謝したい朝
箒星見上げる人を掃き清め
着膨れて湯たんぽを抱く原油高

大阪市 橋 村 容 子

湯気の中感謝しながら大晦日
迎春の花に活力もらった日
年賀の子同じネズミは居なかった
朝日浴び小皺の数を読まれそう
人生も完走したいと初詣で

大阪市 原 田 すみ子

忘れたいでも戒めに忘れない
忘れてた初心とりだし磨いてる
万事好調お風呂掃除もハミングし
笑ったら肩凝り少し楽になり
歳月に愛はいろんな顔見せる

大阪市 山 本 加お里

私観てとばかりの一輪の花
向う岸へ渡った人へ送る経
ガソリンを無駄づかいする昼のバス
図書館は靴音だけの静寂さ
朝な夕仏をまもり元氣だす

大阪市 吉 川 弘 泰

節分が過ぎて日溜り暖かい
人生はことごと粥を炊くように
ハイキング汗の挨拶杖元氣
湯治場の炭火のこたつ癒される
役得か舞台の上で抱き合つて

大阪市 吉 田 富 美

快晴と日記にしろす春立つ日
紅梅のそつと覗いて塔のかげ
雛かざる猫も晴着を着せられて
紅梅とわかる蕾になって来た
手のひらに包んで匂う路のとう

池田市 上嶋 幸雀

初日浴びいよいよ新しい私
元旦の挨拶どこか他人めく
子の年もスローライフを守り抜く
手を焼いた息子がくれたお年玉
抽籤日までは大事な年賀状

池田市 多田 契子

最初からやり直すには余白減り
あと五分中味の抜けた顔でいる
万華鏡試行錯誤をあざ笑う
不覚にも眠り煩惱年を越し
妖怪のねずみ男がもてている

泉大津市 助川 和美

未来ある子のため残そ九条を
福袋妻にとつては大仕事
値上げラッシュ父は我慢の発泡酒
総理から信じられない信の文字
立ち読みするな言えば若者座り込み

泉佐野市 稲葉 洋

昨日でも明日でも非ず今日に礼
二本だけと言った銚子が四本空
鉛筆を持たぬ教科が好きと孫
突き刺さりそうな三日月謀反の夜
夫々の修羅場を筆に込め写経

門真市 矢阪 英雄

蓮の花泥田きらりと活気咲く
蓮の葉に弾けて滴銀の玉
目と目とが合つて心が軽くなり
温かい人情積もり冷気解け
先人の知恵参考に街おこし

河内長野市 木太久 正一

掛軸は松に鶴からよい年に
千両も南天もわが庭育ち
この年も日記つづけて行くつもり
瀬戸際に立つ思いあり年明ける
穿きやすいオンボロズボンばかり着る

河内長野市 黒岩 靖博

立て板に水の挨拶恐れ入り
亡き母の面影だぶる孫の笑み
沈黙を破ったマグマ妻の愚痴
まわる寿司世界の都市を制覇する
ニユールック伊達の薄着で風邪を引き

河内長野市 針生 和代

幾星霜重ね夫婦の晦日蕎麦
旅帰りほっと一息する茶の間
日溜りで猫が聞いている立話
電飾に立木ゆっくり眠られず
一人立ちした子へ母の定期便

岸和田市 中岡香代

入れ知恵もつけ送り出すランドセル
去っていく日々追いかけて暮らす日々
プロ野球に刺激を受けた三歳児
気持ちより本音お金と顔が言い
どちらとも嫌でだんまりまだ続け

岸和田市 米富淳風

手の届くところに春が見え隠れ
悲しいよ名前がすぐに出てこない
待ち時間皆一斉にメール打ち
更新の写真も年季積み重ね
大食いの画面に飢餓の民想う

堺市 大久保伸子

少年に風化させたくない戦
自分史をおりこんでいる顔の相
痛い目にあって生き方かえました
傷口へいつも他人は触れたがる
サヨナラをしてからどつと出る疲れ

堺市 荻野象山

ブームが去った頃を狙って行く特価
書き初めへ筆がたつぷり墨を飲む
好きな人へ汗を握って書く賀状
人込みに飲まれて渡る太鼓橋
省エネへ早寝遅起き昼寝する

堺市 羽田野洋介

今日の余裕明日へつなぐ仕舞い風呂
無駄足も無駄話して埋め合わせ
悪運もそろそろ賞味期限切れ
ワクチンの効き目気にする風邪の神
遊ぶ子の声も少なくて渴く街

吹田市 藏田光子

回覧を届け様子を尋ね合う
噂話他人ごとでも気が回る
浪人生ひと味違う回り道
歳月が日にちぐすりで忘れさせ
歳月がきざんだ姿顔かたち

吹田市 早泉早人

職退いて妻から貰うお年玉
松の内過ぎると初心忘れてる
長寿国そのうちきつと長生き税
森に触れ芽吹きを音を聴いている
幹事していらぬ節介焼きたがる

高槻市 笠原乃りこ

裏表印刷されて賀状来る
寒暄に嫁の来てなき子を想う
つきたての餅の中から幼き日
綿入れもダウンと呼べば洒落てみえ
ねじれてた母の手編みの冬帽子

高槻市 安田 忠子

満ち足りて心豊かに第九聴く
耳鳴りで聞こえぬふりも都合よし
目覚しの鳴るまえきつと目が覚める
お正月重い荷物で娘の家へ
旅に出て七日遅れで見る賀状

豊中市 神野 宇乃子

屋根上のベンペン草も粥に入れ
悲しみも綿毛で包む母子草
ひよこにとはこべら刻む小さな手
ダイエットしてもすずなの足のまま
七草を炊いて今年の無事祈る

豊中市 松尾 美智代

鐘が鳴る度に煩惱目を覚ます
年賀状ひとり一人の顔を読む
新年の空気は澄んでやわらかい
初詣で少し遠くが多賀大社
さすが湖東雪いっぱいのお正月

寝屋川市 岡本 勲

カピ生えた脳が誤作動して困る
豊かさのつけですメタボ気いつけや
熱いお茶入れて至福の老い二人
豊かさをとめて猪街に出る
残り火を旅で楽しむ老い二人

寝屋川市 北田 ただよし

新しい風を迎えに立つ舳先
産道を降りた勇気を憶い出し
失うものが大きく見える凹面鏡
徒長枝が誇示する真っ直ぐないのち
もう一つ山越えがあるロシナンテ

寝屋川市 森田 麗

身分相應幸せ祈るお賽銭
黒豆の煮上り具合母を越え
泣き笑い五分五分の歳暮なし
手作りと書かれた方に足が向き
餌くれる人に愛想が良い金魚

羽曳野市 森下 一知

嫁が来て新旧知恵の合わせ味噌
万歩計閑を潰しに持つて出る
自らを奮い立たせる苦いミス
健康の過信が嫌う聴診器
告発がのれんの裏を晒け出す

枚方市 小川 良吉

老いた母時代のずれが見え隠れ
メタボ腹むかし貫禄いま未病
ネオン避け路地の提灯はしご酒
どの街もパチンコネオン花盛り
ネオン街ネズミもメタボ人並に

枚方市 小林 わこ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

回りまわって私の元に届く風邪
オール電化停電したらどうしよう

元少年今も得意な独楽回し

しなやかに変り身うまい冬帽子
胸の内わかってくださいいお月様

枚方市 二宮 紫鳳

アンテナを全開にして夢探し

寄せ鍋に会話飛び交うクラス会

もみじの手ポケモンカルタ得意技

はつ春を祝う我が家の梅一輪

年玉を孫の笑顔に奮発す

藤井寺市 伊藤 アヤ子

一年の計などいらぬ明日がある

新春の風がほころび縫い合せ

初詣でおみくじ引いて運だめし

夢などはまだ棄ててない古希の坂

また一つしわも増えてる誕生日

藤井寺市 津田 シルク

ポケットにはニトロと飴が入れてある

八十は若い方だと言う集い

二度童子子供の顔も名も忘れ

食するをためらう和菓子の出来映え

食偽装あれこれみんな美味だった

ゆず二つ浮かべ至福の仕まい風呂

物忘れなんだこれしき生きている

紙袋まるめたような過疎の老母

梅の木にみかんならせてメジロ待つ

前頭葉耕しながら句をひねる

藤井寺市 吉田 喜代子

古里に亡母の野良着が消えている

古里の景色も何か物足りぬ

正月もコーヒーの香に起こされる

値上げ値上げ亡夫の丹前出してみる

早春の声が聞こえる散歩道

箕面市 寺井 柳童

柚子浮かべ孫に伝える冬至の日

ヘッドライト一瞬過る冬のバラ

偽だけは今年限りに除夜の鐘

風水に凝り壁という壁みなピンク

月明かりお百度を踏む白い息

八尾市 赤木 妙子

鍋はいい庭でいそいそ菊菜摘む

生きにくい浮世ゆらゆら泳ぐ

手書きの便りうれしかったという電話

コンコンと内緒が出来ぬほどの知恵

母ちゃんの一喝雷より恐い

八尾市 笹倉ひろし

名医とは待ち一時間診て二分

ツーンボずれて去り行く女性知事

三十郎二番煎じは味薄い

イチローの抱負今年もメジャーだな

薬浴び長寿を誇るわが日本

八尾市 田中トシエ

老いふたり静かに回る洗濯機

建前に寝ていた本音起き上る

年金の四月に痛いのは袋

孫からの旅行みやげは高くつく

旅の宿語尾のやさしい国訛り

八尾市 寺川はじむ

過ぎてからちよつと齧ってみるブーム

飲み込んで小骨が刺さってる妥協

断って二度目の誘い来ぬ誤算

うるさいと思う居ないと静か過ぎ

万物の敵に回されてる原油

八尾市 中島春江

みどり児の何がおかしや初笑い

子には子の過し方ありお正月

寒雀脹れて親し吾に似て

訪れて蠟梅の香の床しさよ

手袋の右だけ脱いで握手とは

八尾市 西川義明

合格通知家族の笑顔皆弾け

里帰り無口な父がよくはしゃぐ

里の母祖母につかえた従と忍

泣き笑いあつて楽しいこの世哉

いい笑顔を優しくする薬

八尾市 松葉君江

あたたかい人にはあたたかい人がよる

川柳で老いの孤独をけつとばす

豊かさのかげで辛抱死語になり

裏表ない父さんの一直線

情報を一つもらった立話

八尾市 脇俊子

夢を追う枯木も俄然スクワット

風の音胸にドラマを残し去る

割引に欲と財布が喧嘩する

終章のページをめくる期待感

総てオンこらでネジを巻いて春

大阪府 小栢こずえ

必要とされる喜び腰が伸び

孫たちに負けて嬉しいかるたとり

我をはらず甘え上手に老い生き

速効の薬はないが毒はきき

泣いてても笑っていても日が暮れる

万能細胞五臓六腑の福袋

大阪府 神野千恵子

日なたばこ眉間の皺がのびてくる
メモ通り動いて今日も暮れてゆく
ついついと自分を庇うくせがつき
ガソリンの過食症という病

大阪府 高木道子

のほほんと人も夕陽も去って行く
コーヒーに話を溶かす冬の雨
モノクロの風二ん月の野を翔る
神仏を騙す偽の色罪の色
モンキーの如くタレント手を叩く

大阪府 西川冷子

茜いろかがやく尾根に初日の出
かぐや衛星やつと月まで姫送る
荷はすべて減らし終え行く老夫婦
パンの香が恋し我慢の松の内
リボ払い見きわめ大事先怖い

大阪府 畑中節子

居心地に甘え低温やけどする
五欲捨てほどほどで良し喜寿の坂
万年青活けつぶらな光初春の床
世は移り元旦の屠蘇静かなり
一歩一歩よろこび実感春の音

ドライブに出てから眼鏡思い出す

大阪府 若月裕作

下駄箱の掃除へそくり顔を出し
ぼろ儲けあると投資の誘いくる
ぼろい話乗ったら最後泥の舟
年末ウォーク大正生れは僕独り

神戸市 木村忠義

初詣でしないと変な感じする
神様のお手すきの日に初詣で
笑い合うことの戻ってきた我が家
定年後八方美人死語にする
席譲れないために寝たふりをする

神戸市 武田恵美子

おばさんの中とびかっている新語
みられたくないメモ書きは裏むけに
高い服家計簿からは外す知恵
孫たちが歩くのおそいと背中押す
早朝にさそいのメールうれしい日

尼崎市 河津正治

人肌が恋し紅葉の涙雨
小春日和母子ハビリの笑顔見せ
平凡に育ちつむじの左巻き
球根が春の息吹を夢見てる
百咲いて人それぞれの百の彩

尼崎市 藤岡りこ

篠山市 永井かほる

食べ過ぎも食べたくないも気にかかる
今日も元氣小さな幸に手を合わせる

ご来光思わず祈る人ばかり

物干しを見れば人柄よくわかる

離乳食見ているパパが口開ける

加東市 岩本美緒子

一年の重さしみじみ坂上る

顔浮かぶ人それぞれの味 賀状

孫からも年玉受ける歳となり

懐の重い諭吉のお年玉

穏やかな日々への甘え恐くなる

加東市 黒崎美紗子

焼肉の匂い寢床へついてくる

初春の湯気は違った香りする

正月に病休んでくれないか

リハビリが頼みの綱と行く日課

紅白の幕晴れやかに地鎮祭

篠山市 谷田多美子

もみくしゃで賽銭投げる平安宮

初詣で粉雪が舞う銀閣寺

庭園に粉雪しずか銀閣寺

初詣で袂に春の京の街

箱根駅伝胸は高鳴る炬燵から

四十年乗った自転車お別れし
前二輪こけぬ自転車プレゼント

一日が楽しく暮れて早すぎる

とだえてた賀状に元氣もどって来

いとこ煮を美味しくさせる大納言

三田市 白井二英

忘れないように手首にゴムバンド

噂だけの先入観を戒める

知らぬ間に病気にされておりました

ばくたちも同犯だろう温暖化

また会おう言ってかれこれ五年たち

三田市 上垣キヨミ

元旦は孫に曳かれて初詣で

寝正月前頭葉も高軒

生きとるかあ元氣をくれる年賀状

早起きの孫に布団を開けてやる

湯たんぽと猫を愛してエコ暮らし

三田市 阪本藤朗

日溜まりをまた老猫に占拠され

酷暑あり厳寒あつて物が売れ

大晦日こんなところに寺の鐘

獅子舞も万歳も来ぬお正月

昭和史に書き残しあり青リボン

三田市 辻 開子

看護師の会話が耳に恐くなる
待合室診察恐い結果待ち

ケセラセラ六十路介護も陽気にし
なにもかも平均でよい元気なら
ベテランの鼻の高さに嫉妬する

宝塚市 丸山 孔一

目覚ましも持たず草木は目を覚ます

折り跡のついた国旗を上げる日

犬散歩犬の名前で今日は

有難う妻の寝顔にそつと言う

咲く花も散る花もあり時流れ

西宮市 石野 照代

我が家では三文芝居で幕が開く

待合のポスターで梅の見ごろ知り

正月の記憶の母はかっぱう着

地球より人の心の温暖化

偽の芽があらこちらで発芽する

西宮市 藤本 直

人助け自分助けも少しある

品格を説く人々の四角張り

幸せと思える幅が広がった

神が振る人生ゲーム逆らえず

難題もあるがさておき春を待つ

西脇市 七反田 順子

バスポート愉快な人を道連れに
わくわくと円い夕陽の機内食

恵比須さん老いも若きも笹を持ち
遣り繰りで三人家族恙無い
バスポート旅のお友は正露丸

三木市 広瀬 房江

漫才に涙出るほど笑わされ

生きているだけで倅せ今日の春

勝ち負けは生きている限りつきまとう

皆帰り元の二人で蜜柑むく

仏前へ孫にもらったお年玉

奈良市 阿部 茶々

笑わせて私ピエロの役回り

諦めず待つ甲斐あれとめぐみさん

年月が昔の恥を浄化する

目の手術すみ驚いた顔の皺

話好き肝心のとき黙秘権

奈良市 乾 春雄

飽食の罪に溺れた三が日

止まるまで笑顔は見せぬ独楽の芯

男の胸に女の知らぬ夢がある

都市砂漠ふる里捨てた人の群れ

吹けば飛ぶ年金老いの城守る

奈良市 岩本 浩二

橿原市 藤永 実千代

握り箸娘器用に飯を食い
論で勝ち涙で負ける不甲斐なさ
勝算があると思うな恋と株
パチンコ屋たまに勝たせて破滅させ
モンゴルの国技かいなと賜杯泣き

奈良市 田中 賢治

埋蔵金振り分け肥やす政事
言い訳を聞けば聞くほど隙間風
葉害に民のうねりが節正す
縄のれん雛鳥だけの賑やかさ
不出来でもほめられたから続けてる

奈良市 矢野 良一

今至福炬燵に入り雪見酒
鼻風邪でコーヒーなんと苦いお湯
ケータイを持たされ妻のロボットに
望郷の念に駆られる除夜の鐘
婚と葬神と仏を使い分け

生駒市 小西 稔

家で飲む醉えない酒は監視つき
飲む酒で勢いつけて出す言葉
飲み薬医者にだまって半分に
年賀状添えた一筆気が和む
裏表バソコンまかせ年賀状

誤字までも素直に送るファクシミリ
ため口で話せる仲の羨まし
欠礼へ返す優しさ教えられ
君は逝く知らずに我は歌いおり
千の風私の番は何時ですか

和歌山市 坂部 かずみ

簡単にスイッチ入れて暖がとれ
オイル高湯タンポ抱いてホッカホカ
お正月昔話をしたくなる
小正月友が集いて初笑い
鏡開き小さい方から食べていく

和歌山市 田中 すす

前略から始まる至らない言葉
聞き流す耳がだんだん萎えてくる
春へはるへとこれから急ぐ始発駅
生きています余計なこともたんと言い
針の穴抜けると広くなる世界

和歌山市 土屋 起世子

百円で大吉買った初詣で
祖母が縫い娘が着て孫も今年着る
十を聞きやつと分って押すボタン
おおらかな暮し現実見ないだけ
見て見ないふりも加齢で得た特技

和歌山市 根田 よしこ

大切な子らに切り札持っておく

髪カット額縁変えて顔変わる

トップより達者であれと願う祖母

今年こそうんと笑おう日記帳

寒い日は鍋に熱燗あれば良い

和歌山市 福井 菜摘

産声に父の歩幅が広くなり

哺乳瓶わが家に春をつれてくる

ぐい呑みの底に明日の詩がある

豪快な話が好きな茶碗酒

終章は歓喜の歌で綴りたい

和歌山市 堀 富美子

弱り目に人の温さの余韻抱く

息災で子等と寛ぐ初春の膳

恥掻いて拾った知恵が陽の目みる

理不尽な詮索よそう腹据える

雑魚だから真っ直ぐな目をそらさない

和歌山市 山田 侃太

居心地がいい距離感の友がいる

つまずいた石には悪意ないのです

一日のスイッチ入れるお味噌汁

防犯灯道を見つめたまま無口

自叙伝に載せるつもりで今日を生き

岩出市 村中 悦男

真実の糸で織りたい人生布

穏やかな人との会話春日和

風の子の大声がいく霜ふんで

生き方の奥で光っている本音

寄る年と先ず相談となごむ妻

海門市 小谷 小雪

娘から卒寿の母へお年玉

脳トレへやる気の母の得意顔

見た目では平和でしようか日本丸

人間の免許が欲しい鬼がいる

朝イチに陽の当たる道選り歩く

紀の川市 宇野 幹子

シヨパン聴く一枚ずつを脱ぎ捨てて

真つ当に歩こう神がくれた道

時は金尺取虫は動かない

嘘ついた昨日を包む厚化粧

悪の道今オアシスが涸れている

紀の川市 北山 絹子

立ち直る勇気をくれた路の薔

草臥れた手帳に父の詩がある

愛情を注げば子等のよい笑顔

耳にたこ出来そう妻の言葉じり

雑学は今からだって遅くない

紀の川市 木村 經子

和歌山県 森 下よりこ

夫逝き自分さがしの第二幕

初夢は内緒ないしよであたためる

遮断機がおりてしまった左耳

だんまりのわけは花言葉でかえす

森羅万象に教えてもらうことばかり

紀の川市 吉村 幸

スタートに戻るチャンスよねずみ年

そして初春屠蘇酌み交わす人がいる

平々凡凡を願う拍手強く打つ

どっこいしよと言うまい椅子に笑われる

梅一輪咲いてコートが重くなり

田辺市 大峠 可動

冬深し五臓六腑に湯を流す

煩惱を抱くと個性の謎が解け

あの人の含み笑いは自負だった

理想だけ翔んで擬装の包装紙

故郷へ帰る心よ砂時計

橋本市 石田 隆彦

また浪費知りつつ買った宝くじ

お歳暮に一年の恩絞り込む

切り詰めて今年もわが家寝正月

亡き母の写真が見てる活入れる

外出の意欲挽ぎとる朝の雨

どこでも方言使うおばあちゃん

プライドをてんこ盛りしたのし袋

寝正月一日寝たら飽きてきた

深夜便聞いている耳が澄んでくる

その場かぎりのいつものお詫びしらせ切る

鳥取市 近藤 秋星

大晦日も元旦もない救急車

寒がりの僕には冬は天敵だ

小正月までは私の冬眠期

どんな年になるやらスタートから狂い

冬將軍お手柔らかにこの冬は

鳥取市 谷岡 清子

初夢に亡夫と在りし日を語る

亡夫には涙をまぜたおとそ酌む

母さんの笑顔満点児の笑顔

とんど燃す煙も美人お好きならし

太陽が元氣出せよと背なを押す

鳥取市 津村 律子

窓は雪初日の出待つ生放映

健康を氣遣う年賀ありがとう

お屠蘇受け黒豆ひろう指達者

祖母の小言を理解する歳となる

路のとう春の香りを膨らます

鳥取市 松岡照美

咳ひとつのどのまわりが騒ぎ出す

いつの間に大黒柱入れ替わり

寝転んで冬の陽差しを一人じめ

一年の苦勞二人の忘年会

退職へ子に招かれて胸熱く

鳥取市 山岡紀子

健康であれば一年良しとする

お隣の孫に遊んでもらつて

休日もやっぱり五時に起きている

朝の電話わたしの予定狂わせる

時々勝手な耳になりたがる

鳥取市 山口千代子

荒れた手をなでて温める夫の愛（夫婦の絆 5句）

辛さにも愛の絆で堪えられる

一歩下がって夫をたてるのも内助

結ばれて早いもんだよ五十年

新婚に戻つたようにまた二人

鳥取市 横田春名

不平不満幸せ崩しはじめるよ

和尚様そうかそうかと笑みこぼれ

好好爺さすが一族束ねてる

閻魔帳こっそり覗き覚悟決め

先祖様元気で傘寿迎えます

倉吉市 藤井美津恵

夢のある暮らし忘れず生きて行く

憎らしいこの毛虫にも命あり

出初式虹を描いて美しい

元旦に正月らしくほたん雪

元旦の誓い忘れず靴をはく

倉吉市 福光京子

初風呂の窓枠使う伯耆富士

ジェット湯で灰汁も抜けます背も伸びる

ほんのりとお湯につかった胸の線

体重計そつと乗っても跳ね上がる

温もった頬にやさしく雪が舞う

倉吉市 前田喜美子

適当に忘れる祖母の知恵袋

黒板に書いてあるのに見忘れる

心臓のピンチに酒量ぐつと減る

外出はやっぱり怖い日暮れ時

呱呱の声天下取るよな面構え

境港市 遠藤那珂子

願ってもどうにもならぬ恋一つ

白鳥が私の村が好きで来る

袖も通さず高い着物を寝かせてる

着物縫う母の指先はずんでた

快い友としはしのティータイム

米子市 小塩 智加恵

新蕎麦の旗なびかせる山の道
孫の数ねずみ画かれた年賀状
年賀状変らぬ友の筆達者
品格を自問自答で採点す
孫の職不平はよそう正社員

米子市 見山 温子

庭の角鳥の土産の花が咲く
年末は人もお金も忙しい
徳のある人には富もつきまとう
故里の香りを詰めて荷を送る
酔いませべらべらとよくまわる舌

米子市 吉田 陽子

木枯らしに追いたてられて落ち葉掃く
かじられた脛から足が脆くなる
人を刺す言葉の鞘を外すまい
花の芽がニョキニョキ脳を刺激する
寒そうなストーブに火を付けてやる

鳥取県 飯野 菖子

余りなどない人生を無駄にせぬ
余り物食べて足腰まだ元気
ゆとりある母の背を見る子の姿
すっかりと夕日落ちても野良が好き
合わせたい呼吸をいつも避ける人

鳥取県 岩崎 和子

面倒を克服家で餅を搗く
鼻うたで手が良く動く台所
てきばきとやろうとしたら躓いた
大鏡そっくり母の容姿立つ
汚れない瞳を持つて児は生まれ

鳥取県 大塚 美代子

わがままを許してくれた故郷の母
罪一つ許して飛ばすブーメラン
雷鳴に北風小僧あばれ出す
老いてなお瞳の奥に母映る
踏ん張って立った子馬が母を見る

鳥取県 岡本 幸枝

たどたと五色にのせた孫の夢
愛しさを形見の品が募らせる
禁煙ができた文句ないのにな
子等の無事きらめく星に掌をあわす
かいた恥肥やしにしては生きている

鳥取県 斉尾 くにこ

張った意地笑いころげて溶けてゆく
自分好きになれたらなんと素晴らしい
いきづまりふと眼の止まる寒椿
又三郎語らいたくて強く吹き
言い訳は聞こえるようにひとり言

鳥取県 坂本 智子

欠損を出しては生きる策を練る

世帯主未来を拓く夢を持ち

少しづつ体力低下さびしいよ

温泉にどっぷり浸かり骨休め

パチンコに浸かり家庭が崩壊す

鳥取県 田口 清帆

忘れぬようメモした紙をまた探す

たまったなあお金じゃなくて体脂肪

無理するな本心ならば休暇くれ

無茶言うなサントはそんなに金がない

ポイントを貯めたいばかりに無駄遣い

鳥取県 橋谷 静江

寒梅の匂うお部屋で句を作る

ひ孫だきバワーを貰う歳女

なによりの癒やしひ孫の顔を見る

孫達に歩幅を合わせ息が切れる

友からは風のたよりを待っている

松江市 相見 柳歩

くじけるな夜明けの来ない夜はない

夜が明けて君の絵手紙また見てる

未来への扉仏と共に開け

来世への旅立ち派手に見送って

オオカミに化けるよ君が望むなら

松江市 柏井 日出子

昇天と奈落教えるコースター

お餅までハイカラピザにする嫁御

力抜き生きると陰は陽に変わり

くだらない物が楽しい夢くれる

ヤル気出し夫仕事の鬼となる

松江市 山根 邦代

まだまだと顔に心に薄化粧

ありがとう笑顔お返ししておこう

ほどほどで良いけど先を思いやる

美容院出ればるんるん軽い靴

日溜りで布と針とが待っている

出雲市 川島 和歌子

乾杯へ新酒の香る初句会

茶柱が立って広がるいい香り

座布団に笑い残して帰る客

農曆たしかな爺が取り仕切る

躓いて石が教えた気のゆるみ

雲南市 菅田 かつ子

部活の子カレー山盛り平らげる

役付きを一つ断りほっとする

ジャケットの胸に輝く赤い羽根

春に咲く種はやっぱり蒔いておく

しんしんと積って朝を慌てさせ

雲南市 武島 ちよえ

今年また届く福祉の手が温い
生きて行く道喜びと悲しみと
私の影は自立がまだ出来ぬ
北風が頬に嬉しい吊し柿
登校の児等に弾ける霜柱

雲南市 渡部 好榮

いい暮し私サイズで追いかける
砂時計海のロマンをまきながら
行く道は一つ明るく今日も生き
二人旅それでも切符別々に
よく持った夫婦茶碗の独り言

安来市 原 煩惱児

老僧の鬚か亡者か芒の穂
足湯して家路を急ぐ夕茜
過疎島根やっぱり雪のお正月
追従もうまい孫へのお年玉
妖怪の名前孫から教えられ

尾道市 木曾 一徳

初竈三世代集うチャンコ鍋
初日記十年日記筆おろし
真新し小鉤を締めて初稽古
能面は手創り彌勒能始め
鶴亀で師匠の咽や初話

府中市 馬場 利子

旅立ちの目覚めのベルは苦にならず
傷ついた心に欲しい千の風
生命線信じて明日の彩を溶く
まな板に愚痴を刻んで泣き笑い
舞い上る心押えて紅を引く

府中市 藤岡 ヒデコ

何事も変らず年は改まり
新雪を踏んだ今年の初詣で
餅好きが体重計を嫌う訳
ハツとする素直さにじむ児童の詩
幸せは同じ顔見て晩ごはん

宇部市 高山 清子

いつの世も欲の悪知恵頭出し
熱燗とおでんではらす社の不満
変化球投げれば本音ボロツと出
逢いたさに吹く木枯しにバスを待つ
非売品とあるから買う気そそられる

阿波市 三浦 千津子

朝一番元気ですよと雨戸繰る
生きる知恵作り笑いも嘘泣きも
無遠慮なことば善意と信じたし
気休めを言うては夢を追いつけ
生かされて生きる使命のある命

香南市 桑名孝雄

目も耳も手直し終えてさあ八十路

傘寿とや相合傘の傘の中

八十の恋路邪魔する奴がいる

間の抜けた顔が通用せぬ師走

哲学の顔で二月は閉じ籠もる

香南市 近森功

悔いのない生涯だったとしておこう

誕生日命の目盛り一つ消え

家計簿の赤字粉飾間に合わず

米をとぐ明日の命は知らずとぐ

温暖化つくしあわてて顔を出し

高知県 いの静草

点景となり合うこともいいご縁

瘡蓋がきれいに取れて二重マル

もう孫と比べたくない力瘤

見えないと言われて頭引つ込める

自分だけ分かればそれでいい証

福岡県 林 さだき

マスクしてマスクの人を避けている

欲出してからのボールが曲がりだす

去年まで走れた脚がもつれます

約束を手帳に詰めて若返る

日当はないがいい汗だと思ふ

唐津市 北村松風

喜寿すぎて擦傷のまま乗る愛車

自動車は老々介護必需品

戦後派で真空地帯わかります

臍繰りを抜いたら置き場変えられた

妻病みて男料理のテレビ視る

シドニー 三谷たん吉

国民の審判金で買う選挙

傲慢と卑屈を武器の下卑外交

人間のみにくささらす総選挙

こんなのが二代党主という輩

相撲会頭突きのたたり石頭

メルボルン 藤原ボン吉

雨音が乾く大地に消えてゆく

ぐずつけど降らず気持ちも曇り出す

この国に必要なのは雨男

プロポーズ遣らずの雨に助けられ

世界中どこに居ようが日本晴れ

札幌市 小沢 淳

尻餅で目から火の出る恥ずかしさ

ピエロ役演じ続けて癖になる

笑い皺さげて長寿を嘆いてる

プライドも嫉妬もあって生臭い

舌磨くシェフのプライド星三つ

札幌市 三浦 強 一

東京都 井上 つよし

通院日句会日入れる初暦

全没を気にするなんてまだ若い

お若いと鏡言うまで化粧する

そのうちに飲もうで飲んだことがない

ピンコロでなれたら素の千の風

取手市 葛西 清

階段を下りる途中で待つてみる

不器用で覚えたことは忘れない

柔らかい妻の手首の皺の波

朝市の曲がり胡瓜に味がある

突つ掛けの草履じゃ無理な関所道

日立市 加藤 権 悟

いのち残照風を生まんとして生きる

頑張れと勇気をくれる雲の峰

いい旅の人情に会う風の町

生き下手な父一本の葦である

少年の大意こぼしの中で燃え

草加市 飯土井 健 翁

退屈のそこへセールス鴨にされ

顔の艶七十代という明治

頂上が見えて来ました九十七

明治には根性があり励まねば

九十七男やもめの針仕事

欠けたまま夜空旅する月淋し

童謡が幼い日々を巻き戻し

茜雲忘れ去りたい過去があり

スローライフ夜汽車の窓が懐かしい

チャンコ鍋できれいになった冷蔵庫

昭島市 野口 忠

カンニングよりも白紙で胸を張り

神仏の名を借り母は子を諭す

大根の白さを母は味で染め

妻が吹く笛に今年も踊らされ

呼ばれてもまだしばらくはこちら側

立川市 柏野 遊 花

ライトアップの塔までつづく初詣で

食材は量より質が合ってくる

ユーモアとウィットの要る外国語

上辺だけ滑る水すましの孤独

決心をゆらゆらさせて古稀元氣

横浜市 金森 徳 三

イブの日の満月はつと手を合わす

財産は無いが実印だけはある

老いの愚痴昔良かったことばかり

三連休金の無いのに多過ぎる

好きなもの老いてはみんな毒らしい

横浜市 川 島 良 子

兵庫県 中 村 和 代

仏彫る亡母の面影抱きながら
思いきり働き思いきり遊ぶ
いい湯だなじいじとお風呂ハイパチリ
静かなる時の流れよ仏彫る
孫五日体が悲鳴上げてくる

横浜市 長 島 亜希子

当てにされそうだ足腰鍛えとく
守れない公約をして責められる
サービスは期待外れの民営化
少子化に歯止めかかるかネズミ年
小遣いが不足か息子籤を買う

藤沢市 加 藤 スズコ

風に舞う木の葉も乗せる介護バス
しなやかに明日の夢抱く冬木立
ふつくらと黒豆煮える亡母仕込み
わが家のニュース語り感謝ですするそば
世界地図パズル楽しむ旅気分

佐渡市 高 野 不 二

ダイエット今日は考えない雑煮
誕生日より喜寿は数えで祝います
大食いを種に売り出す人もいる
健康がちょっと呑みたい気分にし
外出はあんまりしない福の神

血も涙もなく年金を減らされる
錆び止めに酒という名の潤滑油
演じれば演じるほどにボロが出る
弁当箱連れて帰った午前様

奈良市 尾 畑 なを江

靴ぬいでしつかり己取りもどす
トゲ抜いてお地藏様に見せにい
方角が時々狂うベンの先
チヨロチヨロと流れる川も風情あり

奈良市 辻 内 げんえい

ぼちぼちとやっても最後勝てばよい
物忘れ還暦妻と競い合う
大晦日吊り広告も年変わる
デバ地下の賑わいを見て大晦日

鳥取市 大 前 安 子

意外さはでこぼこ道の温かさ
やっぱりと思うが心騒がしい
寒風に揺れる大根味深め
誰がため咲いたか花は静かなり

境港市 中 井 虎 尾

木々の知恵枯れたふりして春をまつ
アとハ行合わせ個性で人笑う
ハードルを下げてひっかり歳を知る
極悪の人防の頂にいた

鳥取県 大田 勝 誉

大洲市 花岡 順子

いいことに反対をして叱られる
脳裏にある親の生き様なぞらえる
不可抗力許すもなにも言えませんが
ふえる年金少し先だが確認す

鳥取県 北村 稔

唐津市 吉富 節子

お年玉数なんべんもかぞえてる
名門でないしあわせよ酒一合
今朝もまたテレビおわびで始まった
ダメですねあんなやつぱり真面目すぎ

松江市 松浦 登志子

山鹿市 阿部 ミツ子

二人の息子仲良きことがお年玉
初詣で回り回って厄払い
禁煙でメタバの道をまっしぐら
腹八分わかっていてもいい加減

出雲市 荒木 英子

茨木市 島田 誠一

仏前のあかり絶やさず今日も無事
孤独ぐせ熱めの風呂に癒される
歳のせい亡母さんの声聞こえるよう
今は唯娘のひと言を待つ私

雲南市 福岡 博利

栃木市 岡野 すみれ

病院の小庭の椿花盛り
妻多忙洗濯物は籠の中
忘却を競い合ってる二人です
年金の減ることなどは孫知らず

正月の雪が帰省を振り回す
ライバルを味方に付けてから強い
氣付いたら味方は誰も居なかった
百面相鏡に映し独り住む
お帰りと里の匂いの無人駅
介護して姑の心の雪が解け
浴衣着て父驚かす十五歳
人も世も地球変わるも日は昇る
年の瀬やしらが染めして若返り
年とれば一日一日が勝負なり
フラダンス辞めてしみじみ友思
ネズ公も絵手紙ならば愛らしき
効くまでは欠かさずちゃんと飲む薬
鍋囲む笑顔に似合う酒に雪
蟹ツアー値に釣られたとばかり帰路
年金も夢も御上に召し捕られ
いい噂悪い噂が追いかける
天涯孤独花の水やり忘れない
アルバムに幸せそうな頃の顔
生まじめな男が吹いたほら一つ

横浜市 巖田 かず枝

大阪市 吉内 福世

平成が二十歳になったおめでとう
三度目の二十歳迎えてねじを巻く
ねずみ年体動かすことが好き
ファッションと言つて真冬に超ミニで

北名古屋 片岡 文男

わが家では電化が進むお灯明
様付けで呼んでくれるのはお医者だけ
偽の字が世相を映す恥のくに
バーガーに食いつく作法頂けぬ

大阪市 尾崎 黄紅

賀状来ぬ友のその後は聴かぬこと
昔ばなしで慰め合つて再生紙
いたずらといじめの違い昔いま
無い袖を振つて昔の恋と逢い

大阪市 田中 滋郎

六白金星の星でやつてます
幸せな笑顔見たくて街にでる
老の字が時々消える僕の辞書
喧噪で猥雑ですが平和です

大阪市 平井 露芳

七十五やひとり保険で薬抱き
温暖化地球は汗をかき続け
審査員ならと陣内出しました
原油高漁師は近くで魚捕り

明治から光るガス灯造幣局
初髪を若く色つけ弾んでる
小春日の川風嬉しい散歩道
過去は過去あすに向かつてマウス年

河内長野市 内海 綾乃

冷え症にとお節介やく友がいる
芋のつる食べた戦後を思い出す
母白寿古稀の私が先に逝けぬ
共白髪あれこれそれでわかる仲

吹田市 二宮 栄子

里帰り小さくなった伯母見舞う
風邪などへ無口な息子から電話
あと五分寝かせてほしいベルが鳴る
娘との会話いつも亡夫にたどりつく

豊中市 源田 啓生

心臓くんお正月でも休みなく
抱負など聴いてくれるな素浪人
やれやれと老躯沈める初湯舟
めでたさを一茶がそこで笑てはる

富田林市 古田 千華

凜凜と身にしむ寒気心澄む
救急のサイレンむなし地方都市
磨かれたりんごの命真つ二つ
夢無限父の畑に種を蒔く

羽曳野市 宇都宮 ちづる

着物着て大和撫子気取ってる
和ダンスに亡母の想い眠ってる
ご無沙汰の親戚集う七回忌
子の甘え小さい頃は可愛いが

羽曳野市 仲谷 真一

謝って頭を下げる事ばかり
看護婦で戦地に行ったお婆も逝く
大阪に春の訪れ大相撲
モンゴルの横綱二人国技です

八尾市 前田 紀雄

力抜き素直に詠んで一句抜け
我が身にも値上げで迫る温暖化
優しさに触れて頑固が丸くなり
新年の抱負は持続これに尽き

大阪府 大屋敷 婦美子

同じ日は一日も無き空模様
骨折で身の不自由を知りました
達成感欲しく一途に道あるく
ふところのぬくもりを知る母の愛

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・
一路集・檸檬抄・初歩教室）は毎月15日必着で
締切っていますので、日曜祭日に拘わらず厳守
して下さい。

第6回「川柳展望」現代川柳大賞

対象／新作10句 応募は一人一口に限りまます。

表題／表題をつけて下さい。（「無題」も可）

用紙／B5判原稿用紙（便箋も可）をタテに使用の

こと（応募用紙をそのままコピーします）

応募料／千円（100円以下の切手可）

締切日／2008年5月15日

宛先／〒567-0009

茨木市山手台4-6-3-101

川柳展望編集部

発表／第12回川柳展望全国大会

「川柳展望」135号

表彰／現代川柳大賞 1名（記念楯と副賞3万円）

同 準賞若干名（記念楯と副賞1万円）

同 佳作若干名（記念楯）

審査員／金築雨学、草地豊子、佐藤岳俊、新家完司

高瀬霜石、津田 暹、吉崎柳歩、天根夢草

麻生路郎句抄

(句集「旅人とその後の作品」から)

人生の雑音

わが世とぞ思ふ春にはならざりし
寒うおまんアと藝者も年をとり
人間にしてやろうと云ふ嘘をつく
撞球^{たま}よころべこころを吸ふてころびゆけ
女の浴衣がのれんとなつて揺れ
資本家はキャラクターまで買ひたがり
機械の一部それが人間なんだとき
独り身へ余所の時計が鳴るのなり
神経衰弱の死でないことを書いておく
他人らしくしたといふのがもめのもと

おしゃべりはきらいわが妻ならずとも
運を待つやうに此の頃働かず
機械化のその群衆へ溶けこまう
書庫の裏から街へ何しに
つまり胃が弱いのかやと突き放し
てにをはのあはぬ悔やみとなりにつけり
暴力はよしキリストも殺される
青空に藝者を連れた莫迦らしさ
てつちりへ社長が先に箸を入れ
いつまでも肉と葱との仲であれ
老人は元祖にされて気をよくし
急所とは知らずに云つて左遷され
会社では横顔だけが見える位置
嘘を云ふたがどうしたに困るなり

愛染帖

新家 完司 選

奈良県 渡辺 富子
留守電に達者ですかと母の咳

(評) 自分が咳をしているのに、子供の身体のことを心配している。それが世の母の姿。ありがたく嬉しく、そして、切ない。

大阪市 岩崎 公誠
回しても回しても出る外れ玉

(評) どんなに頑張つて回しても特等の玉は出ない。商店街の役員が当たり玉を入れるまでは絶対に出ない。そのようになっていく。

和歌山市 根田よしこ
居酒屋で夫と飲んで惚れなおす

(評) 家庭では見せない鷹揚な立ち居振る舞いと飲みっぷり。男が男らしさを発揮できるところは、もはや居酒屋しかないのか。

吹田市 太田 昭
満腹になると信号機を守る

(評) 腹減り男は腹立ち男。腹ペコるときは心が狭くなつて余裕はないが、満腹になると心も真ん丸に膨れて「素直でいい子」になる。

美作市 小林 妻子
先生と呼ばれ藁草履を作る

(評) 何かを教えてくれる先達はすべて「先生」である。先生と呼ばふほうは当然と思つてゐるのだが、呼ばれるほうはちょっと面映い。

大阪市 太田としお
歩くこと教えてくれた原油高

(評) 乗り物は便利だが、足腰を弱め地球の資源を食い潰している。原点に戻つてのんびり歩くと、「にんげんたち」が見えてくる。

豊中市 吉田あずき
神様のお顔も存じ上げぬまま

(評) お顔のみならず、いずこにおわしますかも存じ上げぬまま、敬い奉つていただけございますが、よろしくよろしく。

藤井寺市 太田扶美代
生きるのもつらい痛いだるい眠い

(評) 前半戦はルンランランの快晴続きであつたが、終盤戦になつて生きているのが辛くなるような雨、風、吹雪の荒れ模様。

大阪市 谷口 義
半分はこの世から身を引いてゐる

(評) テレビニュースに映し出される現実とは遙か彼方の出来事。それがこの世であれば、我が身は世捨て人の如く彼岸へ向いてゐる。

松原市 玉置 重人
君が代はまだとちらずに歌えます
ゴミを出す男を知っているカラス

池田市 上嶋 幸雀
御破算の出来ないままに初日の出
一年の計を寝床で練り上げる

京都市 高島 啓子
墓参りするにも大を抱きながら
息子から歳暮がときどき判を押す

海南市 三宅 保州
ゴミの日があつて曜日を忘れない
どうせなら象をベットにしてみたい

和歌山市 木本 朱夏
志のない鳩ばかり群れている
バイオリズム乱れて濃霧注意報

吹田市 穴吹 尚士
今年こそどげんかせんといかん国
人がみな邪険になつてきた日本

鳥取市 山岡 紀子
安全と思う電車に乗つてゐる
寝正月決めてうれしい雪が降る

大阪市 井丸 昌紀
赤信号行かねばならぬ時もある
河内長野市 針生 和代

枚方市 伊達 郁夫
急患となつて神さまお医者さま
広告の裏にぎつしり妻の指爪

鳥取市 録沢 風化
未亡人ばかりになつたクラス会
和歌山市 田中 すす

大方は聞き流してゐる人の愚痴

豊中市 谷川 勇治
ドロップの缶からかとあとすこし
帰る家あるから座る赤提灯

樺原市 居谷真理子
二人いて確かに神もいる夕餉
挑む眼でタバコを吸うて淋しいか

黒石市 佐藤 古拙
古傷をいたぶる雪と癒す雪
セーターを重ねて耐える灯油高

枚方市 丹後屋 肇
公園の老女と会釈する冬日
晩酌の後で錠剤引き寄せる

寝屋川市 森 茜
エネルギー途切れぬように昼寝する
木枯らしが掃除機となり街磨く

堺市 村上 玄也
休肝日都合で変えることがある
元旦のニュースもやはり事件事故

堺市 志田 千代
意味不明のお経無心になりされる
お化粧を落とし実年齢で寝る

鳥取県 細田 裕花
政治と金のネバー・エンディング・ストーリー
弘前市 高瀬 霜石

八尾市 生嶋ますみ
さらわれたら余計に長く生きてやる
豊中市 水野 黒兎

年賀状思い出す顔出せぬ顔

吹田市 早泉 早人
初詣で出掛ける人はみな元氣

寝屋川市 籠島 恵子
初詣で喪服の人と擦れ違ふ

鳥取市 田村 邦昭
信心はないが鳥居に手を合わす
八王子市 播本 充子

松江市 三島 淞丘
食べながら眠る いよいよかも知れぬ
瞑想の時間めがねがずり落ちる

東かがわ市 川崎ひかり
パチンコに勝ったな笑いこらえてる
過不足もなくきつちりと支払機

三田市 堀 正和
自分史を書くとき喜劇になりそうだ
ネクタイの要る集まりは欠にする

米子市 政岡日枝子
ほっとけば噂の力消えていた
面舵いっぱい身を引く時は潔く

尼崎市 春城 武庫坊
地下街の花屋で早い春見付け
二人の米寿迎える年だ除夜の鐘

尼崎市 春城 年代
少しずつ癒える夫と冬静か
ひたすらに病人食のレシビ追う

鳥取市 武田 帆雀
世の中に記者解説者評論家
いろいろの人を見ている注連飾り

藤井寺市 高田美代子
川柳を忘れてました三ヶ日

岸和田市 井伊 東吉
初夢に出てきた父に叱られる
病院の近くに住んで健康体

倉吉市 野口 節子
時節柄にこに顔に身構える
和歌山市 喜田 准一

熊本県 岩切 康子
二万歩の汗が背中で冷えてくる
枚方市 海老池 洋

松尾美智代
平成の雪は民話に遠く降り
貧乏ゆすりこれが私のリズムです

豊中市 松尾美智代
夕食の支度しているのは夫
煩惱を騒がせにくる除夜の鐘

堺市 加島 由一
町内で妻が一番器量よし
僕の胃は賞味期限に無関心

鳥取市 有沢せつ子
手で測り体温計を出してくる
踏んだ子が叱られている犬のフン

大阪府 福岡 末吉
明日こそ明日こそはと連敗中
出しゃばりと紙一重かも義侠心

大阪府 森田 明子
そろそろと自分の顔に慣れてくる
上半身だけは急いでいるつもり

和歌山市 玉置 当代

実行のできぬ計など立てて初春
寝不足が続くテレビも私も

京都市 都倉 求芽

忙しい忙しい ひとりで食べる鍋
美しく紙飛行機が着地する

鳥取県 竹信 照彦

公民館行事でやつと餅を搗く
わが家でもうなりをあげる餅搗き器

橿原市 安土 理恵

あん餅の雑煮を食べたことがない
一杯のコーヒーで聞く下戸の愚痴

大阪府 澤田 和重

得意先なじまぬ犬もいて困り
松茸がないのが不満キノコ鍋

藤井寺市 若松 雅枝

笑ったら自然に解けた蟠り
連休になるたび虫歯疼き出す

大阪府 米澤 俣子

効き目ない割に減ってる美容液
ほとんどに悪さしないと不味いめし

西宮市 片山 忠

試食ハムこんなにうすく切れるのか
緒方美津子

高知市 小川てるみ

幸せの基準上げ下げさせている
倉吉市

松本よしえ

弘前市 福士 慕情

乱雑な部屋だが物は直ぐわかる
倉敷市

撰 喜子

傷心を癒す象の目仏の目
朝ドラをさつちり観てる良い暮らし

堺市 山本 半銭

ご立派なホールカラオケショーばかり
三田市 阪本 藤朗

白菜の尻並んでる道の駅
豊中市 安藤寿美子

住み易し近所つき合いない町で
明石市 梶谷 和郎

死ぬ死ぬとよく言う人が水く生き
三田市 上垣キヨミ

ヤキモチを返上すれば太りだす
鳥取市 近藤 秋星

明日の絵は明日になって描けばよい
東京都 清原 悦子

良い事が続かなくても茶が旨い
堺市 矢倉 五月

間違いの電話に品位あり嬉し
弘前市 今 愁女

監視カメラに笑顔してからATM
堺市 奥 時雄

ずりパンツプーム別段悪くない
鳥取市 徳田ひろこ

他人さまの不幸に転げ込むチャンス

大阪市 萩原 大朔
ワンマンが聞く耳持てと訓示する
和歌山市 たむらあきこ

雑食のロクもわたしも元気です
芦屋市 黒田 能子

百貨で買う一年の予定表
飛ぼうかな天窓開けて首を出す

海南市 小谷 小雪

スイス製の時計をはめて待ち合わせ
鳥取市 土橋 螢

ところどころとやと伝えた長電話
シドニー 坂上りのり

高槻市 片山かずお

難題に己の器量知らされる
池田市 栗田 久子

同じへま笑えるうちは笑つとく
大阪市 奥村 五月

忘年会妻は八回僕二つ
羽曳野市 徳山みつこ

牛スジにしておこコロが高いから
大阪市 小谷 集一

プライドを自惚れたとは気づかない
海南市 堂上 泰女

一葉か論吉で迷うボチ袋
鳥取市 土橋はるお

壁掛けにちよつといいなあボチ袋
大阪市 神夏磯典子

省いてはまた楽な道選んでる

今至福夕日波音露天風呂
奈良市 矢野 良一

露天風呂七福神の勢揃い
尾崎市 加川 靖鬼

有められわたしいい気になつてくる
藤井寺市 鴨谷瑠美子

ニュース見て怒って泣いてそして鬱
河内長野市 村上 直樹

お手洗いくと鳴り出す社の電話
鳥取県 斉尾くにこ

ハンドルを持つ手弱気の方がいい
神戸市 田中 章子

お隣も弱気亭主に勝ち気妻
奈良市 岩本 浩一

杉玉に雪がちらちら寒の入り
豊中市 神野宇乃子

披露宴の隅で見ている仕掛人
高槻市 富田 美義

サイコロに呪文をかけて振ってみる
鳥取県 山下 節子

だまつた肝臓文句いいはじめ
尾崎市 山田 耕治

押入れの湯タンボ探す灯油高
唐津市 市丸 晴翠

くすくすと笑い声する更衣室
大阪市 吉川 弘泰

本を読むように通帳じつと見る
八尾市 村上ミツ子

尻尾ふる力なくして見放され
鳥取市 永原 昌鼓

玉手箱誰かが開けた同期会
西宮市 藤本 直

堅焼きに負けてしまった最後の園
八王子市 川名 洋子

脱線を免れながら来た二人
紀の川市 北山 絹子

やつとやつと握手ができる夫婦なり
生駒市 飛永ふりこ

いるだけでおもしろいと桜餅
寝屋川市 岡本 勲

風と陽の恵み干魚うまくなる
米子市 中井 ゆき

謝罪文マニユアル完備社長室
唐津市 樋口 輝夫

次の句会約束をして握手する
寝屋川市 富山ルイ子

前例がなくて回答待たされる
鳥取市 岸本 宏章

運勢はあなた次第という暦
立川市 柏野 遊花

どんと焼きまた煩惱もあらたまる
弘前市 岡本 花匠

ふたりいて暮らしの音も小さくなる
和歌山市 楠見 章子

お誘いに暇のあるとき金が無い
東京都 岸野あやめ

おぼろ月そのふんわりが暖かい
大阪市 田中 滋郎

嫁の味噌汁お湯割にして頂きぬ
八尾市 宮崎シマ子

雑魚なりに輝く日あり辞書をくる
美作市 福原 悦子

筆持つて紙の白さと対峙する
札幌市 三浦 強一

年越して片付け済まぬ文机
鳥取県 岩崎 和子

やっかいな感情恋をしだらしい
三田市 久保田千代

笑われて締入甚平縫ってます
東大阪市 笠井 欣子

童心を詰めたカプセル陽の目みる
大阪市 伏見 雅明

リフォームにトラブルの種てんこ盛り
富田林市 片岡智恵子

貧しさを許せば余生悠々と
熊本県 高野 宵草

李白には敵わぬまでも飲んでみる
香南市 桑名 孝雄

子のメール単語で安否聞いてくる
紀の川市 木村 徑子

友の名を人名簿から消す師走
高槻市 佐甲 昭二

生垣の枝がとなりの噂きく
鳥取県 大塚美代子

誹風柳多留一篇研究 31

山田 昭夫・増田 忠彦

山口 由昭・小栗 清吾

伊吹 和男

清 博 美

213 下戸の礼炭けしつぽをふちまける

山田 年礼。上戸なら当然酒だが、下戸は餅で饗応する。それをすぐ焼けるように、炭消し壺から消し炭をふちまける。消し炭はすぐ熾きから重宝なのだ。

下戸の礼者に消炭をふんまける 初26
清 賛。何故か下戸は餅好きという約束になつてゐる。

214 おそれ入りましたとていまひよぐらかし

山田 朝帰りでもあろうか、亭主の悪行に、さんざん正論雑言ないまぜに浴びせている女房。そこで亭主が「お前の云う通りだ、畏れ

入りました」と「ひよぐらかし」、つまり云い紛らせている図。でも内心は、

なぐさみに女房のいけん聞いて居る 二16
ような懲りない面々なのである。これで納まらないと、

いけんだて置いてくれろとていしゆいひ

となるは必定。

山口 賛。今も使える。
清 賛。

215 うかゞいに下女めしひつをひつかへ

山田 状況ははっきりしないが、下女が飯櫃を引つ抱えて「どうしましょう」と伺いたてている景。飯櫃の飯の量を示してのことだろ

うが、予定外に皆食べてしまつて空になったか、或いは、次の食事がその量で足りるか、内儀に伺つてゐるのだろう。

めしひつをか、へて内儀わらひ込み、 八19

山口 賛。急に大飯喰らいのしなの者でも来たのだろうか。

清 賛。炊く飯の量の決定は内儀の裁量？

216 入智の無念せい人ンよばりされ

山田 入婿は、仲間と花見や紅葉を見に行つても、それだけで帰り、その後当然の遊里へはこ一緒出来ない。

入りむこのつらさ花ならばなつ切 二30
もし余所まで行つたりしたら、

つき合をよくする婢ハおん出され 二32
となる。だから誠に清く正しいもので、「聖人呼ばりされ」。この「聖人」、云うまでもなく人を愚弄する言葉だから、それが「入婿の無念」なのだ。

清 賛。

217 今のかゝさまハにくいと禿いひ

山田 継母にさんざん虐められ、揚げ句の果てに吉原あたりに売られてきた禿、「今のか

かかさまは憎い」との嘆き。でも、継母には
継母の言い分があるようで、

清 賛。岡場所で無ひをまゝ、母恩にかけ 拾七 31
救われない少女。

218 ろうかいの娘行年十九なり

山田 労咳は肺結核であるが、川柳では思春
期の鬱病を指すことが多い。その特効薬は、
男女とも異性と交わることだが、この句の場
合は、本物の肺結核で、抗生物質などの無い
時代、死を待つより無かった。

十九は女の厄年だが、その頃に肺結核が発
病し易い。

箱入を十九て桶へ入れかへる

命日も十九日さとは、はなき 三三 42
一四 26

清 賛。娘十九で労咳も川柳の約束だが、現
実の世界でも労咳は多かつた筈で、若くして
命を落とすものも多かつたに違いないのであ
る。

219 暑気見廻背中をつまみあふかれる

山田 「暑気見舞」。暑い盛りで歩くのだから、
汗だくになってしまふ。そこで訪ねる先
の人に、「背中」の着物「を摘み」上げられ

団扇などで「扇がれる」。

暑気見まいせなかをむけて此通り 九 12
暑気見舞たつてはだかにされる也 五 39

清 賛。

220 万さいハ刀を二本さして来る

山田 「江戸の町にくり出した万歳師の服装
は、初期のころは、太夫は風折烏帽子に大紋
のついた紺色の素襦をつけ、袴をはいて大小
までさしていた」（甲斐久治郎『三河万歳・
ひめはじめ』）。

時代が下がるに従い、道中差しだけとなる
ようだが、いつ頃からかは、はつきりと分か
らない。

笑ハせるやうな万歳形で無シ 四二 14 乙

清 賛。

221 足音にてうしをかくすけちな酒

山田 足音がしたので、飲んでいる酒の銚子
を隠した。秘かに隠れて飲んでいるのだらう
が、状況がはつきりしない。それは読み手の
想像のままで良いのかも知れないが、何とな
くおかしみのある句ではある。

けちな酒こびん先きから酔てくる

清 賛。

222 舌戦さこうじ三くだり書て居る

山田 何が原因か知らないが、夫婦喧嘩の口
が過ぎて、三行半つまり離縁状を書くはめに
なった。多分成り行きでそうなったのであろ
うが、まさに「口は災いのもの」とはよく云
ったものだ。

舌戦の一番鏝に火吹竹

一も二のないと三くだり半を書キ 八〇 14
五四 26

清 賛。

223 あのかゝあこわいやつだハこりたやつ

山田 「あの嬢は恐い奴だ」と言うのは「懲
りた奴」。何が「懲りた」のかは知らないが、
多分人の女房に手を出した結果であろう。そ
れも単に肘鉄ぐらいでは「懲りた」とは云う
まいから、金銭沙汰、つまり落とし前を取ら
れたのでないか。場合によっては美人局も考
えられる。

あのか、ア昔のくせかまた止す 三九 32

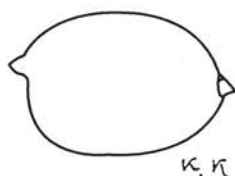
あのか、あこんとてふど十五両 四九 39

清 賛。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「欠ける」

鈴木公弘選

贅沢な心へ欠けてゆくモラル
カミソリと言われた人の刃も欠ける
満月のこれから欠けるばかりなり
聞いて聞いて欠けた湯飲みの後日談
義理人情欠くと世間は戸を立てる
夫婦茶碗お先に欠ける男物
鏡にも品格欠けたまま映る
縄文のかげら集めている孤独
月欠けて女の影が細くなる
地下街で酸欠になる山育ち
氣力欠く人には猫も寄つて来ず
思いやり欠いた山から熊が来た
向き合つた日々が恋しい欠け茶碗
欠け皿でもいいよイチゴは盛れるから
説得力に欠けて眠たくなつてくる
欠席者ゼロ目標の同期会

相生市	村木	信子
松江市	三島	淞丘
大阪市	井丸	昌紀
京都市	都倉	求芽
東大阪市	佐々木	満作
河内長野市	坂上	淳司
四條畷市	吉岡	修
大阪市	柴本	ばつは
高知市	小川	てるみ
福岡県	林	さだき
豊中市	藤井	則彦
和歌山市	土屋	起世子
羽曳野市	吉川	寿美
鳥取県	佐伯	やえ
和歌山市	楠見	章子
三田市	上垣	キヨミ

「欠ける」

西口いわゑ選

刃毀れに気づく喝采浴びながら
礼節に欠けるヤングを叱れない
ひとり欠け二人欠けてく縄電車
欠点を存在感にしてみせる
品格を欠いて汚職に手を染める
堂々と欠ける姿を見せる月
欠けてても夫婦茶碗は掌に温い
うるさ型が欠けてはすまぬミーティング
未だ欠けぬどつかと私の指定席
欠けているところがあつて救われる
何も彼も欠けて独りのケセラセラ
協調性欠けるが孤独にも負ける
欠点を個性と言つてくれた人
疑えば満月さえも欠けて見え
満点の人にユーモア欠けている
沢山の欠点あるが好きは好き

八王子市	播本	充子
大阪市	板東	倫子
松江市	三島	淞丘
香南市	桑名	孝雄
堺市	村上	玄也
鳥取市	春木	圭一郎
大阪市	米澤	俣子
美祿市	安平	次弘道
出雲市	團山	多賀子
雲南市	毛利	幸
和歌山市	福本	英子
大山市	吉田	幸子
松江市	銭山	昌枝
神戸市	山口	光久
藤井寺市	太田	扶美代
美作市	福原	悦子

いんちきの表示老舗の誇り欠け
 パーチャルに欠けたところが映らない
 一月十七日欠けた茶碗に飯を盛る
 欠けさせるくらいなら恋真つ二つ
 堂々と欠ける姿を見せる月
 好きな人少し欠けてる人ばかり
 欠点を存在感にしてみせる
 父母逝つて求心力が欠けてくる
 にんげんの欠けたところにある魅力
 歯車の摩擦に気付かないでいる
 少しずつ仲間の欠ける砂時計
 縦社会横織る糸が欠けている
 ひとりでも欠けると嫌などぶ掃除
 嘘やないあんだ逝つたら僕も近く
 支持率が絡むと欠ける歯切れよさ
 品格を欠いて汚職に手を染める
 子が先に欠ける事などないように
 刃毀れに氣づく喝采浴びながら
 謙虚さを欠いた老舗の店じまい

秀句

軸吟

役終えて欠ける時間を持て余す

岐阜市	平野あずま	立川市	柏野 遊花
西宮市	緒方美津子	西宮市	居谷真理子
鳥取市	春木圭一郎	西宮市	藤本 直
香南市	桑名 孝雄	大阪府	森田 明子
大阪府	大内 朝子	鳥取市	武田 帆雀
香芝市	森下 愛論	東大阪市	安芸田泰子
羽曳野市	片山 忠	西宮市	津川 紫晃
大阪府	太田としお	松江市	村上 玄也
堺市	富山ルイ子	寝屋川市	播本 充子
八王子市	大川 桃花	大阪府	神夏磯典子
和歌山県	森下よりこ	川西市	西内 朋月

品格を欠かないように辞書の山
 欠けた歯が春の口笛吹きたがる
 月はいい欠けても満つる時が来る
 愛情が欠けた男は木偶の坊
 愛のかげらをしかと集めて幸福に
 わたくしの欠けてる所へ風が吹く
 欠けた月空の彼方に飢える民
 欠点をさらけ出したら味が出る
 欠けているものを探しに行く本屋
 傷心をことさらに突く欠けた月
 欠けるほど莊嚴になる野の地蔵
 三日月をブランコにして星一つ
 歯こぼれが続く正直者の列
 欠点はあるが往生際が良い
 欠けた手を想像で見るミロの像
 欠け皿でもいいよイチゴは盛れるから
 鏡にも品格欠けたまま映る
 友達が欠けて無口になるページ
 七色の虹でなくてもいいんだよ

秀句

軸吟

音もなく脳細胞が欠けて行く

河内長野市	村上 直樹	東広島市	福島 万年
京都市	榎本 宏子	鳥取市	土橋 螢
尼崎市	春城武庫坊	境港市	遠藤那珂子
大阪府	萩原 大翔	京都市	三宅 満子
熊本市	永田 俊子	川西市	西内 朋月
海南市	堂上 泰女	東大阪市	北村 賢子
弘前市	高瀬 霜石	大阪市	谷口 義
大阪市	升成 好	鳥取市	佐伯 やえ
四條畷市	吉岡 修	八尾市	宮西 弥生
和歌山県	上地登美代	西宮市	山本 義子
神戸市	伊勢田 毅	唐津市	仁部 四郎

騒 ぐ

小寺 花峯選



責任を取らぬ外野の馬鹿騒ぎ
雑踏の中へ孤独を捨てに行く
初孫の咳の一ツに大騒ぎ
送別会騒ぎの外にいる主賓
年金ときけば俄かに動悸する
駅伝へ騒ぐすすまぬ雑煮著
帰省子が居間に残した騒ぐ声
騒音に慣れて都会の灯に沈む
騒がないで只今天使昼寝中
騒がしい子は振り向いて欲しいから
騒がれるうちは有名税だらう
岸につく花嫁に湧く過疎の島
天井でタツブダンスをするねずみ
子ら騒ぐ路地のむかしが見られない
仏壇のローソク倒れ騒ぐ朝
馬鹿騒ぎ命の洗濯出来ました
デイサービス今日も米寿の血が騒ぐ
七彩の嬌声が舞うネオン街
晩学へ右脳左脳が騒ぎだす
母危篤騒ぎ後の待つ望み
春先の目覚めに騒ぐ種袋
責任を取らぬ馬鹿騒ぎも困る

幸雀 セツ子 とし子 英旺 古拙 像恵 智加恵 寿美 柳弘 明子 銀波 かつ子 雅枝 一風 章久 典子 一さお 幹子 順風 妻知

マスコミが騒ぐと風が生臭い
村祭り騒いだあとの休耕田
古井戸を覗くと過去が騒ぎ出す
ヒロインと騒がれた日のプロマイド
年度末人事を雀騒ぎたて
騒いだら昨日の傷は癒えました
逆風へ熱い男の血が騒ぐ
がむしやに騒いで他人の傷をはる
騒ぐなよたかが牛井大盛りで
淋しい時少し騒いでいいですか
ケジメある騒ぎに夢が欠けてゆく
ざわついて悪のシナリオ崩れだす
背伸びしたピアノ騒音ばかり生む
騒がれたのは呱呱の声あげた時
騒がせた償い高い堀の中

佳

絹子 久仁雄 高明 輝夫 四郎 鐘造 愛論 霜石 扶美代 一粹 充子 岳水 志千代 久千代 慕情 登美代 政勝 北朗 菜摘 正和 活恵 富田美義

コ ント

宮尾みのり選



政治家がコントの種を撒き散らす
雑踏の中で拾って来たコント
この頃のコントに従いてゆけぬ老い
負けて勝つ妻のコントが暖かい
コントなら笑ってそれですませるが
年金のコント聞いても笑えない
待ち呆け今日のコントが出来上がる
ロボットの背にコントは通じない
お隣のコントが堀を越えてくる
約がらの二人が街でコントする
生き上手コントに化粧薄くする
上質なコントが消えたバラエティー
セピア色のコントに酔ったクラス会
主演妻脇役僕でやるコント
ここだけの話にコント添えてある
価値観の違いがコントに通じない
しなやかに生きてコントに蓋をする
最高のコントと思う五七五
華やかなコントを秘めている蕾
まだ死ぬぬす劇の落ち決らない
コントかも知れない犬のお葬式
カウンターの隅で正論吐くコント

章司 寿美 勝視 岳水 ミツ子 美義 美ず 洛醉 慕情 久仁雄 美智代 直 幸雀 柳弘 鐘造 伊津志 修 茂代 蜂朗 登美代 富子

謝罪さへ偽装だったというコント
妻の掌の上でコントをやられる
百円のお店コントも売っている
わんさかと雑木林にあるコント
告白をコントにされた恋だった
公園のハトの群れにもあるコント
不器用を武器にコントの笑いとなる
蟹の泡ぶつぷつコント吐いている
バージンロード父と娘のコントです
補聴器を外すとコント風になる
赤い靴春のコントに会いに行く
金婚へ書いては消してきたコント
窓際でまさかのコント演じてる
政治家と官僚終らないコント
いつか来るひとり支える日のコント

北 朗
政 勝
日出子
扶美代
志千代
明 子
時 雄
帆 雀
輝 夫
哲 男
あずま
菜 摘
孝 一
霜 石
弥 生

議事堂の牛歩たしかにコントだな
年金の財布の中にあるコント
一分前の事を忘れたのはコント
根回しの済んだ会議ですコント
飽食のコントが詰まるゴミ袋

高 明
(安) 泰 子
善 信
く に こ
充 子

デスマスク極の中でするコント

幹 子

一喝のあとのコントは父の愛

狹 沓

痛烈なコントを秘める偽の一字

玉置重人

吐くくる妻のコントが読みとれぬ

軸

卒 業

山 本 柳 昌 選



卒業で終った青い恋だった
卒業を待たずに億の契約金
さよならのフランクだけが揺れている
矢絣のむかしに還る女子大生
主婦卒業おひとりさまのいま花野
幾何代数卒業式の日捨てた
父母の愛卒業証書撫でて
中学を卒業ルージュ二つ三つ
夢抱いた卒業写真のつづらな眼
卒業をしたが息子は家に居る
卒業したらこの娘はきつと家を出る
卒業を祝われたけど職がない
水河期の卒業でしただだニート
卒業をしたので煙草やめする
お見合いの口上を聞く大学出
三狼を卒業したかよくしゃべる
卒業の無いキッチンを磨く母
断食で卒業したいメタボから
卒業という字は知らぬ芸の道
痛い目にあつて卒業した株価
少年期卒業したか声変り
人生の句読点打つ卒業日

強 一
さだき
(久) 千 代
古 拙
徑 子
茶 子
典 論
愛 論
倫 子
和 郎
日 枝 子
玄 也
あやめ
准 一
妻 子
美智代
高 明
としお
(矢) 五 月
週 行
寿 美
隆 盛

子供から卒業できぬ親の愛
卒業はしたはずなのに二日酔
ハイヒール卒業老いてスニーカー
入学式も卒業式も雨だった
留年といわずドイツに行くという
継ぎ手無くまだ鋤鋤の老農夫
卒業の日までバイトで忙しい
泣いたのは先生が好きだったから
議員国無駄を卒業して欲しい
主婦卒業嫁に譲った塩の壺
子離れという卒業でまた二人
生涯現役卒業のない火のいのち
奮ふくらんで卒業待つっている
卒業へ肩の荷下りた細い脛
卒業へ希望あふれている未来

シマ子
勝 規
昌 鼓
明 子
美津子
藤 朗
雅 枝
不 二
セツ子
(安) 泰 子
(福) 洋
弥 生
扶美代
重 人
朝 子

巣立つ子の姿めがねが曇りだす
卒業に杭一本を打つ恩師
たった一人の卒業生の胸にバラ
卒業は東大ですと青テント
これ脛よ卒業までは持つてくれ

慕 情
く に こ
叔 子
賢 子
修

脳みその奥に刻まれてる校歌

霜 石

螢の光とても素直に泣いた式

ばっは

白地図を渡す卒業おめでどう

播本充子

大空へ四肢を伸ばしていく蕾

軸

初歩教室

題一パン

三宅保州

過ぎたるはなお及ばざるが如し

当教室歴が何年も経られた方は、水煙抄や各地の結社等でも腕を上げられてお上手になられているのは、ご同慶の至りです。

ところが、柳歴を経て作句に慣れてくると、誤った方向に欲が出てくる方が散見されるきらいがあります。

それは「句を飾りすぎる」ということです。換言すれば、句を作りすぎるということ、当社主幹だった西尾葉氏も「上手になるにこしたことはないが、上手になることにこだわらずてはいけない」と名言を遺されています。

川柳六大家の一人川上三太郎氏も「技巧とは飾ることでない。むしろ飾ってはいけないことである」と申されています。

かの孔子も論語で「過ぎたるは猶及ばざるが如し」と喝破されています。

しっかりと地に足をつけて、徒に飾りすぎない中身の濃い句を心掛けたいものです。

【添削・批評句】

次の三句は、題が「パン」と分かり難い句です。題を詠み込まないと句想が広がる長所と題から離れることがある欠点があります。

正月はお家の雑煮主役です

實

ウインドウ並ぶ眼をひくつやのよき 美紗子

モーニング散歩のコース変えてゆく 俊子

次の四句は、食べるパンでないパンを使つた句です。厳密には「字結び可」等の注釈がない場合は、本来の意味を詠んだ句を作るべきなのです。異説もありますが基本に忠実に。

パンパンと柏手百の願い込め キヨミ

キッチンの手なべ平なべフライパン 佃節子

とんと焼パンパン燃えて元氣つく こずえ

温泉のパンフレットが溜まりすぎ わこ

原パン機械買ったが使用一度きり 稔

添ホームベーカー買ったがたまに使っただけ

原パン製造新製品のまま欠伸する 麗

次の五句は中六、中八、下六などです。中

七、下五を守る習慣を身につけましょう。

原コッペパン見れば昭和思い出し 紀雄

添コッペパン見れば昭和を思い出し

原朝食がパンになつて座卓消え りこ

添パン食になつて座卓も消えました

原奥さまがおいで目さめるトースター ヒロ

添パン焼ける匂いで妻が起きてくる

原飽食に乾パン取り合う夢を見る 義章

添乾パンでしのいだ飢えを忘れまじ

原行列もパンの為なら厭いません 和代

添行列もパンのためなら厭わない

原メロンパン老いも若きも夢も食べ 賢治

添いろいろ詠み込みすぎると焦点がぼけます。

原何となく夢ありそうなるメロンパン

原香り呼び財布がゆるむパン屋さん みち代

添パン屋と客の立場で詠み作者が居ない。

添パン屋さんの香りに財布ゆるみ勝ち

原パンと聞くだけで胃袋身構える 実千代

身構えるは、好きか嫌いかわかり難い。

原給食のパン想い出し懐かしむ 弘子

懐かしむでは平凡な感。

添給食のパンを残したランドセル

原コッペパンかじり働く過去もある 正二

過去形になつていません。

添コッペパンでよく働いた戦中派

原朝3時粉を練りだすパン屋さん 滋郎

説明調を避けミステリー仕立てなどに。

添丑三つに粉を練ってるパン屋さん

原命日だあんパン二つ仏壇へ 健柳

一二は不要。

添好きだったあんパンばかり仏壇へ

原忘れないスキムミルクとコッペパン

主役をパンに詠みたい。

夢

添 コツペパン忘れていない戦中派
 原 二日から又初めますパンコーヒー 道子
 添 三が日過ぎたらもとのパン食に
 原 お雑煮も飽いて二人でモーニング 美智代
 添 お雑煮も飽いてパン食恋しなり
 原 自家製の柚子ジャム乗せた今朝のパン 冷子
 添 自家製のジャムに食欲はずむパン
 原 手抜きしてパン食になれ朝寝する 洋子
 添 朝寝したときは手抜きのパンばかり
 原 スーパーの並いるパンが引き付ける 清
 添 スーパーの並みいるパンに目をとられ
 原 モーニング皿に載つて昨日のパン 弘泰
 添 モーニング昨日のパンが固すぎる
 原 パン食に熱いコーヒー夫の留守(吉)節子
 添 夫の留守パン食だけで済ませます
 原 菓子パンが好きで二人共メタボ 房江
 添 菓子パンが好きで二人でメタボです
 原 重い胃もパン食をして軽くする 孝明
 添 胃のもたれパン食にして軽くする
 原 老人ホーム意外と多い朝のパン 秋星
 添 お年寄りも意外と好きな朝のパン
 原 胸痛いワーキングブアパン一つ 瑛子
 添 ワーキングブアパン一切れに胸痛む
 原 使い道あるうに俺はパンの耳 孔一
 添 パンの耳も私も使い道がある
 原 パンを焼くひとりの朝のモーツアルト 光子

添 パンを焼くモーツアルトを聴きながら
 原 パン食が米の文化を追い遣つた 裕之
 添 パン食に米の文化が追い遣られ
 原 パン食がおしゃれで案山子浮かぬ顔 乃りこ
 添 パン食を横目に案山子浮かぬ顔
 原 嫁が来て朝はパン食目玉焼 勇治
 添 嫁が来てからはパン食モーニング
 【少し工夫すると佳くなる句】
 原 焼きたてのパンを狙つて行くランチわこ
 添 焼きたてのパンを目当てに行くランチ
 原 切れる子が増えたしたのはパンのせい としお
 添 パンの所為だろうか切れる子が増える
 原 アンパンを分けてウフフの茶のみ友 紀子
 添 茶飲み友だちとパン分け合いウフフ
 原 フランスパン私がつと似合わない 那珂子
 添 私にフランスパンは似合わない
 原 パン分ける相手なくてひとり住む 柁子
 添 パン分ける相手なくてひとり住む
 原 甘いパンふえて主食の座を降りる 大朔
 添 菓子パンが増えて主食の座を降りる
 原 仏さまたまにはパンもいでしょうイセ
 添 仏さまたまにはパンも如何です
 原 パンの耳齧った僕の青春譜 絹子
 添 パンの耳もご馳走だった青春譜
 原 朝っぱなからパン屋に並ぶ気も分かる 象山

添 評判のパン屋に並ぶ気も分かる
 原 パンの耳捏ねて今夜のハンバーク 律子
 添 パンの耳捏ねて今夜はハンバーク
 原 パンの耳ラスクに作りお意張り 和
 添 パンの耳ラスクにすると大威張り

【佳句】

牛乳とパンを買い溜め孫を待つ
 食パンの耳をグルメのネタにする 昇
 飽食を叱咤しているパンの耳
 ビンチにはとつても強いパンの耳
 パンの耳なければないで物足りぬ
 じゃら銭で買つてもでかいパン袋
 焼きたてを買つて翌日食べるパン
 パン食に馴れた朝餉のアメリカン
 案の定真つ黒こげの朝のパン
 トーストが嫉妬の色で焼きあがる
 寂しいと店に残つたパンが言う
 パン食をしないこだわり農の自負
 幸
 堅坊
 菜摘
 幹子
 智加恵
 亜希子
 千代子
 柳歩
 次根
 徑子
 昇
 起世子

【今月の推せん句】

あんパンが好きで男でお人好し 林さだき
 パン焼いたあとの余熱へ冬こもり 村木信子
 武士道が散つたきつかけパンだろう

三谷たん吉

【私の句】

今日食べるパンがない何万人よ
 (登載洩れの方は役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 太田 昭

— 2月号から

飲む真似をしながらとどめ刺しに来る

片山 忠

酒好きな男にとって、盃を持つ仕草での誘いは、止めを刺された思いでしょう。

針金の通りにならぬ松の意地

川端 一步

人間のエゴでしようか、自然や動物までも人間の好みに服従させようとする。今やその自然から反逆をされていることの恐ろしさを感じます。この句の「松」に見習い、人間らしい意地をみせたいものです。

糾弾の裏で巨悪がよく眠る

森田 明子

「悪い奴ほどよく眠る」の現代版と言える句ですが、巨悪である者ほど相手の糾弾は厳しく、糾弾をしている裏で大軒をかいている人間もいる。そんな世の中から生まれたこの句の味わいを感じます。

待ち合わせ赤いポストと待っている

川本 畔

約束の時間を過ぎたのに、未だ来ない友達を目印の赤いポストといつまでも待っている。今はポストも一人、自分も一人、童謡に似た切なさが伝わってきます。

ゆっくりと手紙の裏を読んでいる

永田 俊子

言い尽くせない自分の気持ちを、じっくりと読みとつてくれる、そんな誰かがいたら、と思うことしばしばです。この句の「手紙の裏を読んでいる」しかも「ゆっくりと」が利いた素晴らしい句だと思います。

正正堂堂と奥の手を使う

谷口 義

奥の手を秘訣だからと仕舞い込まず、正正堂堂と真正面から詠まれた、義さんらしい句の大きさに感服しました。

本を読む姿勢でいびきかいてはる

平嶋 美智子

誰もが思い当たる句であり、クスツと笑いたくなる句だと思います。下の句の「かいてはる」が、句の柔らかみを出してはるよううで楽しくなりました。

一方通行逆行したら偉くなる

井丸 昌紀

逆行した者が偉いのではなく、己は偉いと思ひ込んでいる人間が、逆行することで更に偉さを誇張する。正に川柳です。

青春を爆発させた満州よ

岡 本 久 峰

一旗揚げよう、男になろう。多くの日本の若者達が満州へと渡った。その時代の青春のはけ口だったのかも知れない。

不器用を自覚してから楽になり

村 上 玄 也

知識人と言われ、器用だと褒められるほど肩が凝り始め、自分の不器用さを自覚した時から肩の荷がおろる。まったく同感です。

少年になり切っているオムライス

矢 倉 五 月

苛められて帰ると、母がソーセージの入ったオムライスを作ってくれた想い出がある。オムライスが少年になり切っているところが、この句の面白味だと思います。

白菜を漬けて一応主婦の顔

木 下 敏 子

最近包丁を持ってない若い主婦が多いと言う。まして沢庵なんぞ主婦が漬けるもので無いと考へても、不思議でないかも知れないが、子供に刃物と針の持ち方くらい教えられる母になつて貰いたいものです。

うまい茶をすすり言葉のサビ落す

吉 村 一 風

お茶は色々な効用があるようで、掃除をする時にもお茶の葉を使う。従つて、言葉のサビも美味いお茶一杯で落ちることは願ける。

堂々と干し場に吊すEカップ

樋 口 輝 夫

まさしく堂々とした情景で愉快でたまらない。Eカップと言うからかなり豊かな方だと思ふが、この堂々さは、それほど若くは思えないから余計に面白い。

近道に生きるヒントは落ちてない

川 崎 ひかり

現代の若者は、結論を急ぐ。遠回りをしてもしつかりとした経験を身に付けようと思へる人は少ない。勞せずして生きるヒントなど得られるはずが無いと思うのだが。

遺憾とは謝罪の言葉じゃない

猪 川 由美子

意味を履き違えても、なお堂々と罷り通っている言葉はいくつもある。謝罪で遺憾に思ひますと言われても、何が残念で心残りなのか解らない。日本語の適当さなのか。

判を捺す時の女は迷わない

安 土 理 恵

男は度胸、女は愛嬌と言つがいがいざとなると、女性の方が度胸があるのかも知れない。離婚と決めてから、判を捺すことを躊躇するのは男の方が多いと言つから女性強い。

ひらかなの気分になれば許せます

大 内 朝 子

カタカナが几帳面派だとすると、ひらかなは大らかな派のような気がする。形にこだわった漢字の自分から、ひらかなの大らかな自分になった時、全てが許せるのかも知れない。

笑い苺食べて来たよな友がいる

小 島 笑 司

人が集まると決まってボケとツツコミが居るもので、そんな中に、周囲を独り占めするような笑いの主がいて雰囲気と和ませてくれる。笑司さんならではの楽しい句です。

笑い袋だけは大事にしておこう

小 林 妻 子

心身両面で、笑いの効用を書いた著書は多い。心の底から笑える事の少ない昨今、せめて笑い袋だけは大切にしたい。

—水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

政岡 日枝子

わたくしのために作っている料理

五反田 柊子

おかえりと自分で言つて灯をともし

安藤 なつこ

人生九十年時代といわれても、大方は女性が残され独りぐらしを余儀なくされている。前掲の二句は、明るく前向きに生きていく自分に向けての応援歌のように聞こえてくる。

玄関に私一人の菊花展

安達 厚

懸崖づくりだろうか、はたまた一本づくりの菊であろうか、人様と競うでもなく自分だけの菊花展を楽しむ心豊かな一日。訪れる人はきつと声をかけてくれるでしょう。

おおかたは無欲になつてカニ食べる

吉田 富美

カニツアー、料亭、我が家と何処であろうと、蟹を食べる時は急に無欲、無口になる。不思議な現象である。読む人がみな体験して

いる、頷かれる一句であろう。

付き添いはどちらだろうか老い二人

乾 春雄

大きな社会問題となつてゐる老老介護。どちらだろうかと詠んであるところに救われるものがある。でも他人事ではないですね。

年毎に手を抜いているお重詰め

神野 宇乃子

全く同感。他の一切の言葉を省略しますが、さらりとした表現で代弁して頂いて皆も納得でしょう。

妻何か言つてゐる微笑んでおこう

三浦 強一

何か言つてゐる言葉を受けとめて、キャッチボールのように返せばどういう事態になるか判つてゐる。ここは一先ず球は隠して、微笑んでおこう。いくさはしない方がいい。

散らかつてゐるから温いマイホーム

森下 一知

温かいマイホーム何よりではありませんか。暮らしやすいように散らかつてゐるので。

古稀を過ぎ五臓六腑がサボタージュ

野口 忠

共通の話題は膝のサボーター

高野 不二

年を重ねてこのような話題の中にどつぱりつかつてゐる。しかし、遊ぶことの話題にも事欠かない前向きの高齢者の中にある事も確かである。

一葉が英世に迷う熨斗袋

岡田 幸生

地区割りの募金を軽い財布から

花岡 順子

平凡な日常の中の一コマではあるが、川柳だからこそ五七五でここまで詠めたのでしょ。身過ぎ世過ぎも大変ですね。

三億の夢見る列に引き込まれ

二宮 栄子

毎回毎回夢をみては失望している家人を見て、その失望が怖くて私は列についた事が無い。夢追つて私も並ぶことにしよう。

母逝つて帰りの荷物軽いこと

増井 ヨシ枝

禁煙を考えながら吸う煙草

片山 かずお

二時間を潰した後悔するテレビ

荒巻 夢

うっかりと出た一言の大波紋

猪森 スミエ

前掲の句には、的確で軽妙、何かを私に語りかけ、そうだそうだと同調させられる。

春がくる度に

一番線ホーム

池 森 子

このころ、とんだばやしが面白い。

面白いとは一目の前が明るくなる感じを表わすのが原義で、楽しくて愉快だ、興味をそそる、興味深い、心をひかれる、いい展開を見せる。

私が川柳を愛し始めて二十九年目に入る。この間私をやさしく厳しく見守ってくれたこの街には国の重要文化財の寺内町がある。

大屋根瓦白壁格子造りの商家が並び、あてまげの道、駒つなぎの石や虫簾窓が大切に保存されている文明文化と芸術遺産を残すことに有名なところである。

また、明治のころ、明星派歌人として知られた石上露子は今もその生家を残し短歌を今日へと引き継いでいる大きな宝物。

にんげんのことばで折れている芒 冬一
昭和四十四年からの晩年をこの地で活躍された大家、定金冬二先生を忘れぬ。ちなみ

に去年第29回津山川柳大会で選者をさせていだき、その前日市内に建立された彼の句碑を森中恵美子先生をはじめ大勢の柳友と拝見させてもらったのは嬉しいことであつた。

冬二先生と初めて御一緒した新京都句会(主宰、北川純一郎氏)では、煮るの題で秀句入選を覚えていた。

それから都大路、京都番傘を歩いて……とても面白かつた。

あこのころからどれだけの歳月が経つたのだらう、自分の求める川柳の貌とかたちがはつきりと見えてきた。

私の川柳のコンセプトは 愛。
愛は無限で広く深く、どこまでも普遍で、そして儚いものであるから。

メジャーリーグが面白い

私は野茂英雄投手が好きである。日本でプレーをしているときはそれほどではなかったが26歳の寡黙な彼が大きな闘志を秘めて単身彼の地へのチャレンジャーとして渡つた、その人間としてのスケールの大きさに深く感動をもらったのだ。その後二番手、三番手でプレーする選手たちにはあまり興味は持たなかったがイチローの哲学としてのバットコントロールと発する言葉の重さには脱帽。

民族という煩惱の数珠つなぎ

昨年はまた松坂、中継ぎの岡島と新しい活躍があり目が離せなくなつた。

そんな彼等になぜ私はのめり込むのか考えた。要するに日本人が日本でプレーをするのとは彼等はおのづとちがうスタンスとモチベーションで向かい合う。だから全身全霊で対峙する一挙手一投足には気魄がこもる。また、日本民族という煩惱を背負つて踏ん張る渾身の力はオリンピックの決勝戦にも似て面白く楽しいものだ。

特にマウンドという崖つ淵に立つ投手は常に孤高の戦士。

今年もまた熱烈声援を送りながら彼等のそのエネルギーを戴こう。

落したところで棄土棄かんか

私も川柳という環状線の内回り、外回りを各停、快速電車で乗車下車をしながら自分磨きの始発で終駅のとんだばやし。

この地で川柳を始め実らせたまは実はこの地へ落下、芽吹きを促し育てることは私の役目、小学生から団塊の世代を巻き込んで富柳会とは別の講座とサークルが芽吹いた。市民広報川柳欄もいい展開を見せてきた。

春はもう隣で靴を履いている

蕪村の諧諷

井上桂作

蕪村の今に残っている句は、千四百句余りです。千句ぐらいの句を残した俳人は、他にも多く見られますが、特筆すべきは蕪村にはすばらしい佳句が多い。正岡子規以来蕪村の句については、単なる写生主義という定評づけられている書物が見られました。

しかし、近代の叙情詩や芸術しか知らない若い人達でも、容易に理解できるのが蕪村の句であると言われています。現在蕪村の秀句解説のたぐいは芭蕉の句と同じく巷に溢れています。私は蕪村の思うままの句を少しだけ挙げてみたいと思います。

春の海終日のたり〜哉

この句は一度覚えたら一生忘れることのない句です。蕪村四十七歳の時の作と推定されていますが、なぜか現代の俳人の間では「賛否両論」の句となっています。

会合で居合わせた虚子と共に子規は、「とにかく数の少ない句で珍しい句と思う」と答

えたが、後に出された『蕪村名句評釈』に「蕪村の句としては客観化されるものの、希薄な抽象的観念に終始し中略……機知―手柄―の方が目につく」と酷評しています。

これに対し賛成派の朔太郎は「音象的にすぐれている」と、「郷愁の詩人と謝蕪村」で書いています。草田男は、「どこかおどかで日本人共通の童心に通じた喜ばしさがあ」と述べています。

学問は尻からぬけるはたる哉

蕪村句集では「一書生の閑窓に書す」と前書きがあります。面白い句で俳句というよりも川柳です。勉強は食べ物か肛門から落下するようにたちまち忘れてしまふ。そのうえで「尻から光るはたる」との配合は少し変わっている。しかし、はたるは「堂雪の功」にかかわる語です。ワシの学問は読んでも読んでも尻からぬけてしまつて、さっぱり明るくならないよと蕪村は嘆いています。「学問は尻からぬける」のはだれしも経験するところです。鷹揚な蕪村の風姿を思い浮かべるような平和な句ではありませんか。

誰がためにひくき枕ぞはるのくれ

この句は蕪村六十五歳の時の句と推定されています。若い遊女の部屋を訪れて冗談を言いつけている句でしょうか。艶な春の昨夜の有り様、そこには男性用の低い枕が置いてあ

る。この枕には誰が寝るのであろうかと、のんきなことを言っています。誰がための低き枕ぞの「ぞ」という強い切れ字がこの句の調べでしょう。強い主観の入った人間句でむしろ川柳です。

蚊帳の内はたる放してア、楽や

蚊帳に放した蛭を大の字に寝て眺めていると、身は野外にいるように涼しく「ア、楽ちん」と思わずつぶやいたと言っています。この句の生命は下五の自然な嘆息「ア、楽や」にあります。こんなに放埒な境地に晩年の蕪村は到達していたのです。

西行の欲のはじめやねはん像

芭蕉が憧れたのは西行法師でしたが、蕪村はそうでもなかったようです。蕪村の性格からして桜の花の下で、死にたいなどとはわざとらしい、とても思つたのでしょうか。

西行の有名な「ねがわくば花の下にて」の和歌から、涅槃の日に死にたいなどという欲を持ったのは、涅槃像をみてからと言うのです。これは天明三（一七八三）年に詠まれた句で、句集によれば蕪村最後の句になっておりま

す。この年の九月家族一門を連れて宇治に松茸狩りを楽しみ、帰ってから病臥。十二月十五日未明に亡くなっています。

■句集紹介

新家完司川柳集(五)

『平成二十年』

新家 完司著

三宅 保州

完司ファンが心待ちにしていた川柳句集「平成二十年」が上梓された。「平成元年」から五年ごとに出されて、今回が五冊目の刊行である。句集をつくるのは物心両面において大変なことなのに、それを五回も続けられた完司さんには感嘆と敬服のほかはない。

それに加えて、句集のかたちが実にシンプルで無駄がない。失礼だが、豪華な美装丁でなく押しつけがましくない。大家の序文、推薦文や本人のあとがきすらない。まさに、一切の飾り気を削ぎ落とした「句で勝負」という気概がひしひしと伝わってくる。それでいて、巻末に五回分の登載全句の索引を載せるという、読者への配慮がされているのは心憎いばかりである。

完司さんの川柳観を知るには、平成十二年

十一月号当誌の「私の川柳」欄に「私の悪汁」と題して書かれているのを推す。要約すると「私の川柳は実感句、具象句であり、入選のための句を作っても時間とエネルギーの浪費である。私の川柳は悪汁そのもの。教訓臭い句。きれいいごとの句は興味がない。悪戦苦闘した人間から流れ出る悪汁こそ「にんげん」そのものの「川柳」そのものではないか。」と喝破されている。まさに、完司さんの川柳観と人格そのものであり、このことを念頭に置いて玉句と対峙するとより感銘させられる。

怒ってはいませんいつもこんな顔

ぼくに似てシャイで無口な爬虫類

完司さんの風貌に、私は野武士を彷彿させられるが、ご本人は平家蟹と言われているとか。また、シャイで無口と仰るが、それは「男は黙って勝負する」ということで、いざというときの披露、柳話等の話術、川柳論、批評・添削等の文章力などが卓越した川柳観と相俟って、第一級の川柳家と言われ引く手数多の大活躍をされている所以だと思ふ。さらに、酒、歌、麻雀等を愛してやまぬと来れば、硬軟兼ね備えた逸材で、完司ファンが多いこともむべなるかなである。

掲載句を大きく貰っているのは、私は「死生観」と「生きざま」だと思ふ。

まず、死生観と考える句から抜粋すると観覧車ひとまわりしてまだこの世美しいこの世で金を追っている好きな人が暮らしてそして死んだ街自転車に乗ってこの世を視察するこの世という袋あこの世という袋明日死ぬと思っていない人ばかり死んだ蟹死にそうな蟹並んでいる長生きをしてあの世の母を喜ばす死生観を詠んではいるが、悲壮感よりもむしろこの世を楽しんで詠まれている。

次に、生きざまを詠まれた句からの抜粋。

ひっそりと住むのに手頃ほくの町
胸張っておればわからぬ貧富の差
集まった鼻を眺めて暇つぶし
気分良く腹減ってゆく日曜日
もう少し金が欲しくて休めない
腕二本抱き合うように出来ている
新しい私に誰も気付かない

お酒を詠んだ句も是非掲出したい。

ぶっちゃけて言えば主食は芋焼酎
いい酒を飲みなさいよと陽が沈む
立ち姿一升瓶になってきた

句集送付の添え書きに、「平成二十五年」の上梓を約束されているのは、誠に心強く今から待ち遠しい限りである。

■各地句会だより

京都塔の会

都 倉 求 芽

京番の牙城、京都柳界へ小さいながらも楔を打ち込んだのは昭和四十七年二月、松川杜的さんが二度目の職を勤められることになって、「どこも句会へ行けなく淋しい。うちの二階で」と始められたのがきっかけです。冒頭、大層な文言で入りましたが、事実当時は京都では番傘の全盛時代、番傘一色。

その初回には職場時代のお馴染み、水客、潮花、萬的、紫香の方々それに近くの柳友など駆けつけてくださって、いよいよ川柳塔京都支部「京都塔の会」が発足。

しかし、しばらくはお遊びムード。

ところが市内の脱流派のベテランたちが次第に顔を出されるようになり、少しは本式に近づくのセツルメントへ会場を移しました。その頃から近隣句会の柳友や先輩たちも出席されやつと軌道にのりかけた頃、その会場が老朽化のため取り壊し、西院のラポールに、しかしそこも場所的に高齢の先輩たちにはと

再度変更、現在のハートピアに落ち着きました。ここは地下鉄駅直結で大変便利。会場は変わっても杜的さんの方針で流派は問わず、家庭的ムードで楽しい句会として現在に至っています。

長い間には長老や新聞柳壇の選者経験者などもずつと支援していただき一時は活気もあ



ったのですが、如何せん皆さんご高齢で、相次いで亡くなられた次第に先細りの格好になりだした頃、元氣な女性軍がわつと入会してくださり一気に平均年齢もさがり、華やいだ句会になりました。ただ残念なのは男性軍が在職のため月例会には出席が無理。その点少々淋しい句会が続きます。

が、なんと言っても塔の会は春秋の吟行句会が名物。毎回三千名前後の楽しい句会になります。最初は軽い気持ちではじめた吟行ですが毎回ご好評をいただき昨年十一月の車折は五十八回目を数えます。

そして私どもの会は会員数こそ少ないが過去、路郎賞を二回いただいています。

昭和六十二年は松川杜的さん。

この夫に草書のかすがちと欲しい
平成十年は山海友照さん。

大文字 亡夫が好きな位置にいる

昨年五月、三十五周年記念句会を催しました。それには番傘同人も多数出席、ようやく当初の「楔」を感じることができました。これ偏に本社のお力添えの賜物と深く感謝している次第です。

これからも初代会長の遺志を継いで和やかな楽しい句会をと念じております。

尾浜川柳会・吟行

紅葉狩りと温泉

(平成19年11月27日)

加川 靖 鬼

秋も深まった11月の末、好天氣に恵まれて「尾浜川柳会・吟行」の一行総数23名が、わざわざに阪急電車・池田駅に集合しました。

遠方の方は姫路、三田方面からまた大阪・西宮・伊丹・尼崎と各方面からもご参加いただき、貸し切りバスで一路、猪名川の支流「伏尾の里」にある「久安寺」と鮎茶屋・温泉「不死王閣」に向かいました。

「関西花の寺」として有名な「久安寺」は、室町時代の建築と言われる重要文化財の風格がある「楼門」がありその門を潜ると、苔むした石垣に見事な紅葉が映えています。

手入れの行き届いた庭園には池と鯉そして鬱蒼とした森、梅田からわずか30分ほどでまさに別天地の趣きがあり、真っ赤に燃える紅葉と、黄色い葉が入り交じった見事な色彩は、観る人の心も明るく染め、癒されました。

古刹の静寂な雰囲気味わいながら、鐘堂の鐘を撞いたり池を巡ったり、庭園の散策を

満喫した一行は、バスで五分ほどの近くにあり鮎茶屋・温泉「不死王閣」に到着しました。各自、温泉や露天風呂でゆつくりとくつろぎ、会席料理を楽しみながら懇親宴／句会でそれぞれの想いの名句をひねり、柳談を交わして親交を深めました。

小さな滝が見える風情のある露天風呂に浸りながら、ふと某先生の「温泉や座り羅漢に寝る羅漢」の句が頭を過ぎりました。



液体空気

阿 萬 萬 的

水蒸気が冷えると水になるように、空気だつて零下一九〇度以下に冷して圧力を加えると液体になる。これが液体空気で、今日の文明に大変重要な役目を果たしている。

液体空気を器の中に入れておくと、どんな蒸発するのだが、そのとき沸点の低い窒素だけが先に蒸発してあとに液体酸素が残るのである。即ち液体窒素の沸点は零下一九六度で液体酸素の方は零下一八三度だからである。そして窒素からはアンモニアの製造や石灰窒素と言う肥料もつくられている。また最近の大型変圧器にも窒素が封入されて絶縁油の酸化防止に一役買っている面もある。

一方酸素の方は溶接用や、製鉄所の炉に用いられたり、ジェット機のバイロットや潜水艦内の呼吸用にも持ちこまれている。勿論、重症患者の酸素吸入にも一役買っている訳である。

冷えきつて戻つて別の道に生き 萬的
「科学のたわごと」より



追悼 岡井やすお氏

平成十九年十二月四日 没

95歳の天寿を全うされた岡井やすお氏は、昭和57年に出版された句集『古稀』のあとがきにこう書いておられます。

「川柳と私との出会いは、退職後のつれづれに、昭和55年5月、朝日新聞に「朝日なわ柳壇」が出来るのを知り、面白半分に投句したことに始まる。

同年8月「こんな字を書いていたのか古日記」が初入選、私にも川柳が出来ると自惚れが出て、同10月朝日カルチャーセンターに「川柳入門講座」が開設されたのを機に、早速申し込んだ。――

3人の娘さんがいらつしやる氏は、その後関西をはなれて、三女の住む千葉県佐倉市に移り住まれましたが、川柳塔同人欄、川柳塔のぞみ等へは投句で参加、亡くなる数ヶ月前まで続けられました。ご冥福心よりお祈り申し上げます。

(編集部)

遺 句 抄

三代を生き抜き今日の古稀の春
盛塩へ徐々に雨水浸みていく
ポーナスは慈善鍋にもちよつと入れ
身勝手は後日お返し致します
後ろから見ればお年は隠せない
砂煙りの中からホームインの顔
葉より孫の電話が利くらしい
頬かむりして板ばさみ通り抜け
良い師あり良い友と良いお正月
おふくろの店で落ち合う国訛り
飛び付いてから考える日本人
総論は即決各論には時間
振り上げた拳開けば握手出来
学校が休め休めで太る塾
おいしさの二分の一は器から
傘寿など威張っておれぬ茶寿がいる
月とも見もののでなし行くところ
努力とは別に照る人曇る人

しんがりはうしろをむかずともよろし
僣はれる人になろうと今日も生き
税理士が辣腕発揮する二月
風持って上昇気流待っている
白内障手術成功実青し
自主的に学べ学校週五日
移り住みどこへ行くにも地図に聞き
祝日に日の丸揚げず式もせず
卒寿過ぎきこどもニュースを見て学ぶ
大相撲モンゴル合宿なんてどう
大病をして段々と毒氣抜け
三月は祝儀袋がよく売れる
メイドインジャパン選つて愛国者
暑い暑い言うても日本知れたもの
衆議院のかたきは参議院で討ち
改革をやるにも自ずから順序
談合へ縦に一本強い糸
脱地球されど命の保証なし
暴力と愛の鞭とは裏表
国語さへ碌につかえぬのに英語
三月は別れの月だ泣き笑い
まだ迷う何なすべきや九十四
初心胸に哲学の道独りゆく
日曜は家族団満花の下
長生きもほどほどがよし税の枷
趣味ですと言ってる内はまだ青い
地球には盗塁という技がある

田中重忠川柳集「ササユリ2」発刊
大山滝句座会報100号 記念川柳大会

日 時：平成20年5月25日(日曜日)
投句締切り 午後1時
会 場：浦安駅横 [まなびタウンとうはく] 4F
会 費：2,000円(欠席投句拝辞) 各題 2句
席 題：「 」 石橋 芳山 選
兼 題：「 砂 」 小谷美ッ千 選
「 線 」 牧野 芳光 選
「 魚 」 山下 蟹郎 選
「 半 分 」 長谷川博子 選
「 太 郎 」 但見石花菜 選
「 欲 」 土橋 螢 選
「 悪 」 天根 夢草 選
主 催：大山滝句座
連絡先：鳥取県東伯郡琴浦町徳万597
新家 完司
TEL(0858) 52-2414
FAX(0858) 52-2449

2008 ふあうすと川柳大会
平成19年 年間賞発表

日 時 4月13日(日) 午前11時開場
会 場 兵庫県民会館9Fホール
TEL 078-321-2131
アトラクション
落語 桂 福丸さん(桂福団治門下)
宿 題 締切12時(各題2句) 欠席投句拝辞
「登る」ふあうすと 高塚 英雄 選
「祭り」ふあうすと 佐々木義雄 選
「文」ふあうすと 山下 扶美 選
「スケッチ」川柳塔社 西出 楓楽 選
「東ねる」番傘本社 森中恵美子 選
「なごやか」時の川柳社 矢沢 和女 選
「雑詠」ふあうすと 村上 氷筆謝選
席 題 なし
会 費 2,000円 (記念品・発表誌呈)
懇親会 大会終了後同会館 10F 5000円
主 催 ふあうすと川柳社
後 援 兵庫県・神戸市・全日本川柳協会他

大 阪 川 柳 の 会

日 時 4月2日(水) 17時開場・18時締切
会 場 北区梅田駅前第2ビル5階・第2研修室
宿 題 △父・濱邊稻佐嶽△鐘・天根夢草△はらはら・
奥田みつ子△ローン・磯野いさむ 各題2句
会 費 千円 欠席投句4月1日まで(会員のみのみ)
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706
本 田 智彦宛

「各地句会だより」掲載について
川柳塔社の小集句会の紹介・アピール・会の様子などお書き下さい。会員の集合写真を添えて下さい。順次掲載させていただきます。
行数：たて20字×54行(1080字)

随時原稿募集しています
○エッセー——本文たて20字×70行(1400字)
○ひとこと——本文たて15字×20行(300字)
エッセーは同人に限り、ひとことはどなたでも応募できます。ただし、原稿の採否、掲載号については編集部一任とさせていただきます。

本社二月句会

二月七日(木) 午後一時
アウイーナ大坂

朝から時々ちつく雨は雪かと思わせるほどの寒さ。二月の本社句会は百三名の参加で定刻どおり開催された。

はじめに昨年12月4日逝去された同人、千葉県の岡井やすお氏へ一分間の黙祷。

今月のお話には常任理事の長浜美穂さんと古く交流のあるキリスト教、カトリック教会の修道女で園田百合学院の理事長、鈴木百合子シスターを迎える。

教職を退任された今も、御自身がたずさわってきた、幼、小、中、高校生を通じ、若者の今を危惧され、彼等がつぎつぎ引き起こす怖いニュースは、私達大人への問題提起なのであるとはつきりと言ひ切る。30分が短かすぎるほどの熱弁であった。

(扶美代記)

初出席は、池田市 上山堅坊氏

大阪市 田中幸代さん

月間賞は羽曳野市の吉川寿美さんに輝く。
(司会―美穂・昭) (脇取り―扶美代・千代・月子)

(受付―桃花・啓子) (清記―直樹)

席題「くじ」 川端 一步選

相棒と出合えたことが当たりくじ (A) 千代

この俺を引いた女房にただ感謝 淳司

くじ運が悪く当番よく当たる 准一

当たるまでお買いなさいとくじ売場 美代子

宝くじあまり買わないお金持ち 啓子

二次会の支払い当たる貧乏くじ 章久

戦争というくじだけは引くなかれ 保州

神棚にある間は有精卵のくじ 哲男

おみくじの凶にはめげぬ福笑い 朝子

一筆でさだめを分けるあみだくじ 富美子

生きるやと空くじなどはないように 保州

くじ引いて当たったことがないので 勝弘

スーパのサービス今日はくじがある 太一郎

結び籤梅がどうぞと呼んでゐる 孝一

年金にも予算とつてる宝くじ 一風

おみくじは大吉足も軽くなる 葉子

天神さんの梅にむすんだ初みくじ 理恵

くじ運じゃないぞ実力勝ち進む 矢五月

幸せなあんた私を引きあてて 志千代

外れ籤の夫にしてはでかい面 則彦

くじ運の弱い女が生む三つ子 啓子

写経して極楽行きのくじ当てる 篤子

おみくじの吉へ今年を賭けてみる 楓楽

心臓に悪いとくじをやめている 公誠

極楽へ行くのもくじ引きだそうなら いさお

くじ売場からうふと春の笑い声 希久子

嫌な役鈴つけるくじ引いちまう

迂闊にも告白をする当たりくじ

酒好きで女も好きでくじも買ひ

九字の呪を唱えて石に蹴躓く

くじ運は悪いがくじし向きは吉

再生紙おみくじに化けあがめられ

住

くじ運がよくてはつくり逝きはった

酒が出てくじで運転手にされる

遊ぼうよ所詮人生あみだくじ

おみくじは凶で明日に賭けてみる

一等のくじ当たるまで呆けません

人

あら嬉し親の介護のくじをひき

地

空くじは無いですいずれ召されます

天

神の創るこの芸術の当たりくじ

軸

当落を決める抽籤胃に悪い

兼題「だらだら」 森村 美花選

定年後だらだらさせぬ妻の喝

だらだらと今日も元気に流される

あの道は鬼門逢えばだらだら立ち話

だらだらと休暇のしむ日向はこ

だらだらと夜中になった昼の酒

だらだらと見せて秘策を練っている

一風

雅文

公誠

幸雀

月子

時雄

真理子

時雄

理恵

光久

日の出

加お里

修

雅文

房枝

螢

柳伸

美穂

時雄

楓楽

希久子

公誠

いさお

希久子

公誠

楓楽

希久子

赤ちゃんはよだれでさえも喜ばれ
だらだらと重たい愛を背負う坂
アリバイを崩され汗が流れ出す
だらだらと父の晩酌酒一合
四十年別れもせずに続いている

だらだらと飲めば寂しくなるお酒
だらだらに性根入れると亡父の檄
だらだらと過ごして顔の凝りをとる
切るにきれずだらだら続く年賀状

だらだらと風邪が同居の一ヶ月
だらだらと延命措置は断固拒否
ご祝辞がお色直しのあいだじゅう
電源を切ってだらだらしています
前置きは長いが要は金貸して

だらだらは見せぬマネキン目がきれい
だらだらとしての逃げ足は速い
断ると具合悪いと腐れ縁
親頼り家でだらだらニートの子

神様もだらだらを許している
だらだらと結論言わぬ名答弁
だらだら坂登り詰めたら共白髪

だらだらと流れる汗に鍛えられ
終生のだらだら坂の今は何処
だらだらを叱つてくた鶴彬

だらだらと言ひ分け補聴器外しとこ
だらだらと暮しお鍋を焦がしてる

淋しくてだらだらと食べている

佳

章子 森子 幸雀 章久 勝弘 和夫 みつ子 真理子 麗修 直樹 耕治 東吉 雅文 集一 公誠 日の出 弘風 淳司 深雪 宏子 ダン吉 里江 千代 紀乃

だらだらとして養っている英気
卒寿すぎだらだらとしていいのです
だらだらと呑んできつちり請求書
馴れ合いのだらだら終りにしませんか

人

着服れてだらだら生きていませんか

地

汗だらだら必死で探す明日の道

天

だらだら未練をさらう春の風

軸

気合い入れだらだら虫追い払う

兼題「情」

吉岡

修選

美しい国でドライで情のなさ
個人情報守られすぎて過敏症
情のあるお人と言われ断れず
清貧に生きて満足する情け

愛情が何より欠かせない介護
情景を浮かべてめくる時刻表
愛情の歌は一曲抱いている

ロボットもその内情け持てるかも
人情の分かった頃に去る任地
情報網の地球の首締める

思いやり予算に情け掛け過ぎた
数数の情けをもらい生かされて
情けなや千度迷ってこんな人

啓子 ルイ子 とし子 理恵 保州 みつ子 朝子 房枝 房枝 雅明 螢 保州 遠野 孝一 紀乃 玄也 公誠 一歩 千枝子 とし子

薄味にしみじみ妻の深情け
人の口情報漏れは防げない
品格も情操も欠け毒や偽
薬より人の情けがよく効いた

泣くぞ泣くぞと非情に迫るカメラアイ
ぬかるみに小さな人情落ちていた

火の情け水の情けにあるいのち
情に脆い男の脛の傷だらけ

愛情も人情もない北の国

人情が消えた西部劇も消えた
改革と情け無用に弱者切り

聞き流すことも情けと知る齡
強情な人とはガンも畏まる

道草のぶんだけ僕に情がある
ひとを恋うまだ情熱はさめやらぬ

情けかな頭数かな誘われる
他人には情け深いと妻が言う

情けなど無用だ金が絡んでる
四捨五入しても情けは割り切れず

佳

本当の情があるから鬼の顔
友情の線引きをして逢うている
薄情と言われようとカネは別
やつと笑えた情のこもった三分粥

お情けに一杯だけは注いでくれ

人

行きついて妻は他人と知りました

地

押す人の情けで動く車椅子

郁夫

幸雀 富美子 直樹 鐘造 理恵 篤子 雅文 富子 五月 義 靖博 富美子 則彦 扶美代 朝子 恵子 哲男 三喜夫 れんげ 尚士 理恵 幸雀 一風 朋月 千代 郁夫

天
ちとにがい漢方薬に似た情け
正雄

軸
深情け一つ二つと剥いでゆく

兼題「迷う」 居谷 真理子選

本籍を問われて迷う再生紙
直球を打つと決めたら迷わない
さあどうぞ素直な球に迷つて
迷わずに今なら小さい方をとる
ちよつと迷い冷凍ギョーザ食べてます
やさしさに触れて迷路を抜け出せぬ
極楽へ行きたいために迷つて
上下座しますかそれとも辞表出しますか
迷つて妻を怒鳴つたことがある (志) 千代
迷彩服着て欺いたのはわたし
迷いながら少しずつ距離縮めてる
お財布が僕の迷いをあざ笑う
長生きは善か悪かと思案中
仏典も聖書も答えられぬんだ
石橋の手前で迷い深くなる
この指に止まって迷い捨てなさい
イケメンもいいがセレブも捨て難い
スキップで抜けよう春の迷い道
採決のお手手途中でおじぎする
迷わない昭和生れの古時計
河豚ぐつぐつ迷うことなど何もない
笹竹に問うて迷いが深うなり

幸雀 啓子 孝一 富子 美龍 東吉 保州 葉子 修 深雪 直樹 好 洋 集一 いさお 希久子 時雄 孝一 和夫 寿美

電話ほど迷つていない顔が来る
もう迷うまいどうせ手ぶらで逝くのです
迷うからこぼれてしまふ福の神
叱らずに迷い叱つて迷うママ
おろおろと生きて格差に迷い込む
簡単にオーケーされて迷いだす
迷うほど服は持たない身の軽さ
ピリオドの判で迷いを抜けました
逃げようか迷いながらも蟻の列
地図を手に同じ所を回つて
佳
再会へ着てゆく服が決まらない
貧に座しころの迷う日が続く
二人して辿る迷路の新鮮さ
スポットを当てられ迷いからさめる
迷つてうちへ寄り目になつてきた
人
迷わない女で可愛さに欠ける
地
堂々の嘘が真面目を迷わせる
天
一本道間の深さに帰ろかな
軸
迷子ではなかつた君の胸にいた
兼題「クイズ」 宮西 弥生選
恋というクイズに女ひっかけ
三択にもつともらしい落とし穴
正雄 深雪 妙 見清 尚士 時雄 雅文 理恵 郁夫 三喜夫 いさお 公誠 和夫 瑠美子 義 扶美代 美義 とし子 螢 雅明

タイムショックあと一問の厚い壁
クイズ解くように生きたら楽しから
人生はクイズ答えはまだ出ない
満月になった正解に近づいた
あと一字寝かしてくれぬクロスワード
クイズからヒントをもらう死生観
地獄極楽解答のないクイズ
クイズから学ぶキレイな日本語
人生はクイズ解くよりむづかしい
クイズにも答える知識学はねば
クイズには強くて常識に欠ける
長らえてこの世のクイズ続いてる
本音ひとつクイズの中に忍ばせる
ちよつとしたクイズで相手試して
正解の前にCMするクイズ
賞金を貰つたことが無いクイズ
ただ単に知識切り売りするクイズ
難問はどう生きるかというクイズ
あとひとつ解けぬクイズが眠らせぬ
クイズに応募個人情報もれている
雑学の実力発揮するクイズ
とんちかんや答が受けるヘキサゴン
おぼろはクイズもギャグにして逃げる
野暮天で女心が判らない
三歳児のナンデには振り回される
雑学な人とクイズはしたくない
お答はさよならだったラブクイズ
ミリオネア後一問で一千万
賢子 修 麗 義子 尚士 見清 賢子 集一 恵子 (奥) 五月 保州 東吉 朋月 啓子 光久 能子 扶美代 美智子 一歩 なきさ 朋月 森子 正雄 希久子 理恵 代 (久) いさお

難解のクイズのような女です
生きるとはああ正解の無いクイズ
イエスかノー恋もクイズも度胸です
朝子 美代子 修

佳
プロボーズそこから始まっていたクイズ
にんげんが生きていることがクイズです
生きるとはきつと答のないクイズ
公誠 理恵 忠
みつ子 鍾造

大阪のうーまいもんは何だろう
勝弘

人
人生はクイズ答は霧の中
直樹

地
飯の世のクイズが終の日に解ける
希久子

天
父母の言葉はタテとヨコの鍵
耕治

軸
八曲りはクイズ通りに解けぬ道
天笑選

兼題「留守」 河内 天笑選

饅舌がコチコチになる留守電話
恭昌

留守電に他人行儀な子の敬語
桃花

留守電に一寸構えた母の声
寿美

留守電にしどろもどろの文語体
光久

頭脳流出につぼんが空になる
幸雀

携帯にハンドルの手が留守になる
堅坊

儲けだけに走り安全留守になる
理恵

家中の電氣をつけて一人寝る
正雄

夫留守昼カップ麺夜出前
正雄

放電も充電もして妻の留守
卵かけ御飯がうまい妻の留守
頼まれた留守にお酒が付いていた
志千代 鍾造
いい天気電話かければみんな留守

妻の旅僕も都合で留守にする
留守電にはなしするのは好きでない
准一 美代子
留守番は頼めぬ人とよく分かり

とっておきのビデオ見れるぞ妻は留守
留守電に任せて昼の喫茶店
深雪 義
物売りに留守番ですと妻の知恵

冷蔵庫見て留守番を引き受ける
留守の間のポストにメモが入ってた
一歩 加お里
風邪ひいて居留守してますすみません

他人には夫の留守を話さない
留守かなあいつも明かりが消えている
三喜夫 啓子
うっかりとチャイムに返事した居留守

奥さんの留守に女の声がする
飼犬に空調入れて留守頼む
集一 美代子
フアックスが父の書斎へしのび込む

テレビ三昧昼寝三昧鬼の留守
神様の留守に逢いたい人がいる
郁夫 扶美代
コンビニに宿六預けちよつとバリ

ちよつと留守しますと隣ヨロツパ
恋は留守ちよつと淋しい春ころ
楓楽 正雄
佳

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

後期高齢者は留守番がこわい
夫留守チヨイワル妻になろうかな
遠野 理恵
要件は言わず留守電すぐ切られ

理解あるご主人様が帰り待つ
のびのびの筈がオロオロ妻の留守
耕治 満子

送り出し呑んで寝てたら帰ってた
奥さんの居てはる時にまた来ます
五月 五月

地
その一瞬神も仏も留守だった
吉川 寿美
天

軸
目ばしい物ないが留守番しています
軸

きしせん句報500号発刊記念 特別句会

日時 3月15日(土) 締切 11時30分
会場 いややかな郷
集合岸和田駅東側10時

会費 4000円 要申込3月5日
井伊東吉まで

兼題(各3句)

栄 養 沖 泰弘選
覆 う 土橋 房枝選
格 段 板尾 岳人選
キャベツ 不破 仁緑選
宴会終了後、入浴散策
帰りバス16時予定



毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

南大阪川柳会

吉川寿美報

自分でも無理だとわかる男前
二十五時あればと思う木偶のペン
溜めた無理柚子湯でほぐす大晦日
無理だとはわかって受けるお人好し
なめるなら年季の技で肩たたく
なめて見て年季がわかる趣味嗜
甘くみた孫にバソコン教えられ
土なめてもう来年の菊づくり
なめちゃだめまだ暗算ができる祖母
なめられぬように気合で生きている
地下足袋が仕事の意地を踏みしめる
コップ酒今日の仕事をほめてくれ
土に生き土の言葉がわかる父
汗をする仕事にライト当らない
主婦の仕事こせこせ終らないままに
下請けがあくせくして年暮れ
あくせくの汗の年金消えたまま
あくせくが身に沁みこんで落ち着かず

勝弘 松久 東吉 福世 萬的 弘子 一步 集一 郁夫 太郎 寿美 楓楽 ルイ子 憲太郎 弘風 滋郎

あくせくと働く父を見て育ち
あくせくとするのが性に合っている
あくせくの野心鎮めるしまい風呂
働いて働いてまだ列にいる

たもつ 更紗 柳伸

賞味期限疑いそつとなめてみる
妻が待つそつと戸が開く朝帰り
カラオケを止めてシヨパンをそつと聞く
そつとして横でみている深い愛
病名にふれず静かに辞す見舞
耳たぶにそつと息吹きかけた君
目くばせでそつと抜け出た若かった
エンドレス追われる家事は無給です

(吉)修 昌紀 弘泰 忠昭 栄子 柳弘 直子

松露川柳会

小西 雄々報

目的のある日の朝は目ざめよい
計画へ過こす一日みじかすぎ
活性化脳に求めて英会話
目的を持つて希望の花も咲く
まず二キロ目のきめてダイエツト
目的へチャンスうかがい果された
改革を目的としてまた格差
手探りでねじれ国会こぜり合い
呆けぬよう試行錯誤で詩を詠む
月回るかぐやに未知の世界みる
目的は大吉なのに縁がない
目標は北京五輪で金メダル
横綱のモラルへ自覚欲しかった

雅子 敦子 昌子 美明 美枝子 静江 弘子 智恵子 和代 久子 鈴枝 公美枝 豊枝

目的は勝つことばかり考える
ライバルに目的はたし花贈る

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

飲み込みの早い子供にある期待
嘘いくつ飲み込んだらう妻の海
言い分を飲んできれいな輪を保つ
妻は留守ボク淋しいと思わない
お隣の秘密を引いて来たネズミ
血税の行く方ベールに包まれて
好奇心あるが淋しい車椅子
少年が怖い秘密を抱えている
すぐ昔広げて父の淋しがり

朝子 美弥子 和子 シマ子 克己 賢子 雅文 太郎

三指をついて生涯踊らせる
ラストダンス二人が消える霧の街
美女揃うライندگانに口を開け
鹿鳴館華麗なダンス蝶になる
城守の大樹歴史を語りだす
あすなるの樹木に未来図託そうか
コンパクト寂しく覗くひとり者

八郎 穂夫 ばつは 太朗 敏子 秀夫 湖風 愛論

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

白紙に墨で点を打ったのが初め
公私混同次官の真似はしたくない
それからが重い言葉と知った本
国防費ゴルフ代まで遣われる
ガソリン高響かぬように歩いてる

肋骨 柳童 契子 長一 桂子

信雄 雄々

おばちゃんの話は長いそれからが親の愛背負わされてる最初の子交響曲シンバル鳴って目を覚す喜びのそれから後にくる不安移り箸ゴマメ数の子栗きんとんししおどしさんと響いてからしじまハチ公はベットではない外育ち記憶では妻でなかった初キッスそれからと思えど身体動かない犯人も最初はあどけない赤子松籟の響きに惚ぶ吉野朝一バレルなんぼで左右されて生き

高知川柳社

川竹 松風報

人情をあてにはすまい野良の意地人情は口より母の背で教え人情の輪で支え合うボランテア人情に触れてこころの錆も取れ人情が絡む身置負してしまふふる里で人の情けに触れてくるお四国を廻り人情教えられドン底で心に染みた人の情人情に惚れて貴様と俺の仲現世の砂漠情けに救われる説教より母の涙が身にこたえ身にしみた亡母の説教無駄はなし説教をすればするほどそっぽ向く

見清 雪子 宇乃子 美智代 春代 久子 信男 幹治 禮子 黒兎 祥風 勝

説教を馬耳東風の現代子蹴とばした石に説教されました説教をする先生の白い髪説教より態度で示す母だった

川柳塔のぞみ

播本 充子報

会いたくて返信切手添えて出す添え書きが骨董品の価格上げサンマ二尾もらって柚子を買いに行く休日にババと約束したボール荒れ球に釘づけとなるコーチの目よく弾むボール都会へ飛んでゆく少年の夢育んでいくボール哲学もなく石庭を後にする半世紀ぶりの自転車エコライフこれからが真価問われる過半数これからを何度言ったかダルマさん頂上までであるとわからぬ道しるべ仲良いが酒飲めぬのが玉にきず気が付けばいつも隣で呑む男楽と苦のリズムで老いの処方箋筆圧が落ちてボールが転がらぬ直球はパウンドさせてから受ける弾まない手毬温めて春を待つ

川柳塔唐津

仁部 四郎報

焼き餅の昔を笑う老夫婦

栄美子 紀美子 初江 房江 悦子 方子 あやめ てるみ 由一 哲代 鐘造 充子 洋子 つよし 雅城 清 賀世子 勝 桃葉 公誠 遊花 乃りこ

佳句地十選 (2月号から)

山口 光久

ふところの深さを秘めて山無口そうだねと言えど何でもない話急いでる世の中乾き出している姐の上で通した黙秘権変わりたくて君の器に正座する間引かれてまた間引かれてフロとなる主婦業へ礼を言われた事がない人間が試されている温暖化どんぐりが寄って笑いの渦が出来適当に忘れて次を詰め込もう

義良 准一 知恵子 昭 真理子 一 粹 てるみ 鈍甲 節子 りんげ

降ってくる一万円札に埋もれてる着ぶくれて書斎に籠る灯油高馴れあいの儀式みたいなアンコール大騒ぎやつと議会も腰を上げ一里塚一つ消えたか通夜の道手作りの二八の蕎麦と馳走され

實 晴翠 蜂朗 輝夫 四郎 高明

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

母さんの足跡にある生きる知恵とほけても妻はその先読んでいる安売りのコーナー約交女です頂点のない句作りに精を出すふる里へ心通わす鰯雲

ひかり 賢 よしみ 八重子 あきら

ハンドルを大きく切つて丸く棲む
逆境に負けるものかと湧く力
通知簿のように見つめる診断書

公達も姫も未練のかずら橋
また来ると言わず流れてゆく抜け毛

川柳ふうもん吟社

夏目 一粹報

流れ星今日がお前の命日だ

盃に入れてサイコロそそのかす

正誤表付けて自分史書き終える

まだ硬い殻の卵を抱いている

亡父の命日やさしい風に撫でられる

人間にまだまだなれずそして冬

浄土には勝ち組の居る場所がない

札束が舞つてる夢を見る師走

命日は亡妻のことだけ考える

生き様を束ねた母の髪を解く

サイコロの転がる先に幸よあれ

勝ち組でなくても生きる術はある

サイコロの上りが近くなるいのち

請求書束になったら恐ろしい

よれよれの背広が語る自分史よ

追いかけて欲しくてちよと立ち止まる

あと一つ許せぬままにそして冬

東になってかかれ山も動かせる

雨降れば雨のページを繰っている

いさむ はつ恵 放任 弘 貞月 洋々 公弘 彰夫 ひろこ 一瑠 悦子 賢 一京 鬼桜 三津子 富子 あしび 忠良 完司 志げ緒 無限 帆雀 楓楽 雅女 かをる

サイコロでまさか人事はするまいな
ホームレスそつと命日近く無常

命日は亡夫との記憶たぐりよせ

命日だ愛しい骨を抱いて寝よ

一周忌待たず女が翔んでいる

自分史の泣いたページを糧に生き

ひび割れた夢を抱きしめてるひとり

揺れ動く株の尻尾が掴めない

そして冬あの切り傷が疼き出す

勝ち組に枯れた男いる老獪さ

川柳花の輪

妻谷 重風報

ウィットある嘘をつきたい考えよ

すぐわかるうそにだまされ苦笑い

あんたのお陰やうそがだんだん上手くなる

民営化葉書バーゲンないかしら

戦地まで片道切符この葉書

年賀にも平凡な倖ち福々と

母に出す葉書大きくふくと書く

あの人がふりむいたなら今日は吉

うれしいなもしも子供にもどれたら

もしもの時使う写真はこれがいい

娘にだけはもしもの時の頼み事

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

前向きに生きた女の初鏡

任されて今日一日を持て余す

金祥 益子 菊香 善夫 圭一郎 孝男 美雪 穀 茂登子 一粹 隆盛 隆子 薫 泰子 重風 ミヨノ ルイ子 音成 やすの 善栄 一幸

春へ春へと給馬もはらはら揺れている
初詣で氏神も遠くなる

初物を仏と分けて恙無い

無理せず初心に-caえりほつとする

いつの日も妻は元氣と思ひ込み

輪の中の元氣印が取り仕切る

脱皮する元氣もらった花詩集

元氣出せきつといい事あるはずだ

九条も僕もまだまだくたばらぬ

危なかつかしくて見ておれないヒト科

はらはらと傘の下にも雪が降る

合格へ親ははらはら子はけろり

はらはらと紅葉散りゆき春約し

背もたれの椅子に任せている未来

月光にまかすわたしという冬野

こんな私に任せる君の寛大さ

社保庁に任せていては生きられぬ

おい倅大黒柱任せたぞ

任された城塗り替えた子の個性

任せたらやる気を出した三代目

仲直りチキンライスに任せてる

天運に任せて生きる向かい風

熊野古道足に任せて歩きたい

コンピュター任せの社会軋み出す

晴耕雨読天気任せのスケジュール

頼んだよ背の大きな手が温い

輝子 英子 和香 よしこ 紀子 准一 和子 三喜夫 ダン吉 保州 泰 佐一 和 伶 あきこ 登美代 順子 豊太 富美子 東吉 小雪 裕美 三男 紀久子 正博 克子 公子

命任され医者巡りする救急車

川柳塔なら

坊農

柳弘報

泰女

日本語も怪しい子らに英会話
納得で別れたはずがこの未練
一年をとにかく無事に舞い納め
さつきから鼻がピクピク動き出す
怪しいという厄介な荷が一つ
張り込みのデカが近所に怪しまれ
ちぎれ雲怪しいなどと思つまい
お手が鳴る浪速手締めで会納め
出席をしませんとしらを切り
女より女と思う喉仏
薪能納めの舞いに散る火の粉
息切れの街に夕日の真つ赤つか
ひよつとしてそうなるのかもロゼワイン
追いついたところで怪しくなる噂
納会的主役は酒が呑める人
注文を矢鱈とつける解説者
注文があるまで作らない頑固
夏茶碗納めて過去は振り向かぬ
酸欠の街で大志が乾涸びる
眠らない街で私のウツ溜まる
欲の皮すつと納める袖の下
ドクターが首をかしげて黙りこむ
ベテランは丸く納める口を持ち
この胸に納めてそれで済む話

隆子 博一 美はる ふりこ 孝子 茂雄 千梢 章久 勝弘 成子 秋泉 道子 理恵 弥生 六助 隆盛 重人 真理子 富子 ダン吉 朝子 恭昌 比呂志 秋雄

忙しい街であいつまで乾く
注文はまちまちですがいい家族
雲行きが怪しい馬をのりかえる
冬花火怪しい音を聞いている
注文は山ほどある一票だ
カード化の街が無口になつていく

川柳塔きやらぼく

大家

恵子報

書き遣す一句余生の火をもやす
跳べそうな溝だがまわり道をする
亡母といたあのひと時が今ほしい
赤を着て老いをさらりと遠ざける
初恋は美しいまま胸に住む
椿の幹のところにテーピング
早起きの褒美明星との握手
紅葉も足湯に落ちてひろわれる
ぼつりと逝きたいなんて無理ですか
山茶花とかたる秋から冬のこと
つまづかず転ばずゆつくり老いの坂
スーパに挨拶交わす友が増え
仕事終えホッと一息仕舞風呂
誰彼と言わずわたしがすればよい
気が付けばねずみを追わぬ猫になる
いつの日も無口な老父の背に感謝
残り日もこのてのひらで幸つむぐ
平和とは素敵おともイヤリング
痛みあり眉間の皺が増えに増え

國治 美千子 一風 洋子 保州 良一 ない子 那珂子 やえ 章江 千代 壽々子 蘭 亜弥 すみえ 天雀 清子 ふみ 恵子 玲子 富美子 瑞枝 晴子

響き合ったこだまは遠い虹の色
快よい気分だ唄を歌つてやれ
誰にでも飽ぐらいなら上げられる
寒くても朝のウオーク快調だ

竹原川柳会

古田

太虚報

うっかりし時代の波に乗りおくれ
うつかりを許してくれぬ鬼がいる
うつかりを許さぬ孫の目の早さ
うつかりと咲いた桜を喜ばれ
うつかりと褒めたおかずが今日も出る
うつかりを支えてくれるひとと居る
笛を吹く父の背想う竹林
環境破壊地球ががり笛を吹く
ばあちゃんやが豆笛教える散歩道
豆笛草笛あざやかにある初恋だ
さんま焼く妻には妻の笛の彩
オーイ雲も元氣もらつて笛を吹く
行く当ては無いがいつもの道歩く
笑つても泣いても変えられない道だ
迷い道もう抜けました虹の橋
道があるからきつと人も住んでいる
道ひとつあなたの胸にまつしぐら
風になりこの道駆けてゆくからね
趣味一つどんな茨道となり
母へと続く一本の道がある
この道でよいのでしょうか道祖神

春枝 雪江 日枝子 初枝 房子 貞子 節夫 千代美 静風 栄恵 輝恵 蘭幸 敬子 節生 規代 一路 汎美 笑子 幸子 あゆみ 淑子 厚子 万年

故里の自然のままの道がよい
天駆ける私の翼を補強する

この思いちゃんとあなたに飛んで行け
手を伸ばし掴んでみたいオリオン座

京都塔の会

都倉

求芽報

くよくよとただ無駄と楽道家

書斎では銀のマウスが威張ってる

群れの中筋を通してばかり浮き

正月はポインセチアも疲れ気味

ポインセチア数え切れない欲の嵩

ポインセチア買おきゃつぱりおかし買う

地下鉄のポインセチアがよく喋る

合掌の邪魔 煩悩のあれやこれ

自分史に妻があれこれ筆入れる

あれこれと頤が特技のサイン出す

あれこれの恩を清算年の暮

胸の奥あれこれあるがチャックする

あれこれとプロセスあつて米を研ぐ

母からの土産はあれもこれも詰め

ゴール前買わない馬がよく走る

人さがす足 小走りになつてくる

少年が涙振り切るまで走る

完走へ悔いを残さぬ汗をかく

走ったら追いつけそなた銀の位置
もったいない言つて無用を積んでいる
明日から無用の書類整理する

太虚

比呂子

千枝

史子

庸佑

ますお

ふりこ

則彦

保子

満子

求芽

欣之

克治

美義

宏子

益子

昌乃

牛延

福子

篤子

石舟

朝子

典子

綾子

弘之

いらないうて買わせた指輪です
森羅万象無用のものは何もない

川柳茶ばしら

板山まみ子報

グランドキャニオン透かし台から腰が引け

ストロブにこたつ猫より丸くなり

口中に義歯の領分また増える

鈴ならす孫に先祖も初笑い

嘘うそと騙されたのをまだ否定

酒の句をつくれと酒を注ぎにくる

冷蔵庫片づけながら一人の夜

降る雪も倉に熱い燗の酒

長柳会

村上

直樹報

立つしゃがむまでできるからまだ若い

家内安全破魔矢に願うよい年を

霜柱立つ朝冷えて鳥静か

七五三撮った写真もセピア色

港町おばさん達の市が立つ

巻寿司は端から先に手をつける

建て前と本音ぶつかり立往生

破魔矢買い絵馬も掲げて神頼み

身の丈の福よ来たれと破魔矢受く

福袋求め立ちんぼババ子守

立話女三人道塞ぎ

年金の減った話でもり上げる

巣立つ子に心でメール目に涙

啓子

葉子

幸子

美千代

文男

かつ子

秀水

遡行

百合

まみ子

直樹

正一

明子

靖博

たけし

正博

光弘

明信

史

もこ

武男

けい子

マサ

子は遠く年金傘下日向ぼこ
年金の範囲で立てる旅プラン

よくしゃべり立つて歩けるうらが花

年金の額と酒量がにらめっこ

競り勝つて表彰台に立つ笑顔

年金を増やすと言えは当確だ

永上に立つライバルの熱い息

友はみな年金組で仲がよい

美しい国年金の消える国

片足で立つて老化を確かめる

魔性棲む防衛省を撃て破魔矢

真つすぐに立てなくなつてから素直

年金になつて足し算用が無い

CTVテレビで知った流行語

強がっているが目元に泣いた跡

騙された振りしてサンタのパバを待つ

ゴール間近お袋の味特訓中

不器用にふんばつてます老いの冬

裏表ない父さんの一直線

一面の落葉踏み締め尾根歩く

愛娘遅咲き実りゴールイン

ゴールまでまだまだ高い壁がある

鬼遊師の種が実つてわたの花

偲んでも風のうわさは聞こえない

ああ悲し相談相手減つて逝き

正子

英美

輝子

たかし

よしお

敬二

和子

富美子

芳野

靖子

淳司

幸雄

正美

義明報

たえこ

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

愛子

ミツ子

宏至

幸江

パンドラの筐からだした青い桃
買いたいのが相談したら止められる
よく回る舌が野心をまだ棄てず
大安日行列出来るクジ売場

すき焼き煮タイミンクよく孫が来る

偲ぶ恋想いだせない年齢となる
わだかまり一つ減らして年越える

孫の結婚見届けのぞと八十路翁

五本指芽ふく機会を待っている

赤い糸タイミンクよく結べたよ

原油高わが家に欲しい温暖化

本気かと思わせぶりの夜の蝶

辞書なくば葉書一枚書けぬ歳

どうに煮るふると恋し母偲ぶ

バンコクのバイク生き抜く凄まじさ

ありし日を偲び毎朝香を焚く

美女に会う頃に合わせてする散歩

逢えた日の日記余白を埋めつくす

川柳ささやま

遠山

可住報

ふる里の味が詰っている歳暮
傷ついたところ絵筆が忘れさす
末端の縁者まで来る遺産分け
デパ地下もおでんの匂い人集め
失敗を温いおでんが忘れさす
子の夢が桜咲く日の絵馬にゆれ
似顔絵が美形に描かれ嬉しくて

美はる
克美
いつみ
義明

宏

正春

欣子

妙子

俊子

晴美

浩三

孝子

和子

八寿子

ふりこ

ますみ

はじめ

一風

純子

美緒子

二英

美紗子

靖子

多美子

照代

昔ないキムチおでんが好まれる
号外はやっぱり名産山の芋
縁もろて住んでる地球汚せない
旅立ちへいっもおでんが留守をする

努力賞でした夫婦と言う縁

腕組んで見てもピカソがわからない

親と子で介護しながら縁を知る

高槻川柳サークル卯の花 釜野 公子報

公子報

うれしさを書くとき体が丸くなる

生温いことに目尻が下がります

ゆつたりに馴れて戸惑うMサイズ

一杯の水に命を預けます

生温い恋で不倫とまでゆかず

好きですを過去形にして終る恋

煮え切らぬ別れ話が生温い

勘亭流京の師走をゆつたりと

師走でもゆつたり暮らす夫と猫

丁度いい加減のこへ埋められる

達人と言われるまでの汗がある

五欲みな神に預けて日向ぼこ

子育てを終えてゆつたり離陸する

なまめるい男と暮らす苦勞性

すきま風となりの部屋は生温い

希望まだ捨てず傘寿の夢を描く

リハビリの試歩の一步を褒められる

かはる
幸子
富美
美智子
哲男
可住
開子

可住

開子

開子

開子

郁夫

郁郎

稲子

恵美子

一央

かずお

活恵

公子

慶子

孝作

宏章

幸雀

こみち

佐代子

節子

石舟

砂輝守

度忘れが幾つも流れシングルベル (比) 照子
暮れなずむ師走の風を丸かじり
正月をゆつたりするための師走
ゆつたりと歩く梅田を蹴られそう

師を囲みみな青春の顔になる

人の世の裏も見まわす蕾かな

師の教え巧みにかわす蕾かな

ずい分と妻には苦勞掛けた過去

過去のことを持ち出すさかいたまもめる

足踏みをするとき力が湧いてくる

予約は午後ゆつたり開く冬薔薇

オンザロック機の熱すまで待つ余裕

ろつば

葉子
泰雄
八斗濤

律子

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

ろつば

照子
直人
晴子
晴美
尚士
美龍
美義
八斗濤
泰雄
葉子
律子
ろつば

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

朝の嘘今日はくちびるよく乾く

干からびた心を癒やす子の寝顔

老人がベンチで体干している

水河消え水の不足はまのあたり

雪解けの富士の裾野の水うまし

山の道湧き水に合ううれしさよ

兄嫁とポックリ寺の水を飲む

無造作に水流してる使つてる

寒の水母の時代は哀しかり

昨日跳び今日はためらう水溜り

岸和田川柳会

土橋 房枝報

戦争の種の九条で大掃除

義泰

大掃除終わった後でぶったおれ

大掃除してもせんでも年明け

口ポットが大掃除する近未来

大掃除思わぬ所に諭吉さん

墓地買うて何かが違う安堵感

まず一句抜けると安堵お茶を飲む

見送って安堵した夜の窓の月

病抜け喜寿の祝いにはとする

悪児も母の匂いに安堵する

核ゼロでやっと地球が安堵する

難産の十指揃って出た安堵

聞き入れることの嫌いな頑固者

年金にメスを入れたが閉じられぬ

調味料母の料理は目分量

叱る時一つは入れる褒め言葉

歓喜して入れたタルマの目が笑う

うんざりの諸南瓜に罪はない

蕪蓄を長々語る縄のれん

うんざりな芋蔓式の偽装記事

お洗濯うんざりの雨子沢山

懺悔して清きこの夜も縄のれん

誰知ろうパイトのサンタ涙あり

あまたか社長の同じ話聞く

鹿野みか月

福西

茶子報

ポチ袋いっぱい残り新春しずか
カズノコに飽きたらにしん食べてみる

久枝 孔美子

ふみよ

泰弘

香代

珠子

洋

笑司

昭

寿海

力子

ダン吉

蛙城

植代

淳風

弘子

房枝

守

篤良

俊昭

幸子

和美

仁緑

岩夫

東吉

おふくろにもらつて返すポチ袋

ポチ袋待っているのは百貨店

カズノコのシャキシャキ脳を刺激する

要介護ならぬ間に旅立ちたい

ポチ袋今年の景気悟られる

遺産分けと介護の順に揉めている

その昔猫が跨いだカズノコだ

介護くらいします私のゆくところ

長患いしないつもり雪だるま

私より大きな手にもポチ袋

幸せは畳の上で介護され

縁起ものブチブチ数の子の出番

カズノコを食べないけれど死にはせぬ

成人式少し弾んだポチ袋

カズノコのつぶつぶほとんど欲がある

介護する妻より先に死ぬません

ポチ袋人間さまは裏返る

老いるとは悲し介護という山河

曰くある金をポチ袋に入れる

数の子の一粒なりと甘え無し

三が日カズノコばかり食べている

介護してもらう日があり送迎車

介護する深い絆の母がいる

お正月カズノコ噛んでいいる縁起

弁護士もきげん良いとき悪いとき

その時は素直に介護してもらおう

中国産でもカズノコに変わりない

螢

公子

和子

武彦

弘子

忠良

蟹郎

稔

彩子

ひろこ

美恵子

あづま

実満

睦子

睦子

完司

重忠

玲子

きみ子

盛桜

諷人

みさ子

汲香

永子

かおる

クニ子

節子

ポチ袋ほどの安らぎ持つて生き

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

茶子

かつ子

ちよえ

伸子

聖子

はるみ

恵美子

好栄

博利

清泉

レジに来て数える小銭に待たされる
一杯のお茶でこんなに喜ばれ
ときめいて賀状繰る手が温い
きつちりと計画たてて忘れてる
そのときはふんわり雲にのってゆく
小銭入れ右往左往で疲れきり
餅を背に小銭で遊ぶ摩訶不思議
九条だきつちり歴史伝えよう
雲ひとつない夏空にある疑惑

西宮北口川柳会

黒田 能子報

孝一

美龍

いたる

わこ

哲子

遠野

萬的

折杭

直

キヨミ

章子

多喜子

忠

お賽銭祈りの中に欲も込め
身代わりで真摯に祈る和蛸燭
親子三代祈りの味は皆違ひ
駅伝のたすきに祈りほとばしる
私は私あしたへ進む道願う
受け入れを願つて走る救急車
二番手につけてチャンス wait 願ひ
初詣で願ひは同じ共白髪
願望を乗せて賽銭宙に舞ひ
神仏へ願ひは一つ平和な世
お願いとひとこと言えばすむものを
七草に願いを込めてすすす味
厳罪を願う遺族に法の壁

願わくばこのまま歳をとらぬこと
近くまで来たと寡黙が訪れる
異邦人パス訪れて城の街
訪れる客あり今日は紅をさす
年上でリーダーにされ四苦八苦
リーダーはどげんかせんと立ちあがる
部下思うリーダー詰め腹切らされる
自然治癒待つております医者嫌い
我武者羅に生きて一人の雑煮餅
絵手紙も一升瓶のお正月

煩惱もお札を燃やすとんどの火
米粒ほどの新芽が春を待ちわびる
残り火をかき立て春を待つ卒寿
酒を飲み酒に飲まれる三箇日
八回目となればねずみのんぴりと
残念だけれど修正した返事
たまに來て挨拶だけの福の神

あかつき川柳会

山本

柳昌報

十坪の家を建てると言う息子
四十年務めて建てた城ゆらぐ
目で物を言う母さんの底力
力対力アジアに似合わない
偶然の機会とらえて愛告げる
なんでまた出雲大社で会うなんて
偶然が重なりチャンスやつてくる
偶然と言うが話がうますぎる

弘子 富喜子 蓄水 江美 順子 五月 二英 房子 正和 朋月 静子 てる 歳子 松煙 求芽 哲男 美智子 和香 シマ子 卓 麗子 勝弘 紀乃 たもつ

偶然へ少し期待のある歩幅
当選は偶然でない靴の減り
香焚いて偶然を待つにじり口
日溜りで伸びするネコも春を待つ
大空に昇る階段はしいなあ
とこととと階段上る若い足
石垣のみどりか芽吹く春の彩
あの石段登らなければ会えぬ人
人生に下り階段考えぬ

第四コーナー曲がる階段さつくなる
階段の上下だけの仲になる
夢さがしらせん階段まだ昇る
階段を上り詰める冬景色
シーズンズの蟹の絵と字が多すぎる
温暖化口先だけでは止まらない
百日紅咲き誇る頃彬の碑
ねじれ国会民が選んでなぜ悪い
知事選に府民の意識反映し
動かした力はやはり女性達
長寿国九条という力布
戦わずして勝つ九条の力
澄んだ目でどうぞ九条読みなさい

川柳さんだ

北野

哲男報

ねずみ年世界のマネー駆け回る
天井の裏がグラント家ねずみ
書き初めの天空に舞うとんど焼

理恵 尚士 柳弘 君代 美世子 柳昌 一步 富美 東吉 正明 蕉子 見清 集一 章久 紀雄 正 鈍甲 明水 美花 哲男 扶美代 ダン吉 雅司 歳子 キヨミ

墨壺に棟梁の自負留めてある
亭主殿見事に妻の想定内
蒼天に主を待つてなる木守柿
貸衣装脱いで成人式終る
お年玉ママうれしそう子沢山
障子張りコッが分った頃終り
松葉ガニ試食をするも手足出す
勝ち組も負け組もなし蟻の列
言い分けを考えて飲む小正月
顔出さぬ人は病気と思われる
側に居るだけでわくわくする女
坊さんに趣味はと聞けば魚釣り
温暖化便利暮らしのつけがくる
初心者に自然優しくほうれん草

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

綿帽子かぶると山が神に見え
禿けたはずいつも帽子のいる仕事
同窓会帽子ぬがない若作り
じぞうさま寒さ予防の赤帽子
おしやれしてワイン飲んでる夢の中
ボジョレより地元ワインを傾ける
気晴らしにワインレッドの服を買う
お星さまがとて綺麗だからワイン
ワインよりお酒が似合う人と居る
点滴よこれがワインであつたなら
無作法な優先席の長い足

千代子 和代 婦美子 哲男 哲夫 正和 一泉 光久 朋月 二英 忠 好文 順子 章子 惠勇 敏 志洋 フジ 喜久子 狭杏 りつえ 美代子 アヤ子 久仁子 一知

一步踏み出さねば幕は上がらない
美人とは言わずにほめる脚線美
饒舌な妻も静まる蟹の足
スタートライン足の裏にもある気合
足跡を辿り見付けた父の海
嫌なこと忘れることのむずかしさ
人情を忘れてませんか世間様
大臣の資格に健忘症がある
忘れてる振りする事も思い遣り
憎しみてさえも忘れてゆくやがて
神様は時どき僕を忘れてはる
お日様の恩を忘れて病む地球
座右の銘心の奥に刻みこむ
正論を寄つてたかつて切り刻む
試験場今日の時計は早過ぎる
夫婦愛時を刻んで友となる
おてんとさま正しき人を増やしめよ
謝って頭を下げる事ばかり

川柳大阪

長井

善純報

期限切れババに食べさせ見る様子
水増しの武器と利権が国守る
澄みきつた青空余裕ありすぎる
言い負けた余裕の酒がまた旨い
夫逝き自由と余裕が出来ました
故里に帰ると余裕出てきます
飄飄と生きる心にある余裕

重人 ヨシ枝 耕策 ダン吉 泰子 一壺 正子 かつみ 光男 扶美代 いさお みつこ 庸佑 六点 章司 ちづる 美喜 真一

盆栽をいじる余裕の汗染し
誰よりもあなたは私を選ぶでしょ
余裕です埋蔵金ある暮らし
あれこれと心が揺れる反抗期
さびしくも揺れる思いの親心
検査庁あと一歩まで揺れている
印一つ揺れて押さうか押すまいか
老婆はイケメン見ても揺れません
シュツと切る傘のしずくに揺れる性
風に揺れおしゃべり上手柿もみじ
欲得に走る暖簾が揺れている
揺らいだがメダルを契る星野さん
笑い声大きく揺れている家族
完全主義今朝も父さん靴磨く
完全をめざして欲しい四字熟語
完成のない人生だから面白い
完全に社会倫理を欠く老舗
完全をしまったラベル貼り替えて
完備した九条くずすやつがいる
望みます完全雇用安心を
ENDまで力一杯生きてやる
ひたすらに核ゼロの旅まだ未完
完全に妻の手にある主導権

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

子を抱え生きねばならぬ束ね髪
彼岸花たちの忠告受けに行く

一風 珠生 司 鉄心 花笑 信醉 章久 和 柳弘 柳昌 東吉 紀雄 笑風 洛醉 重人 喜楽 彦太 まつお すがお かよこ 勝弘 ダン吉 善純

きつぱりと苦言を呈す年の功
干餅だつて餅肌だつたことがある
お雑煮を食べて新年引き寄せる
餅を搗くたびに若さが遠ざかる
よもぎ餅硬くなつても老母の味
新しい趣味を探している白髪
おしるこの中でときめく初日の出
ダンディーな整髪にボク惚れ直す
癖のある髪でも欲しい昨日今日
髪形を変える自分を变えるため
しみじみと人生かたる束ね髪
寄付をして少し仏の顔に似る
餅代が小さく届く福祉の灯
髪洗う別のわたしが見えるまで
同じ目の高さになつて子を諭す
ねずみがチョコッに乗つて鏡餅
幾山河越えてきたからいえること
温暖化神の忠告かもしれぬ
誕生日母のばたもちもう居ない

尼崎尾浜川柳会

田原

宏一報

人並に今年は孫がお年玉
にぎりめし母は梅だとゆづらない
洗い物それで終った三が日
家族みな元氣幸せ福笑い
子や孫に夢を託して生きている
義理と見栄うんと削つて生きて行く

洋子 和香子 ヒサ子 あづろ 美鈴 成柳 一呑 順風 銀波 ふさふ 花匠 雅城 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 五楽庵 宏一報 龜代子 野薫 よし子 江美 五月 里江

薄型テレビ腕と脚とが出て来そう
生かされているなと思う今朝の春
天国でうちのお多福待つてます
わがいえのお多福さんを拝んでる
アンカーで偽のひと文字跳びはねた
えべっさん宿つてそうな笹選ぶ
呱呱の声福を呼んでる三世代
元日にすまんすまんと賀状書く
福袋四つ抱えたバスの客
福はもう無いかも知れぬ伊勢参り
ほほえんでいると手にした残り福
一年の運氣を試す福袋

翠洋会

谷口

うきうきとした分深い挫折感
約束をいっぱい持つている手帳
うきうきと夢を詰めてるランドセル
彼と会う化粧うきうき気もはずむ
何かいい事ありそうな台所
おばさまが必死に走る福袋
雲見上げ花を眺めてみな楽し
内定の通知うきうきよく食べる
七草を七種母さんから初荷
織り立て初荷景気はまほろしか
田舎から初荷が届く母達者
仲直りしよう初荷が着くまでに
初雪が初荷を祝うように降り

靖鬼 宏一 朋月 耕治 義芳 政治 正治 勝巳 イサミ 美義 孝一 美龍 義報 楓楽 日の出 志華子 舞夢 恭昌 尚士 さと美 照恵 理恵 捷也 千歩 正雄

初荷来て街も暮しも動き出す
祝儀入れ初荷待つている店主
向い風初荷に社運賭けて出す
初荷来る無農薬とはありがたい
千の風地球のウィルス吹き飛ばす
金婚なんですまだまだ達者です
留守電に母住む里の吹雪く音
とばかり忘れたいふりがなつかしい
大晦日吊り広告も年変わる
プロ転向ハニカミ王子のさわやかさ
まあこんなもんやと思うことにする
冬の底ジョークひとつを温める
いいことがきつと待つて春はそこ

すみよし川柳会

岩崎

公誠報

兄弟もお金がからめば敵味方
言つてたね貴方の色に染まるとか
青い鳥こころの中で育ててる
色あせた老舗の看板悲しげに
顔色が良いと安心してくれる
登りつめ余所見しながら下つて
燃料のうなぎ登りに寒さ耐え
登り竜昇る朝日に宙返り
ログハウス心が和む木の香り
日が昇るシャッターチャンス転んでる
悪天候悩み大きい登山靴
うなぎ登りガソリン価格誰が笑む

すみ子 千梢 集一 れんげ 満作 昭 富子 蕉子 げんえい 水昇 義 希久子 みつ子 明江 伸子 幸子 裕之 日の出 篤子 萌 正太郎 ヒロ 舞夢 りつえ 定子

富柳会

池

森子報

登り坂下り坂あり人の道
玉の汗三角点にたどり着く
登りつめた席で一転した被告
煽てても口ポットは木に登らない
千枚田夜明けとともに登る人
登りつめ薄い空気にさらされる
引き返す勇気持つて登る登山靴
富柳会
争わず競わぬ賞へ功光り
私にわたしが渡す努力賞
不器用に女を足して花暦
文句たらたらお湯もお水も出る暮し
ばやいてる間に恋が煮崩れる
パワフルに生きて余白は埋めておく
ブライドを手放してから長い冬
もう一人子供欲しいと双児出来
糸引いて踊らす人が二人居る
ブツブツと川のヘドロが小言いう
はんなりと核心ついでくる文句
美辞麗句並べた裏にある仕掛け
てのひらで踊り踊るや恐妻家
ブツブツと泡吹く蟹に吾重ね
文句かと思つて聞けばほめ言葉
家中の文句をボチが引き受ける
喜ばば木の葉は喜んで落ちてくる
足踏でまた一日が過ぎてゆく

公誠 半銭 かりん 昌紀 蕉子 桃花 遠野 澄子 登子 恵子 佳子 アキ 千華 奏子 武人 伸雄 未知 ひろし 高鷲 壽峰 礼子 糺 深雪 よしみ 鐘造

赤福よあんたもでつか白いチョコ
あの人のおうんうんの表うら
人間不信不協和音が首を出す
亡父の顔が映り髭剃りが終る
皆勤賞なら手が届きそう元気です
少年をプラス指向にする暗示
生きざまをプラスに替える一行詩
やがて冬ぬくい返事のほしい母
こころ一番要を締めるプラスネジ
相槌を打ってその場を切り抜ける
文句なしの妻に非常口がない
友達の前はお前と呼んでおく

岬川柳会

八十田洞庵報

初春の値上げラッシュに泣かされる
老いるのを遅らすくすりいつでできる
来る予定好物並べ笑顔待つ
初春の優雅な筆に励まされ
予定通り写真送って来るかくや
いつかくる予定が恐い大地震
旅プラン煽る注文みやげつき
その時に動かなかった悔いひとつ
捨てられた松の新芽に花添えて
古希越えて間違ひ気付く思い込み
鈍感が手頃な幸を逃がしてる
ピエロって奇抜な所作で笑わせる
傘一つ寄り添え杖の老い二人

寿之
巳代一

紅紫朗
彦次

よりこ
欣之

信子
鬼焼

七朗
和子

森子
晴美

東吉
圭子

年子
令子

俣子
和子

とみ
和香

桜琴
茂平

富美子
洞庵

悦子

むらくも川柳会

毛利

温暖化つららの顔も忘れてる
剣の舞つららで遊んだ君も古稀
軒下につらら連なる冬こもり
陽に眩しつらら私の胸を突く
男の子つららで一剣踊れそう
元旦は音色も変わるハト時計
激動の昭和医院で話す友
海あおくまだ老いの夢ふとく
山一つ動けば海が見えてくる
舌たらず苦い葉を飲んでる
夫寝息何はなくとも明日がある
その日まで男で居たいあばら骨
友達の電話に夢の数かふえ
迷うことあつて人生泣き笑い
一日が暮れる家族の和がもどる
ゼロ歳児大きな大人ふり回す
サッカードを孫とたわむれへとへとに
老いの旅いつまでつづくくらべつこ

岩美川柳会 石谷美恵子報

父さんの歌にリズムはいりません
脈搏のリズムで時が過ぎて行く
と演歌のリズムでわたし丸洗い
補聴器で会話のリズム取り戻す
寝食のリズム狂わせたのは癌

幸報

美保
信夫

彰
幸

定子
俊夫

瑞枝
蘭水

秀夫
嘉寿子

愛子
義良

秀子
恵美子

ます美
喜美

久子
清子

松
完司

一瑤
幸郎

蟹郎

朗らかに十八番を歌い老い忘れ
逆境にあつて朗らかに生きる
美人ではないが朗らかに惚れる
朗らかな今日が欲しくて深呼吸吸
朗らかな宝に生きて明日に積む
朗らかな淀んだ空気まで澄ます
朗らかな妻がいるから老化作せぬ
朗らかな患者病気を追っ払う
朗らかな暮らして敵を作らない
まだ六十路高齢者とは言わせない
傘寿過ぎ二米もの松を剪む
何もかも高い冬眠でもしたい
のぞみだけ高いところに置いている
知恵しほり高慢ちきな鼻を折る
年々に高所恐怖症になる
高慢がますます石が置いてある
旅の宿高いいびきが先に寝る
高座から人間模様教えられ
高笑い幸せなんだ皆元氣
志は高いがモラルこの程度
困つたらいつも背伸びて空を見る
割算の余りを拾う老介護
のんびりと余生のリズム老妻任せ

サークル檸檬

吉田あずき報

聞き上手唇までも読んでいる
気分屋で顔につけとく信号機

睦子
公子

孝男
公乃

菖子
幸枝

きみ子
雅女

かつみ
茶子

重忠
よしえ

一京
圭一郎

はるお
忠良

たぬ
節子

清帆
公安

和子
登

美恵子

たもつ
遠野

一病と今日を大事に生きてゆく
一時預けに置いてある後日談
手品師のコートにハトが巣を作る
折りたたむコートに悲壮感がある
コート際のボールさばいて得意顔
隠したい傷があるから着るコート
転びぐせ白いコートは止めました
満員車コートが宙に浮いてくる
マネキンのすてきなコート見て通る
とりあえず進んだ道で日が暮れる
本は借ることにして飲む物価高

城北川柳会

伊達 郁夫報

捨てきれぬ愛着亡父の広辞苑
切り捨てても愛情もある花鋏
一日が無事に終って手を合わす
悪人と並んで一ツ鈴を振る
ねずみ算式に年金増えた夢
甘すぎる話を詐欺師持っていた
だれよりも臍の力で運拓く
ユーモアが判る時計でよく進む
神の名で戦争続ける国がある
九条は守り神です鶴を折る
虚と実の狭間スタート迷い出す
振り返りあれがスタートだと気付く
男と女まん中の性がはびこる世
ほめ言葉食べて綺麗になつていく

楓 楽 扶美代 昌 紀 美 龍 みつ子 光 久 義 子 あずき いわゑ 希久子 清 生 萬 的 典 子 美智子 とし子 章 久 利 行 重 人 正 福 世 千 歩 明 子 昭 子 ひさ乃

何時の日か柳の蛙になるだろう
ポインセチア門松よりも幅利かせ
手で折れぬ柳になつて生きのびる
スタイルをとかやく言える歳でなし
喜びのスタイル包む好婦服
スタイルは治せませんと美人の湯
スタートの華麗さに魅せられた恋
やり残し無い人生を今燃え
万札を賽銭にして目が覚める
ブランドへ豊かなヒップ邪魔をする
どの谷も海へと水の背なを押し
生きているきつと仏の愛だろう
陽の愛は森羅万象みな照らし
縫れては解ける夫婦の愛と憎
かまきりの折るかたちに干涸びる
点滴へ一滴ことにある祈り

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

建前もなく安らく老夫婦
証言に立ちネクタイが揺れている
建前がときどきくしゃみして困る
偽装偽装偽装信じていいのやら
天災で今夜列車というホテル
酔いつぶれとうとう泊る羽目になり
泊まるのはあちゃんちだと決めている
辿りついた傘寿峠だ一服を
やっと建つ楽し我が家もローン地獄

高 栄 求 芽 郁 夫 東 吉 志 華 子 順 三 ルイ子 朝 子 弘 風 集 一 一 歩 倫 子 たもつ 賢 子 慶 子 啓 生 重 人 俊 雄 庸 佑 タミ 寿姜子 肋 骨 岩 男

結論の出ない話が泊らせる
三ヶ日ごね川の字三世帯
交差点期待はずれの風に遭う
流されて石も私も丸くなる
結末が見えてお助け買つて出る
懐しい旅館で胸に迫るもの
円高の悪夢がよくなる品位
家元の花一輪にある品位
すっぱになると建前姿消し
寝泊りは暖さえあればそれでよい
建前の終わらぬ屋根に春の雪
ロボットに指図されそな今世紀
九条は建前でした自衛隊
建前も本音も煮込む鍋囲む
建前を箱詰めにして凍らせる
につぼんの品位を守り抜く正座
素泊りの我が家明かりが消されてる
無沙汰詫言また一年の免罪符
登りきった石段風も陽もやさし
お見舞は無用と言いつ待っている
素泊りで語り明かした友も逝き
建前で生きて心は傷だらけ

六甲川柳会

伊勢田 毅報

いい人に囲まれ悔いのない命
新鮮な気持でいつも前を向く
漬物は三切れまでだと処方せん

隆 知香子 満寿巳 萬 的 見 清 佳 惠 朋 月 巴 子 玲 子 早 人 美 義 千 代 勇 治 志 津 子 宇 乃 子 幸 雀 寅 次 郎 求 芽 十八娘 則 彦 美智代 洋 一

初日の出平穩願うねずみ年
小銭投げ大きな願い祈つて
じつくりと親子で語る掘り炬燵
信用の重さを知らぬ三代目
新鮮に角度変えるの見えてくる
疾走も脇から見れば散歩なみ
偽りを目深に被る冬帽子
鍵なくし慌てふためく母の顔
川の字に寝た日を偲び頼ゆるむ
道草がすぎて行先失う
新しい齒ブラシ並ぶお正月
煩惱を消すには足りぬ除夜の鐘
麻酔覚めよかつた私生きている
青空にたこ舞い上がる寒の入り
初詣で今年こそはと手を合わす
王砂利の音も鮮やか伊勢詣で
にこやかな遺影に今日も助けられ
元旦のこころ新たな初参り
喝采はないが男の座る位置
先ず妻の評聞き投句清書する
渡らねば生きて行けない橋がある
開いた口無理に塞いで貝になる

尼崎いくし川柳会

春城武庫坊報

悦子 政一 慶子 幸代 能子 正己 武彦 政子 久代 美穂 孝子 めぐみ 淳子 恵子 美恵子 忠貞 千賀子 繁義 無限 殺 いわゑ 楓楽 久子 和子 千恵

幸せな千支で幸せひとりと占め
戎橋不夜城の如人の群
今年から早起き散歩歳男
惜しげなく袖子と入浴除夜の鐘
何の苦もなくつた今老けてきた
七草の湯気の向こうに笑顔あり
笑うしかないほろくそに言われたら
門毎に幸せ配り獅子が舞う
断崖に悠然松の緑滴ち
寒の月矢張り寒いか走つて
川柳塔まつえ吟社 三島
正月を祝う縁の顔揃う
お祝いをされてねずみが嫁にゆく
びんぴんしゃん祝いの会は葉です
白寿には誰が祝ってくれるやら
人生の節目を祝う感無量
七福神よんで子年を祝いたい
初せりの花市に見る夢一つ
青春の夢が儚く消えていく
いやな夢みた日ごし顔洗う
夢ばかり追うなど叱る影法師
見るだけでいいと思うけど夢は夢
運勢はどうあれ夢を追つてみる
君からの手紙僕へのお年玉
お年玉赤ちゃんの胸ころげ落ち
曾孫の笑顔に渡すお年玉

年代 野薫 東園 幸子 ゆき子 道子 武庫坊 守弘 昭三 純 昭三 知恵子 茂美 日出子 昌枝 静恵 浜丘 幸子 幸 幸 多喜 治代 紫見 柳歩 禮子 多賀子

お年玉渡すうれしさ子の育ち
大家族親も悲鳴のお年玉
お年玉まだだせるから好かれてる
余命にも力いっぱい生きる箸
茶碗蒸し箸は宝を引っかける
元旦に寿と書く箸袋
告発は偽装を箸でつまみ出す
貧しくも二本の箸で飯を食う
食い意地が転がって出る箸の先
子ねずみの大きな夢を手伝おう
現在のねずみ少子化考える
菓害の実験ねずみ利用され
嫁入りを決めたねずみの初化粧
もたもたとしている飽食のねずみ
年賀状 子絵馬意見見せ米小判
倉吉川柳会 竹信 照彦報
初夢はベガサスに乗り地球見る
楊貴妃に抱きしめられた夢を見た
夢失せた人が集まるパチンコ屋
お年玉受取る児等に夢託す
初夢を見てないようでもまた寝込む
恋の夢見ず松の内明けて行く
川柳と共に生きたい夢を追う
拝んでも戦に負けたではないか
頼む拝むせつつかれても振れぬ袖
拝むのは神棚にある宝くじ

スズコ 英子 薫 ちえこ 畔 政子 たけし 螢 たえこ 玲子 桂子 小生 蘭水 知恵子 注湖 風露 石花菜 完司 瑞子 京子 和子 喜美子 螢 玲子 龍枝

日本は桜を拝み酌み交わす

まず健康ただそれだけの願ひ事

太陽を拝んでいます洗濯機

美人画を拝み運氣を吸ひ寄せる

拜んでも灯油の値上げ止まらない

三ヶ日くらいくどくど止めてくれ

くどくどと言ひ訳するが金が無い

十七文字だくどく書くじやない

言ひ訳はくどくと言わぬ方がい

くどくどが後で重荷になつて効く

くどくどと言ふより子ども褒め上げる

夢を見てほんのり笑うあかんぼう

ほんのりと心にあかりとす春

ほんのりと生きてほんのりと消える

湯たんぽではほんのり見えるエコライフ

ほんのりと妻が紅ひく退院日

眼の前がほんのりかすむ白内障

寝る部屋の灯をほんのりと小さくする

へんくつがほんのり笑う座が笑う

くどくどと書いたら句読点がない

川柳ねやがわ

籠島

恵子報

厳として日本を糺す富士の山

富士山でバンザイしたい受験生

妻宛のおはぎの札を書かされる

青い鳥探し求めて古希となり

月見草もさくらしも似合う富士の四季

雄々と富士は湖面もひとり占め

賀寿恵

秋 草

ひろこ

茶 子

美津恵

日出子

かつみ

きみ子

泰 輔

睦 子

和 枝

玲 坊

由紀子

鬼 一

次 男

重 忠

康 子

よしえ

萩 江

照 彦

とし子

かすみ

重 風

勇太郎

茜

博 泉

浮世絵の富士山嘆く塵の山

幸福な最後だろうなボツクリ死

絵手紙の札状ハガキはみ出して

倉吉川柳会 (前月分) 竹信

照彦報

山ひとつ越すと三途の川がある

乗り越して困つた切符代が無い

暖冬は越冬ツバメも被害者だ

とび越えた着地失敗水たまり

いばら道越した戦後の開拓誌

浄土まで越す旅ひとつ残つて有

為転変越えて独りの世も楽し

飛び石が丁度歩幅に合つた庭

温暖化年中蠅が飛びまわる

前を見て飛ばう八十路はまだ若い

飛びこんだ十人家族の嫁ぎ先

いざ飛ぶぞ肩つり上げた奴風

飛び付いた旨い話ですつてんてん

儲け分酒代に飛ぶ極楽とんぼ

財布から福沢諭吉飛んで出る

しゃべらない風は母かと合点する

納得をするまで待つたお母さん

合点の気合を入れる仕事人

合点のいかない事は背を向ける

理数学合点いかぬまま卒業

石橋を叩いて渡り合点だ

これでよし一人合点佳句ができ

麗

ルイ子

恵 子

完 司

玲 坊

次 男

由紀子

重 忠

きみ子

よしえ

京 子

泰 輔

喜美子

賀寿恵

玲 子

みちる

勝 誉

睦 子

慶 子

康 子

酔芙蓉

風 露

日出子

秋 草

和 子

石花菜

大好きな酒と心中するらしい

酒はいい笑つて泣いてねむらせる

酒飲んで笑つてさようならをする

乾杯の梅酒に酔つて目が回る

気の抜けたお酒料理にもつてこい

一合の酒酌み交わす冬の夜

百葉の長に御神酒に般若湯

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

酒よこめんまたもお前の所為にして

正論を吐く一匹の念を吐く

風紋は甘いその後を許さない

煌煌と命を照らす冬の天

土に生きた土に還つてゆく命

ばろばろになつても燃える夢灯り

美しい姉だが幸せ薄かつた

底抜けに笑う美人ののどんこ

美女からの酌に程良い酔い心地

鈴と舞う巫女を美人にさせる白

ひとり住む美人は過去を語らない

美人ならとうに私は死んでいる

月光が招待されたモノの庭

雨の日も天気の日もある今は負け

ミス日本夢見たころもありました

極寒の隙間で春と逢つている

杉玉も新酒の匂う春飛鳥

整形の美人の老後気にかかる

ひろこ

萩 江

茶 子

和 枝

鬼 一

照 彦

浩 三

秋 雄

森 子

あかり

柳 弘

深 潔

義 子

欣 之

聰 一

國 治

一 風

芳 香

アキラ

幸 生

健 二

加央里

風 子

朝 子

柳 伸

乾杯の炎河内野から爆せる
懷が冷え地球は温暖化
昔を語るばあさんは強かった

堺川柳会

河内 月子報

自墮落をあの世の妻に叱られる
男の子産んで嫁さん幅さかす
わがままを叱るとブイと母家出
ひらがなで母にゆつくり叱られる
叱られるより無視されるのが恐い
見込みあるやつだしっかり叱つとく
孫からのお呼び思惑あるらしい
姑さんの前だ呼び捨て許します
飛び越える幅を時々間違える
まだ脈はありそう叱つてもくれる
ゴミの日を憶えなさいと妻叱る
呼ばれても返事もしない反抗期
シンブルな料理が口に合わせてくる
逃げる幅残し忠告小出しする
恰幅は良いが小心者である
しっかりと理想の人にアブローチ
終戦のリングが見てた青い空
信号の黄の解釈に幅がある
食事制限リバウンドする秋の空
呼ぶ前にビールを出して座つてる
氣負わずに生きる歩幅は氣にしない
幅広の靴に変えたら元氣出た

弥生 紀雄 定男

朋月 日の出 ルイ子 篤子 玄也 和夫 半銭 五月 雅明 俣子 としお 伸子 かりん 公誠 千代 八千代 時雄 像山 さくら 鐘造 舞夢

終章までリツチに生きて安樂死
駆けぬよう歩幅氣にして歩いてる
短足の歩幅でみなに追いつけぬ
しぶちゃんも流感だけに愛される
母ちゃんを呼ぶと猫までついてくる
電話でも息子を叱りつける嫁
あの狭いこへおばちゃん割り込んだ
父ちゃんが呼んだらろくなことがない

川柳塔打吹

野口 節子報

日本晴れ合格通知届いたぞ
早ばやと春を届けた路の臺
七人の敵から届くおめでどう
手は届くけれど触れぬ好きな人
仙人の境地にやつと届いたぜ
紫の煙を吸ってまた生きる
紫陽花は春咲く力溜めている
紫の逆さ富士から夢描く
紫の氣品あふれるシクラメン
風呂敷に紫の世辞包み込む
けつまずき紫色の膝小僧
紫の袱紗に包むおめでどう
くちびるが紫色になる大火
白骨を紫色で包む愛
画用紙に赤青混ぜてぶつつける
ほらそこに墓が背伸びしているよ
紙人形熱い思いを込め作る

りつえ 綾乃 愿

健吾 童之介 世紀子 天笑 月子 富枝 龍枝 きみ子 完司 石花菜 照彦 和枝 禎元 たけ代 やえ 勝憲 重忠 三津子 美代子 美ツ千 和子

風揚げる尾つばは長い新聞紙
入籍も離婚届も紙一枚
ガン検診泣くも笑うも紙一重
折り紙に今年の鼠はさみ込む
ダンボールみたいな顔と面の皮
トイレットペーパーというおとし紙
自由を歌いころがって行く紙コップ
多寡が紙されど紙で指を切る
たたかれて紙風船がふくれ面
紙コップほどの軽さで飛んでいる
戦争は紙鉄砲でして欲しい
約束はキチンと紙に書いておく
鼻紙にされても君の側が好い

ローズ川柳会

山崎 君子報

ローンの残る振袖母と娘の笑顔
続編もきつこのまま変らない
善も悪も続かぬものとお説法
発車オーライ袂はさんだままデート
約束が重荷となりぬ老いの身に
師弟から続く交友四十年
打ては響く会話が人を近くする
その日まで続く私の奮闘記
振袖の時代わたくしにもあった
若いっていいな駅伝美となみだ
初詣でたもとの重い三歳児

京子 公恵 美知江 勝誉 善江 玲坊 克枝 玲子 美美子 睦子 芳光 孝恵 節子

てる みつ子 藍 哲子 トミエ 貴代子 孝一 美籠 いわゑ 義子 君子

柳界展望

館に於て開催。当日の天位。

年11月17日、於バルメイト
「出雲市教育長賞」
孤独感三面鏡に支えられ
多和敬子

憲法にこだわる名もなき
民だから 仁部 四郎
大臣が走る訂正印押しに
仁部 四郎

「出雲市川柳連盟賞」
がんばって築いた飲食衛
という評価 新家 完司
ざりざりの暮しに税務署
のぞく 岸 桂子

○「川柳塔なら」19年度最
優秀句に次の句が選ばれた。
天からの子守歌だよ千の
風 米田 恭昌

○西宮北口川柳会、平成19
年度年間賞は次の通り。
（カップ永久保持者）
（優秀賞）①小林わ②山
口光久③長浜美籠④黒田能
子⑤河原野折杭・西口いわ
あ・奥田みつ子

○19年度鳥取県川柳作家協
会賞の日満賞に次の句が入
賞。
綴じ代のような所で生き
ている。 牧野 芳光

○城北川柳会、平成19年度
最優秀賞は大内朝子さんに
決定。
岡井やすお氏（同人・千葉
県佐倉市）は19年12月4日
死去、95歳。遺言抄98頁
▽人事動向△

○19年度唐津市民文化祭は
12月2日唐津城内、埋門の
入賞。
月光浴ショパンの曲が降
りて来る 松本知恵子
○出雲総合芸術文化祭、19

大内朝子さん（参予・香芝
市）は奈良新聞「奈良柳壇」
の選者を担当。1月23日か
ら週一回の掲載が始まった。
○川柳塔わかやま吟社の役
員変更。20年1月から新主
幹に川上大輪氏が就任。事
務局を牛尾緑良氏が担当。

○すみさか川柳社の小林一
茶生誕一八〇年記念川柳誌
上大会の成績。
（第一位）
一枚を剥げば汚れない
曆 安土 理恵

▽訂正とお詫び△
2月号94P、中段27行目、
お手前↓お点前。87頁中段
15行目キミヨキヨミ。97
頁上段29行目、「飲みなは
れ」の句、作者は奥村五月
さんでした。

○第5回（平成19年）島根
県民文化祭に於て同人の賞。
（銅賞）
一枚を剥げば汚れない
曆 安土 理恵

▽常任理事会△
2月7日（木）出席15名、①各
地川柳会代表者会の具体案
②継続審議事項として役員

○川柳塔わかやま吟社の役
員変更。20年1月から新主
幹に川上大輪氏が就任。事
務局を牛尾緑良氏が担当。

▽新誌友紹介△
岸和田市 次井 義泰
紹介者 井伊 東吉
大阪狭山市 森 明信
紹介者 板尾 岳人

箕面市 今田 和宏
紹介者 穴吹 尚士
篠山市 二階 幸子
篠山市 藤井美智子

紹介者右2名遠山可住
阪南市 坂口 公子
紹介者 福本 英子
浜松市 岡田 志郎

規定の一部改正、主幹・理
事長の選挙権の範囲につい
て審議③会計部提案④定例
確認事項⑤各部報告事項⑥
その他

次回3月7日（金）午前10時、
芦屋川カレッジ特別公開講座
「木津川計の一人語り劇場」
（新派篇）

とき3月17日（月）
PM2時
ところルナホール（芦屋）
受講料500円（当日12時
30分会場にて入場券販売。
演目「金色夜叉」「婦系図」他

この欄への掲載記事、
情報を出雲市柳塔事務所へ
お送り下さい。

記事の採否と掲載号に
ついては編集部一任と
させていただきます。

編集部からお願い

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	13日(木)午後2時締切り 赤・拝む・「むさし(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
岸和田 川柳会	15日(土)「きしせん500号」記念句会 栄養・覆う・格段・キャベツ	場所=いよやかの郷 集合・南海本線岸和田駅 A.M. 10:00
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時締切り 特別・カラオケ・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	16日(日)午後1時半締切り やさしい・緊張・参加・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半締切り 砂・中流・立話	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時50分締切り 受ける・気分・近い・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見清
川柳 さんだ	18日(火)午後1時より 気配・決算・すれすれ・「自由吟」	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
東大阪市 同好会	22日(土)午後7時締切り 招く・用心・やっぱり・昔	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和歌山 三川柳会	22日(土)午後1時から 地球・似る・暮らし	勤労者総合センター 4F会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの 市川柳会	23日(日)午後2時締切り がっかり・ロッカー・芽・聴く	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん社	23日(日)午後1時より ニンマリ・もどかしい・補欠	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
南大阪 川柳会	24日(月)午後6時から 報告・注ぐ・すみません・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 松露川柳会	24日(月)午後7時半から 顔・運・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 見本・保険・問題・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京都 塔の会	31日(月)午後2時締切り ほんのり・呼ぶ・人形	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土)午後 1 時開場 しつけ・押す・びんびん・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	1 日(土)午後 2 時締切り 中・見る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	1 日(土)午後 2 時締切り 風前・海峡・長い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	4 日(月)午後 1 時半から 織る・種・こっそり	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	6 日(木)午後 1 時から 掏う・満・花道	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼 崎 いくしま	7 日(金)午後 2 時締切り 賑やか・運・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
川柳大阪	8 日(土)午後 1 時から 歴史・形・うっかり	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 みちのく	8 日(土)午後 5 時半締切り 鼻・煙草・腹痛	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土)午後 2 時締切り 窓・寝る・歩く・わくわく	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木 9-23-22 三島湊丘
川 柳 塔 打 吹	8 日(土)午後 2 時締切り 桜・巻く・愚か	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	9 日(日)午後 2 時締切り 神話・生む・ひらひら・雑詠	山本コミュニティセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(日)午後 2 時締切り 論す・ふるさと・うずうず 「これ、この、ここ」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10 日(月)午後 1 時から 代わる・綴る・さっぱり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市岡度町 2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11 日(火)午後 2 時締切り 陽・消す・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町 2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火)午後 1 時半締切り 看板・移る・だから	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼

編集後記

☆すこしずつ春に近付いているようです。三月の声を聞くとおさらばに。

☆「ま」をテーマの川柳には多数の応募をいただき有難うございました。五〇二句の応募から、番号処理による清記の上、天笑主幹が厳正な選を行い結果を四月号で発表することになっていきます。御期待下さい。

☆古今東西女性はおしゃべり(勿論私も含めて)と思っていました。

ところが麻生路郎夫人霞乃さんは大変無口な人であつたらしく、こんなエピソードが、大正14年6月号の『川柳雄誌』に載っていました。

「函館からはるる来阪された花童子の夫人と霞乃とが遅日荘の二階で会つた。女と女、春の日永、それは必然的に雲雀のように小鳥のようにプロペラが回転したものと想像をたくましくしてはいけぬ。二人は至つて無口なのだ。

お互いに初対面のお辞儀をした。そして長い間沈黙。思ひ出したように視線を合せてにつこり、そして沈黙。こつとも言わせぬ。話し声も聞こえぬ。ハハアさては便所へでも立つたのかと思つて覗いてみれば二人とも膝に手を置き端然と正座していた。それで居眠つてもいいのだ。聞いてみれば別段淋しくもないんだそう(文・遅日荘主

人)

☆目次下に楓楽理事長が書かれていますが、女性川柳家として、路郎を支え、家庭を守つた賢夫人の霞乃さん。座談会の席では司会をしたり、活発に発言をなさつていたそうです。(希)

ひとこと

ほけ防止

最近テレビではクイズ番組全盛である。「脳トレーニング」も大ブームになって久しい。昨年10月、城北川柳句会報に「川柳は認知症予防に最善効果」と題して拙文を掲載して頂いた。

脳トレーニングブームの仕掛人東北大学の川島教授の研究結果では、乗除の四則計算、難解な数式を解くよりも、川柳、俳句づくりの方が抜群に脳を活性化すること

が判明している。

川柳づくりはドラマを創造し、脳の前頭葉を刺激し若返らせるといふ。友人達から「なぜ川柳を?」と聞かれるが、この拙文のコピーを配つて、紙と鉛筆さえあればどんな妙薬よりも、「ほけ防止」に川柳が最適であると力説している。

反響は大きく、「川柳をはじめてみよう」という友人が増えている。私自身、「ほけ防止」のためにも川柳を愛し、一生の友として付き合つていきたいと思う。(伊達 郁夫)

○吉永小百合主演の「母(かあ べえ)」という映画を見てきました。彼女は映画人として、この映画にはどうしようも出演しなければならぬと思つたそうです。

○時代は第二次世界大戦前夜。治安維持法が施行され、平和主義者⇨戦争反対者は検束拘留された頃です。主人公の学者がそのために獄中死するのですが、獄中の夫とその家族を必死に守る母の話です。

○同様に、若き反戦川柳人「鶴彬(つるあきら)」は、

平和を渴望し拷問に耐えながら獄中死しました。つい先日朝日新聞「声」欄に岩佐ダン吉氏が投稿され、川柳人として鶴彬顕彰碑建立を推し進める、実行委員会の仲間たちの強い想いとその行動力が、紹介されました。そして日本各地の川柳を愛するひとたちから、建立募金賛同の声が続々と寄せられていると聞いています。

○顕彰碑には、獄中でお未来に希望をつないで詠まれた「暁を抱いて闇に在る蕾」が刻まれ、大阪衛戍監獄のあつた大阪城公園の一角に、九月十四日に建立されます。当日は、建立記念川柳大会も開催されます。○あの暗い時代に再び戻ることのないように、サユリストでない方にも、この映画をぜひ見て頂きたいとお勧めを致します。(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

都府道市
県
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「沖」 (3月15日締切)

5月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B

A

B

A

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 50000円 98000円 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

初歩教室
一路集 (3句)
〔化粧〕 (3句)
〔種〕
〔織る〕
〔こころ〕
三宅保州担当

檸檬抄 (2句)
〔沖〕
〔西〕
〔鈴〕
〔口〕
〔木〕
〔公〕
〔弘〕
〔共〕
〔選〕

愛染帖 (3句)
〔新〕
〔家〕
〔完〕
〔司〕
〔選〕

水煙抄 (8句)
〔西〕
〔出〕
〔楓〕
〔楽〕
〔選〕

川柳塔 (8句)
〔河〕
〔内〕
〔天〕
〔笑〕
〔選〕

5月号発表 (3月15日締切)

6月号
檸檬抄 「コピー」
一路集 「渡る」「歌」
「スーパー」
初歩教室 「髭」

本社3月句会

会費 1000円
投句料 500円 (切手可)

兼題
「気まずい」
「封」
「誘う」
「ビデオ」
「羽化」

席題
「矢倉五月選」
「黒田能彦選」
「藤井則彦選」
「古久保和子選」
「池口森子選」
「西口いゝゑ選」
「河内天笑選」

おはなし「遠くて近い裁判員」
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

ところ
「開催時間、締切り時間に」注意下さい。
「アウイナ大阪」4階 金剛

とき
3月7日(金) 午後1時開場・2時締切り

本社4月句会 7日(月) 午後5時半から

兼題「うっかり」「箸」「許す」
「ストレス」「約束」

第26年度 夜市川柳募集

第10回「分かる」天根夢草選
ハガキに3句 3月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇〇八年平成二十年三月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪府天王寺区大道一丁目一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇四二九八四七九番

第32回 全日本川柳2008年福岡大会 川柳作品募集要項

～ きんしゃい まつりと人情の街 ふくおかへ ～

日時 平成二十年六月八日(日) 午前九時半開場
会場 アクロス福岡イベントホール(B2)
〒八〇一〇〇〇〇 福岡市中央区天神一―一―

交通機関 JR博多駅から地下鉄で7分 福岡空港から地下鉄で11分
(以上いずれも地下鉄天神から徒歩5分)

宿題 第一部 四月十五日締切(当日消印有効)
(事前投句 高校生・一般の部)

「旗」小島 蘭幸 選 「棒」津田 暹 選
「祭」石田 一郎 選 「隠」土田 欣之 選
(事前投句、小・中学生の部)
「まつり」てじま晩秋 選 「人形」松永 千秋 選
「自由吟」安藤富久男 選

専用紙のない方は、2×16cmの句箋一枚に一句宛記入・各題
二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。
投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記
宛郵送のこと。

投句先 小中高生は投句料無料
〒五三〇一〇〇四 一 大阪市北区天神橋二丁目北一―一―
ステツブイン南森町九〇五
全日本川柳協会 宛

TEL 〇六(六三五一)二二二〇 FAX 〇六(六三五一)二四三三
郵便振替口座 〇〇九七〇一九一五七五
宿題 第二部(当日投句、十一時十分締切)
「人形」敷田 無煙 選 「屋台」三宅 保州 選
「方言」近江あきら 選

第二次選者 塩見 草映・大木 俊秀・河内 天笑
各題二句当日配布の句箋に記入

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)
表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳福岡大会実行委員長 大場 可公

△表彰式典・前夜祭ご案内▽

◎表彰式典 平成二十年六月七日(土) 午後五時半

(功労者・大会十年連続出席者・川柳文学賞)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場で

会場 ソラリア西鉄ホテル 8Fホール
〒八〇一八五八七 福岡市中央区大名二丁目六(西鉄天神駅西)

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
TEL 〇九二(七八一)〇二二一

大会・前夜祭のお問い合わせ先

〒八一一一三六二 福岡市南区長住一―五―一八
大場可公方 日川協福岡大会事務局 宛

TEL FAX 〇九二(五五一)六一三六
大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切

郵便振替口座番号 〇一七八〇一九一三四九〇〇
日川協福岡大会事務局

△宿泊・観光ご案内▽

宿 泊 ソラリア西鉄ホテル・アークホテル博多 他

宿泊料金・泊朝食付・税込み 一五、〇〇〇円〜七、〇〇〇円
航空・宿泊バックもあります。

観光 光▽初夏の筑紫路を巡る(特別史跡大宰府政庁跡地)
六月七日(土) 正午〜十七時 四、五〇〇円
JR博多駅新幹線口 十一時半集合

▽博多湾ディナークルーズ 最少催行人員 四十五名様
六月八日(日) 十九時 五、〇〇〇円

宿 泊、観光の申し込みは、別途(八方キ)申込書に記入し、
ご送付下さい。

四月十五日必着です。

宿 泊・観光申し込み・問い合わせ先

トップツアー 福岡支店 担当者・千代島 誠
TEL 〇九二(七三九)〇〇一〇 FAX 〇九二(七三九)七七七三